

# 京都府遺跡調査報告集

## 第144冊

1. 鳥取橋遺跡第2次
2. 大内北古墳群
3. 加塚遺跡
4. 長岡京跡右京第997次(7ANGKN-3地区)・松田遺跡
5. 長岡京跡右京第998次(7ANNKN-7地区)・友岡遺跡

2011

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



大内北古墳群全景(北東から)

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、本年度で創立30年を迎えました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成22年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した鳥取橋遺跡、加塚遺跡、京都府道路公社の依頼を受けて実施した大内北古墳群、西日本高速道路株式会社関西支社の依頼を受けて実施した長岡京跡右京第997次・松田遺跡、独立行政法人雇用・能力開発機構の依頼を受けて実施した長岡京跡右京第998次・友岡遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された京都府建設交通部、京都府道路公社、独立行政法人雇用・能力開発機構、西日本高速道路株式会社関西支社をはじめ、京都府教育委員会・京丹後市教育委員会・亀岡市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 上 田 正 昭

# 例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

鳥取橋遺跡第2次

大内北古墳群

加塚遺跡

長岡京跡右京第997次(7ANGKN-3地区)・松田遺跡

長岡京跡右京第998次(7ANNKN-7地区)・友岡遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	鳥取橋遺跡第2次	京丹後市弥栄町和田野地内	平成22年11月17日～12月21日	京都府建設交通部	石尾政信
2.	大内北古墳群	京丹後市大宮町森本星ノ内、三重大内・大池	平成22年4月30日～9月22日	京都府道路公社	辻本和美
3.	加塚遺跡	亀岡市安町小屋場	平成22年12月8日～平成23年1月18日	京都府建設交通部	田代弘
4.	長岡京跡右京第997次・松田遺跡	乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田	平成22年6月2日～9月29日	西日本高速道路株式会社関西支社	岡崎研一・田代弘
5.	長岡京跡右京第998次・友岡遺跡	長岡京市友岡1丁目2番1号	平成22年5月22日～9月10日	独立行政法人雇用・能力開発機構	石尾政信・田代弘

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

# 本文目次

1. 鳥取橋遺跡第2次発掘調査報告	1
2. 大内北古墳群発掘調査報告	7
3. 加塚遺跡発掘調査報告	37
4. 長岡京跡右京第997次(7ANGKN-3地区)・松田遺跡発掘調査報告	41
5. 長岡京跡右京第998次(7ANNKN-7地区)・友岡遺跡発掘調査報告	71

# 挿図目次

## 1. 鳥取橋遺跡第2次

第1図 調査地と周辺遺跡	1
第2図 トレンチ配置図	2
第3図 2～5トレンチ土層図	3
第4図 6・7トレンチ土層図	4
第5図 出土遺物実測図	6

## 2. 大内北古墳群

第1図 調査地位置図	8
第2図 周辺遺跡及び調査地位置図	9
第3図 大内北古墳群調査前地形図	10
第4図 3号墳墳丘及び埋葬施設配置図	12
第5図 3号墳埋葬施設S X01平・断面図	14
第6図 3号墳埋葬施設S X01竪穴式石槨実測図	15
第7図 3号墳埋葬施設S X02平・断面図及び石棺実測図	17
第8図 3号墳埋葬施設S X03平・断面図	19
第9図 3号墳埋葬施設S X05平・断面図	21
第10図 3号墳埋葬施設S X06平・断面図	23
第11図 3号墳埋葬施設S X04・09平・断面図	24
第12図 3号墳埋葬施設S X07～09平・断面図	26
第13図 3号墳出土鉄器	27
第14図 3号墳出土土器	28
第15図 大内北古墳群(1・2・4・5号墳)調査地及び土層図	29

第16図	2・3地区古墳状隆起調査トレンチ及び土層図	31
第17図	3号墳埋葬施設配置図	33
第18図	3号墳埋葬施設変遷想定図	34
第19図	3号墳石材顕微鏡写真	36

### 3. 加塚遺跡

第1図	調査地と周辺遺跡	37
第2図	トレンチ配置図	38
第3図	第1・2トレンチ実測図	39
第4図	第1・2トレンチ土層断面実測図	40

### 4. 長岡京跡右京第997次・松田遺跡

第1図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	42
第2図	松田遺跡調査地配置図	45
第3図	Aトレンチ土層断面図	46
第4図	Bトレンチ土層断面図(1)	47
第5図	Bトレンチ土層断面図(2)	48
第6図	遺構配置図	49
第7図	掘立柱建物跡S B01、柵列S A76、溝S D86実測図	50
第8図	掘立柱建物跡S B01周辺遺物出土状況図	51
第9図	掘立柱建物跡S B02実測図	52
第10図	掘立柱建物跡S B03実測図	53
第11図	配石遺構S K45実測図	54
第12図	掘立柱建物跡S B04実測図	54
第13図	柵列S A35実測図	55
第14図	柱穴内遺物・根石検出状況図	56
第15図	井戸S E10・38実測図	57
第16図	土坑S K04・63～65実測図	58
第17図	溝S D70実測図	59
第18図	出土遺物実測図(1)	61
第19図	出土遺物実測図(2)	63
第20図	出土遺物実測図(3)	65
第21図	出土遺物実測図(4)	66
第22図	出土遺物実測図(5)	67
第23図	出土遺物実測図(6)	68

第24図	出土遺物実測図(7)	69
------	------------	----

## 5. 長岡京跡右京第998次・友岡遺跡

第1図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	71
第2図	周辺調査地及び今回調査地平面図	72
第3図	調査地平面図	74
第4図	調査地北・西壁土層断面図	75
第5図	調査地南壁土層断面図	76
第6図	湿地状堆積S X01土層断面図	77
第7図	土坑S K02・06、井戸S E04実測図	77
第8図	出土遺物実測図(1)	79
第9図	出土遺物実測図(2)	80
第10図	出土遺物実測図(3)	82
第11図	出土遺物実測図(4)	83
第12図	出土遺物実測図(5)	84

# 付 表 目 次

## 2. 大内北古墳群

付表1	埋葬施設規模一覧	13
付表2	大内北古墳群調査一覧	30
付表3	3号墳埋葬施設形式一覧	33
付表4	京丹後市域の竪穴式石室(石槨)の規模比較	35

# 図 版 目 次

## 1. 鳥取橋遺跡第2次

図版第1	(1) 調査前、鳥取橋西詰より南を望む(北から)
	(2) 1トレンチ全景(西から)
	(3) 1トレンチ東壁断面(西から)
図版第2	(1) 2トレンチ全景(北から)
	(2) 2トレンチ西壁断面(東から)
	(3) 3トレンチ全景(北から)

- 図版第3 (1) 4トレンチ全景(北から)  
 (2) 4トレンチ西壁断面(東から)  
 (3) 4トレンチ南部、下層掘削状況(北西から)
- 図版第4 (1) 5トレンチ全景(北から)  
 (2) 5トレンチ西壁断面(東から)  
 (3) 5トレンチ南部下層掘削状況(北東から)
- 図版第5 (1) 6トレンチ全景(北から)  
 (2) 6トレンチ西壁断面(東から)  
 (3) 7トレンチ重機掘削(南から)
- 図版第6 (1) 7トレンチ全景(北から)  
 (2) 7トレンチ東壁断面(西から)  
 (3) 7トレンチから北を望む(南から)

## 2. 大内北古墳群

- 図版第1 大内北古墳群全景(南から)
- 図版第2 (1)大内北古墳群全景(北から)  
 (2)大内北古墳群全景(南から)
- 図版第3 (1)大内北古墳群全景(北東から)  
 (2)大内北古墳群全景(南西から)
- 図版第4 (1)大内北古墳群調査前状況(南西から)  
 (2) 3号墳全景(北西から)
- 図版第5 (1) 3・5号墳全景(南西から)  
 (2) 5号墳全景(南西から)
- 図版第6 (1) 1・2号墳調査状況(南東から)  
 (2) 1・2号墳調査状況(北から)
- 図版第7 (1)大内北古墳群全景(上が北東)  
 (2)大内北古墳群全景(上が北東)
- 図版第8 (1)埋葬施設 S X01検出状況(北西から)  
 (2)埋葬施設 S X01天井石(北西から)
- 図版第9 (1)埋葬施設 S X01石槨上面(北西から)  
 (2)埋葬施設 S X01石槨(北西から)
- 図版第10 (1)埋葬施設 S X01石槨(東から)  
 (2)埋葬施設 S X01石槨(南から)
- 図版第11 (1)埋葬施設 S X01石槨西側部、遺物出土状況(東から)  
 (2)埋葬施設 S X01石槨北壁(南から)



- 図版第12 (1)埋葬施設 S X01石槨裏込め石(南から)  
(2)埋葬施設 S X01石槨最下段側石(西から)
- 図版第13 (1)埋葬施設 S X01石槨最下段側石(東から)  
(2)埋葬施設 S X01石槨西壁裏込め石(西から)  
(3)埋葬施設 S X01石槨西壁背後支石(西から)
- 図版第14 (1)埋葬施設 S X02・03検出状況(北西から)  
(2)埋葬施設 S X02・03検出状況(南西から)
- 図版第15 (1)埋葬施設 S X02蓋石(北西から)  
(2)埋葬施設 S X02蓋石(北東から)
- 図版第16 (1)埋葬施設 S X02石槨上部(北東から)  
(2)埋葬施設 S X02石槨(南東から)
- 図版第17 (1)埋葬施設 S X02石槨(北東から)  
(2)埋葬施設 S X02石槨(南東から)  
(3)埋葬施設 S X02石槨壁面赤色顔料(南西から)
- 図版第18 (1)埋葬施設 S X02石槨(北東から)  
(2)埋葬施設 S X02石槨(北西から)
- 図版第19 (1)埋葬施設 S X03検出状況(西から)  
(2)埋葬施設 S X03(北から)
- 図版第20 (1)埋葬施設 S X03蓋石(西から)  
(2)埋葬施設 S X03石槨上部(北から)
- 図版第21 (1)埋葬施設 S X03石槨(西から)  
(2)埋葬施設 S X03石槨(南から)
- 図版第22 (1)埋葬施設 S X05石槨上部(南西から)  
(2)埋葬施設 S X05石槨上部(北東から)
- 図版第23 (1)埋葬施設 S X05石槨(北東から)  
(2)埋葬施設 S X05墓壇底部(北西から)
- 図版第24 (1)埋葬施設 S X02・03・06全景(南西から)  
(2)埋葬施設 S X06(南から)
- 図版第25 (1)埋葬施設 S X05検出状況(南東から)  
(2)埋葬施設 S X05検出状況(南西から)
- 図版第26 (1)埋葬施設 S X06蓋石(北西から)  
(2)埋葬施設 S X06石槨上部(北東から)
- 図版第27 (1)埋葬施設 S X06墓壇(北西から)  
(2)埋葬施設 S X06(北東から)  
(3)3号墳出土遺物

- 図版第28 (1) 埋葬施設 S X04(西から)  
 (2) 埋葬施設 S X04(南から)
- 図版第29 (1) 埋葬施設 S X09(南西から)  
 (2) 埋葬施設 S X09(北西から)
- 図版第30 (1) 埋葬施設 S X07～09(南西から)  
 (2) 埋葬施設 S X07～09(北西から)
- 図版第31 (1) 2地区古墳状隆起全景(上が北)  
 (2) 3地区古墳状隆起全景(上が西)
- 図版第32 (1) 1地区古墳状隆起調査前(北東から)  
 (2) 1地区古墳状隆起調査状況(北西から)  
 (3) 3地区古墳状隆起調査状況(南西から)
- 図版第33 (1) 2地区古墳状隆起調査状況(北西から)  
 (2) 2地区古墳状隆起調査状況(北西から)  
 (3) 2地区古墳状隆起調査状況(北東から)
- 図版第34 (1) 出土鉄器(A面)  
 (2) 出土鉄器(B面)

### 3. 加塚遺跡

- 図版第1 (1) 調査地遠景(南から)  
 (2) 第1トレンチ重機掘削状況(西から)  
 (3) 第1トレンチ測量状況(東から)
- 図版第2 (1) 第1トレンチ遺構検出作業状況(北西から)  
 (2) 第1トレンチ南壁堆積状況(北から)  
 (3) 第1トレンチ完掘状況(西から)
- 図版第3 (1) 第2トレンチ荒掘り状況(東から)  
 (2) 第2トレンチ遺構精査状況(東から)  
 (3) 第2トレンチ実測作業状況(北東から)
- 図版第4 (1) 第2トレンチ完掘状況(南東から)  
 (2) 第2トレンチ完掘状況(西から)  
 (3) 調査終了後、重機による埋め戻し作業状況

### 4. 長岡京跡右京第997次・松田遺跡

- 図版第1 (1) 松田遺跡調査地全景(西から)  
 (2) 松田遺跡調査地遠景(東から)
- 図版第2 (1) 松田遺跡調査地全景(上空から、右が北)

- (2) 掘立柱建物跡 S B 2～4 全景(上空から、右が北)
- 図版第3 (1) Aトレンチ(南北)近景(南東から)  
 (2) Aトレンチ(南北)近景(北東から)  
 (3) Aトレンチ(南東隅)近景(北西から)
- 図版第4 (1) Bトレンチ(南北)近景(南西から)  
 (2) Bトレンチ(東西)近景(南西から)  
 (3) Bトレンチ(南北)近景(南から)
- 図版第5 (1) 拡張区全景(南西から)  
 (2) 拡張区南壁断面(北西から)  
 (3) 拡張区西壁断面(北東から)
- 図版第6 (1) 掘立柱建物跡 S B 01近景(南から)  
 (2) 掘立柱建物跡 S B 01近景(南から)  
 (3) 掘立柱建物跡 S B 01近景(北から)
- 図版第7 (1) 溝 S D 86堆積断面(南から)  
 (2) 溝 S D 86堆積断面(南から)  
 (3) 溝 S D 86堆積断面(南から)
- 図版第8 (1) 掘立柱建物跡 S B 01北側遺物出土状況(東から)  
 (2) 掘立柱建物跡 S B 01北西側遺物出土状況(南から)  
 (3) 掘立柱建物跡 S B 01北西側遺物出土状況(東から)
- 図版第9 (1) 掘立柱建物跡 S B 02～04、井戸 S E 10・38全景(上空から、右が北)  
 (2) 掘立柱建物跡 S B 02～04全景(南から)  
 (3) 掘立柱建物跡 S B 02～04全景(北から)
- 図版第10 柱穴近景(根石をもつ柱穴)
- 図版第11 柱穴近景(柱穴内遺物出土状況)
- 図版第12 (1) 配石遺構 S K 45近景(北から)  
 (2) 井戸 S E 10・38近景(南から、手前が S E 10)  
 (3) 井戸 S E 38断ち割り状況(西から)
- 図版第13 (1) 井戸 S E 10断ち割り状況(西から)  
 (2) 井戸 S E 10木柁検出状況(西から)  
 (3) 井戸 S E 10木柁近景(西から)
- 図版第14 (1) 土坑 S K 04近景(南から、上層遺物)  
 (2) 土坑 S K 04近景(南から、下層遺物)  
 (3) 土坑 S K 04近景(東から、下層遺物)
- 図版第15 (1) 土坑 S K 04遺物出土状況(東から)  
 (2) 土坑 S K 04遺物出土状況(東から)

- (3)土坑 S K63近景(南から)
- 図版第16 (1)溝 S D70、3区遺物出土状況(東から)  
(2)溝 S D70、3区遺物出土状況(東から)  
(3)白磁合子蓋出土状況(北から)
- 図版第17 出土遺物 1
- 図版第18 出土遺物 2
- 図版第19 出土遺物 3
- 図版第20 出土遺物 4

## 5. 長岡京跡右京第998次・友岡遺跡

- 図版第1 (1)調査地全景(空撮写真：北西から)  
(2)調査地全景(空撮写真：東から)
- 図版第2 (1)調査地全景(空撮写真：西北西から)  
(2)調査地全景(空撮写真：上が南)
- 図版第3 (1)調査前(南西から)  
(2)西側トレンチ北部(南から)  
(3)西側トレンチ全景(北から)
- 図版第4 (1)調査地南部湿地状堆積 S X01(東から)  
(2)調査地南部湿地状堆積 S X01(東から)  
(3)調査地南部湿地状堆積 S X01(西から)
- 図版第5 (1)西側トレンチ北壁断面  
(2)西側トレンチ西壁断面(東から)  
(3)南東部南壁断面(北西から)
- 図版第6 (1)土坑 S K02完掘状況(東から)  
(2)井戸 S E03(東から)  
(3)井戸 S E04半割状況(南東から)
- 図版第7 (1)土坑 S K05半割状況(東から)  
(2)土坑 S K05、溝 S D07(南東から)  
(3)南部湿地状堆積 S X01南北アゼ断面(北東から)
- 図版第8 (1)湿地状堆積 S X01土器出土状況  
(2)南東部土馬出土状況  
(3)湿地状堆積 S X01土器出土状況
- 図版第9 (1)南部全景(北から)  
(2)南部湿地状堆積 S X01掘削状況(北西から)  
(3)湿地状堆積 S X01輸入銭出土状況

図版第10 出土遺物 1

図版第11 出土遺物 2

図版第12 (1)出土遺物 3

(2)出土遺物 3 裏面

# 1.鳥取橋遺跡第2次発掘調査報告

## 1. はじめに

今回の調査は、一般国道482号道路新設改良事業(丹後弥栄道路)に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

鳥取橋遺跡は、京都府京丹後市弥栄町和田野車田から井辺森山にかけての遺物散布地である。鳥取橋遺跡の周辺は、竹野川とその支流である鳥取川・木橋川・奈具川などによって形成された沖積低地が広がっており、現在は水田として利用されている。この沖積低地は東西1～1.5kmの幅をなしており、鳥取橋遺跡はこの沖積低地のほぼ中央部に位置している。1961年に竹野川堤防の基部あたりで縄文時代ないし弥生時代前期と推定されるほぼ完形の土器1点が採集されたことから、散布地として認知された。

今回の調査は、平成22年度の5月から7月にかけて実施した鳥取橋より北側の第1次調査に次ぐもので、鳥取橋より南側が調査対象地である。第1次調査では河川堆積の中から弥生時代前期～中世にいたる遺物が出土したが、顕著な遺構は確認できなかった。

現地調査は、平成22年11月17日に着手し、12月21日にすべてを終了した。

調査期間中は京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市弥栄市民局をはじめとする関係諸機関、地元自治会からご教示、ご協力をいただいた。また、発掘調査には調査補助員・作業員として地元の方々に参加していただいた。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府交通建設部が負担した。本報告は石尾が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調

査第1係長 小池 寛

同 専門調査員 石尾

政信

調査場所 京丹後市弥栄町和田野地  
内

現地調査期間 平成22年11月17日～12月  
21日

調査面積 285㎡



第1図 調査地と周辺遺跡  
(国土地理院 1/50,000 網野・宮津)

## 2. 調査成果

道路予定地内では、すでに進入用仮設道路等の工事が行われていたため、仮設道路を避けて7か所の調査トレンチを設定した。トレンチは北から1～7トレンチと呼称する。

調査は、各トレンチを重機により掘削を行い、安定した地盤を探し、その後人力で掘り下げながら遺構・遺物の検出に努め、遺構・遺物の記録を作成するものである。しかし、今回の調査では、安定した地盤がほとんどのトレンチで確認できなかった。各トレンチから少量の土器片が出

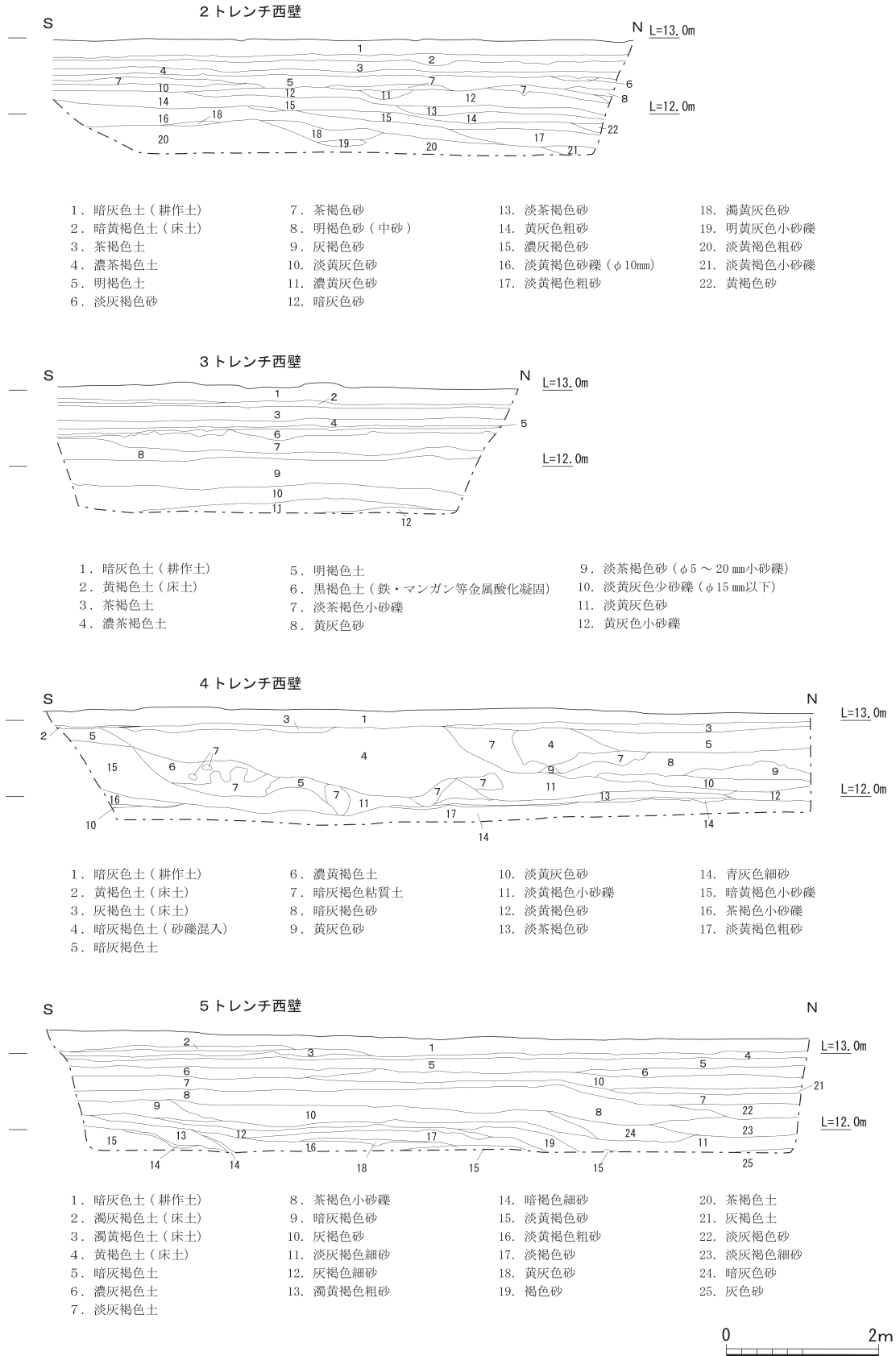


第2図 トレンチ配置図

土したが、遺構に伴うものでなく周辺から流入したものであった。このため、各トレンチの位置と規模の測量、堆積状況の記録(図面・写真)を作成する作業を行った。各トレンチの堆積状況は以下のとおりであった。

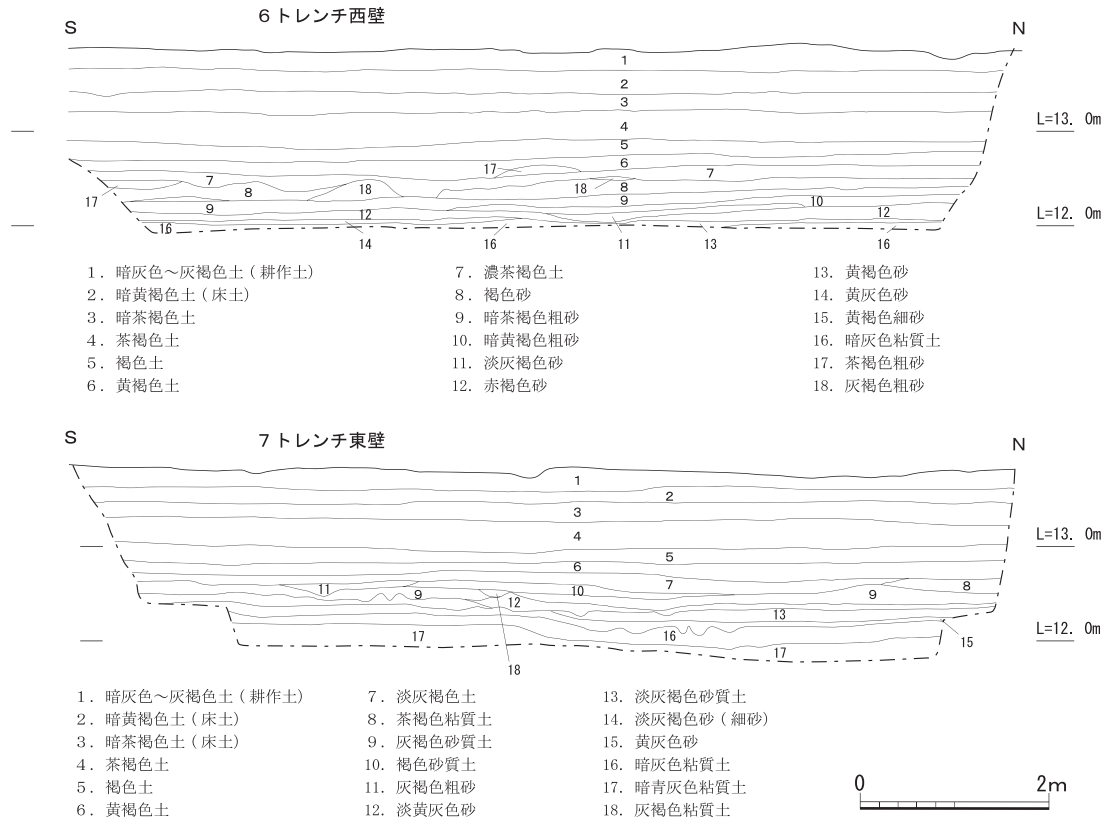
**1 トレンチ** 鳥取橋の南西の水田に設定した5×5mのトレンチである。地表面の標高は約12.6mで、地表から1.4mまで重機で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。周辺の工事のための排土置き場となるため、写真撮影後すぐに埋め戻した。トレンチ壁面の土層堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・濁赤褐色土(床土)の下に、3層の灰褐色土・暗灰褐色土が堆積していた。旧耕作土と思われる。その下に淡褐色・褐色の砂質土、暗灰色・暗青灰色の粘質土が堆積する。旧耕作土層から近世陶器(すり鉢)が出土している。小片のため図化できない。

**2 トレンチ** 鳥取橋から250m南の水田に設定した4.5×7



第3図 2～5トレンチ土層図





第4図 6・7トレンチ土層図

mのトレンチである。地表面の標高は約13mである。標高11.5mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・暗黄褐色土(床土)の下に、茶褐色土(3層)・濃茶褐色土(4層)・明褐色土(5層)が堆積し旧耕作土の重層がみられた。その下に淡黄灰色砂(10層)・淡黄褐色小砂礫(16層)・淡黄褐色粗砂(20層)などが堆積していた。東西壁および北壁の観察から、砂・小砂礫の堆積状況は南西方向から北東方向に流れた様相であった。砂層の上位から須恵器片・土師器片が出土した。断面観察後、重機により北部で標高10.5mまで掘削したが安定した面はなく、砂・小砂礫が互層となっていた。砂層から土師器の小片が出土した。小片のため図化していない。

**3 トレンチ** 2トレンチの南の水田に設定した3×6mのトレンチである。地表面の標高は約13mである。標高11.4mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・黄褐色土(床土)の下に、3トレンチ同様に茶褐色土(3層)・濃茶褐色土(4層)が堆積し旧耕作土の重層がみられた。その下に薄い明褐色土(5層)と鉄分・マンガンなどが凝固した黒褐色土(6層)が堆積していた。この下に淡茶褐色小砂礫(7層)・黄灰色砂(8層)・淡茶褐色砂(9層)・淡黄灰色小砂礫(10層)などが堆積していた。淡黄灰色砂(11層)・黄灰色小砂礫(12層)から土師器の小片が出土した。小片のため図化不能である。トレンチ幅が狭いため下層の掘削は行っていない。

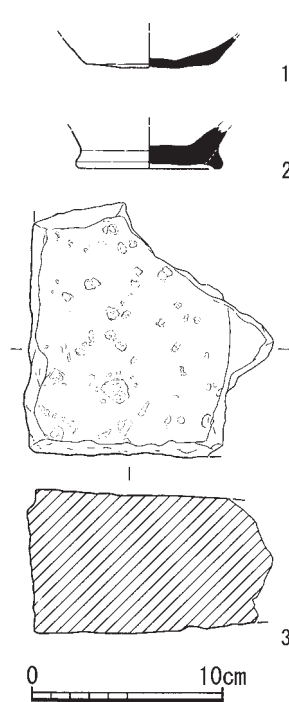
**4 トレンチ** 鳥取橋から南320mの地点で、3トレンチの南の水田に設定した5×10mのトレンチである。地表面の標高は約13.2mである。標高11.7mまで掘り下げたが遺構は検出していない。

トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・黄褐色土(床土)・灰褐色土(床土2)の下に、暗灰褐色土(4層)・濃黄褐色土(6層)・暗灰褐色粘質土(7層)が複雑に堆積していた。南西方向からの流入と思われる。その下に北で暗灰褐色砂(8層)・黄灰色砂(9層)・淡黄灰色砂(10層)など、南で暗黄褐色小砂礫(15層)・茶褐色小砂礫(16層)が堆積していた。これらの下に淡黄褐色粗砂(17層)が堆積する。壁面精査中および淡黄褐色粗砂から土師器小片が出土した。断面観察後、重機により南端で標高10.3mまで掘削したところ、湧水がみられた。下層に淡黄褐色砂・赤褐色砂・黄灰色砂が堆積するが安定した面とは思えない。黄灰色砂層から土師器の小片が出土した。出土した土師器小片はいずれも図化不能である。

5 トレンチ 4 トレンチの南南西の水田に設定した5×10mのトレンチである。地表面の標高は約13.2mである。標高11.7mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・濁灰褐色土(床土)・濁黄褐色土(床土)・黄褐色土(床土)の下に、旧耕作土の暗灰褐色土(5層)が堆積する。その下に濃灰褐色土(6層)・茶褐色土(20層)・灰褐色土(21層)・淡茶褐色土(7層)が堆積する。この下に南では、茶褐色小砂礫(8層)・暗灰褐色砂(9層)・灰褐色砂(10層)・淡灰褐色細砂(11層)・灰褐色細砂(12層)・濁黄褐色粗砂(13層)・淡黄褐色砂(15層)などが堆積する。中央では灰褐色細砂の下に淡褐色砂(17層)・淡黄褐色粗砂(16層)が堆積する。北では淡灰褐色細砂(11層)の上に淡灰褐色細砂(23層)・暗灰色砂(24層)が堆積する。東西壁および南壁の堆積状況を観察すると、南西方向から北東方向に流れた様相であった。淡黄褐色砂(15層)・淡黄褐色粗砂(16層)から土師器の小片が出土した。壁面観察後トレンチ南端を重機により標高10.2mまで掘り下げたところ、淡黄褐色砂(15層)の下に淡灰色砂・淡赤褐色砂・黄灰色砂が堆積し、湧水がみられた。黄灰色砂から土師器の小片が出土した。いずれも小片で図化できない。

6 トレンチ 鳥取橋から南370mの地点で、5 トレンチの南西に設定した5×10mのトレンチである。6 トレンチを設定した場所から南側は約180mにわたって、いわゆる島畑のように周囲の水田面より約0.6m高くなり、畑地として利用されている。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色～灰褐色土(耕作土)の下に暗黄褐色土(2層)・暗茶褐色土(3層)・茶褐色土(4層)・褐色土(5層)・黄褐色土(6層)・濃茶褐色土(7層)が堆積する。明瞭な床土はなく、耕作土が重層したものであろう。その下に褐色砂(8層)・暗茶褐色粗砂(9層)・暗黄褐色粗砂(10層)ほかの砂層が堆積する。砂層の下に暗灰色粘質土(16層)が堆積していた。トレンチ西半分の暗灰色粘質土面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。また、暗灰色粘質土より上位の砂層からの湧水が激しく下層の掘削を断念した。一部の深掘りで暗灰色粘質土は0.2m以上あることがわかった。遺物は出土していない。

7 トレンチ 6 トレンチの南に設定した6×10mのトレンチである。東壁の状況は、6 トレンチ西壁と同様に、暗灰色～灰褐色土(耕作土)以下、黄褐色土(6層)まで同じ堆積状況である。黄褐色土(6層)の下に淡灰褐色土(7層)・茶褐色粘質土(8層)・灰褐色砂質土(9層)・灰色砂質土(10層)が堆積する。その下に淡黄灰色砂(12層)・淡灰褐色砂質土(13層)・淡灰褐色細砂(14層)・黄灰色砂(15層)が堆積する。砂層の下が暗灰色粘質土(16層)・暗青灰色粘質土(17層)となる。暗



第5図 出土遺物実測図

- 灰色粘質土上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。北部の
- 1 暗灰色粘質土上面から凝灰岩が、淡灰褐色細砂(14層)・黄灰色砂(15層)から土師器椀が出土した。西側断面の掘削中に黄褐色土(6層)から土
  - 2 師器の底部が出土した。土器は周辺から流入したものであろう。

### 3. 出土遺物

出土遺物は、土師器・須恵器・陶磁器などの小片が多く、合計して整理箱に1箱である。以下に実測できたものについて記述する。

1は7トレンチの淡灰褐色細砂(14層)または黄灰色砂(15層)から出土した土師器椀である。胎土に0.5mm程度の白色・灰色の砂粒を含み緻密で、焼成は良く、にぶい橙色を呈す。底部はヘラ切りで、内面にロクロ成形の痕跡をとどめる。底径6.6cm。13世紀以降のものである。

2は7トレンチ西断面の黄褐色土(6層)から出土した土師器杯または鉢の底部である。胎土に0.5mm程度の白色の砂粒を含み緻密で、焼成は良く外側が淡茶褐色を呈し、断面をみると黒灰色を呈す部分がある。

底部に横に張り出した高台を貼り付ける。底部径7cm。13世紀以降のものである。

3は7トレンチの暗灰色粘質土上面の砂層から出土した凝灰岩製の石製品である。最大長13.3cm、最大幅13.1cm、厚さ7.7~6.7cmを測る。板状の素材を方形に切り出した後、表面を敲打して整形している。塼状を呈する。

### 4. まとめ

今回の調査は、鳥取橋遺跡における2回目の調査で、先述のように、各トレンチとも安定した面がなく遺構を検出していない。出土遺物も整理箱に1箱と少量であり、小片であるため図化できるものが3点しかなかった。土器はいずれも河川堆積の砂層などから出土している。

各トレンチとも耕作土の下に旧耕作土の層序が幾重にもみられることから、耕作土面のかさ上げが何回か行われたことがわかる。旧耕作土の下位には砂・小砂礫などが堆積しており、2・5トレンチの断面観察では、南西方向から北東方向に流れた様相が認められた。4トレンチでは、暗灰褐色土(4層)・濃黄褐色土(6層)に暗灰褐色粘質土(7層)が混じり、上流(南西)から耕作土などが押し流された様相であった。これらは木橋川により運ばれたものであろう。

鳥取橋遺跡推定範囲の南部に相当する2~5トレンチでも安定面は確認されず、出土遺物も少量で小片であった。今回の調査地は、竹野川と鳥取川・木橋川の合流地点にあたり、遺構面は周辺に存在しない可能性が高く、下流側の鳥取橋周辺に遺構・遺物の広がりがあるものと考えられる。また、6・7トレンチでは、暗灰色粘質土面で遺構が検出されなかったが、暗灰色粘質土が周辺に広がり安定面を形成していたと考えれば、周囲から若干高い島畑状の場所にかつて生活面が存在していた可能性もある。

## 2.大内北古墳群発掘調査報告

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(野田川大宮道路)の新設工事に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施したものである。今回の道路建設予定地内の遺跡の取り扱いについて、京都府教育庁指導部文化財保護課と京都府道路公社による協議の結果、周知の遺跡である大内北古墳群と、分布調査によって新たに確認された2か所の古墳状の隆起地点を対象に発掘調査を実施することになった。

調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市子供みらい課、大宮町各自治会、地元三重・森本区をはじめ多くの関係機関、方々からご指導、ご協力をいただいた。また、現地調査に際しては、調査補助員をはじめ、大宮町在住の作業員の方々には記録的な猛暑のなか困難な山上での作業に参加いただいた。心より謝意を表したい。

なお、発掘調査に係る経費は全額、京都府道路公社が負担した。なお、本報告は辻本が執筆した。本文中で表示した国土座標は、世界測地系を用いた。

**現地調査責任者** 調査第2課長 肥後弘幸

**調査担当者** 調査第2課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 辻本和美

同 主任調査員 竹原一彦

同 主査調査員 柴 暁彦

**調査場所** 京丹後市大宮町森本星ノ内、三重大内・大池

**現地調査期間** 平成22年4月30日～9月22日

**調査面積** 1,200㎡

### 2. 位置と環境(第1・2図)

京丹後市大宮町は、丹後半島の中央部に位置し、北東部には標高620mの高尾山を主峰とする山塊が連なる。竹野川はこの高尾山山系に源を発し、丹後半島を貫流して日本海に注ぐ。大内北古墳群は、竹野川の上流部にある三重谷と呼ばれる南北に長い狭隘な谷平野の縁辺に位置し、標高115mの丘陵尾根端部に立地する。同一丘陵上には、大内古墳群(16基)・大内東古墳群(3基)が分布している。このうち大内1号墳は調査が行われており、長径約25mを測る楕円形墳で、墳丘中央部から割竹形木棺を納めた内法長2.7m、幅0.7mの竪穴式石室1基が検出されている。石室内からは鉄製武器類や農具類が出土しており、築造時期は4世紀後半から5世紀前半頃と推定されている。また、大内古墳群の丘陵下には、弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡とみ



第1図 調査地位置図

られる三重遺跡が分布する。

三重谷周辺には、このほかにも数多くの遺跡・古墳群が分布していることや、東側の丘陵尾根部を越えて阿蘇海側に通ずる交通上の位置にあることからみて、早くから開けた地域であったと考えられる。

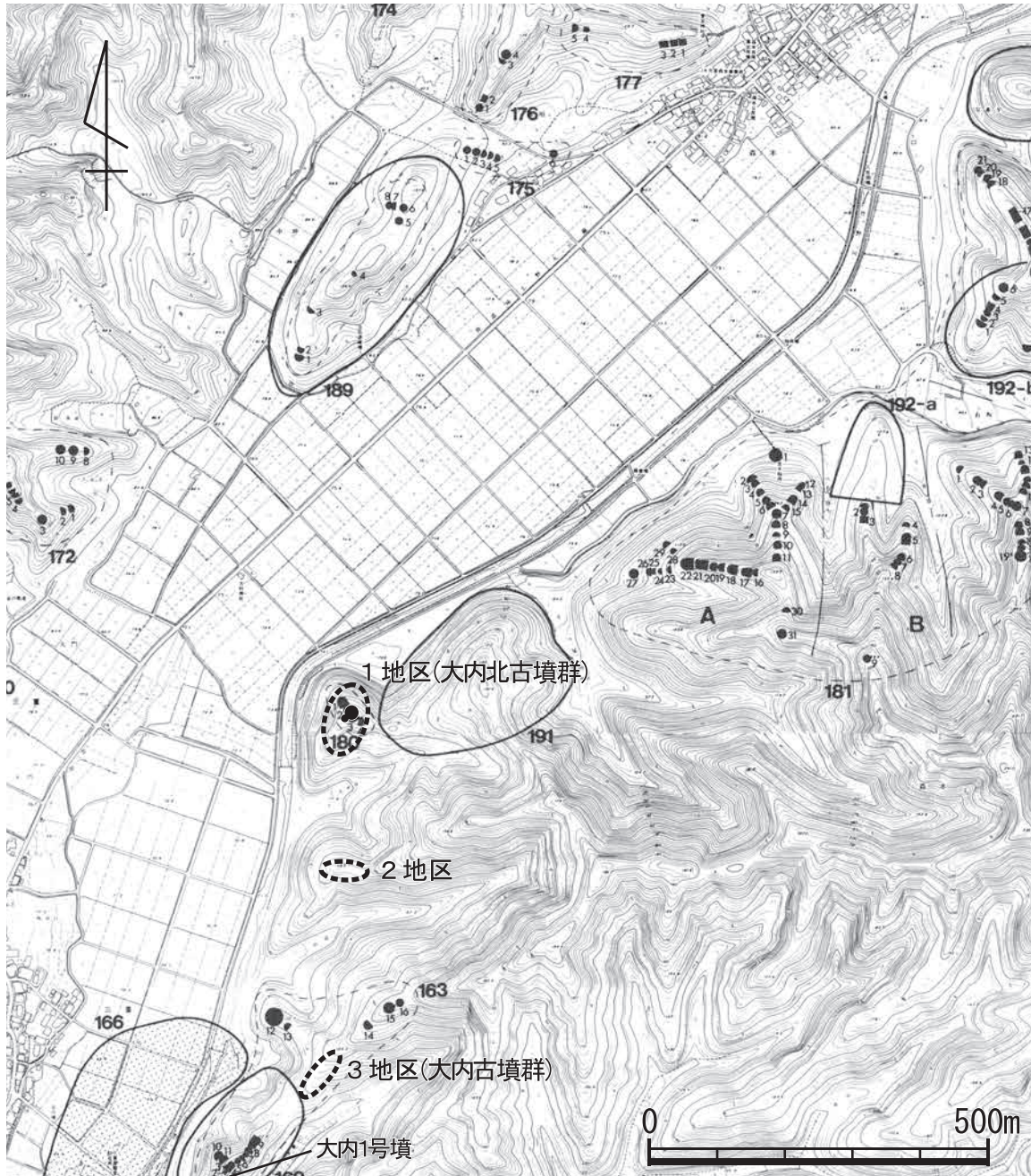
今回調査を行った大内北3号墳と地理的・年代的に比較的近い古墳としては、大谷古墳があげられる。大谷古墳は同市大宮町三坂に所在した全長32mの帆立貝式前方後円墳で、後円部中央に設けられた赤色顔料塗りの組合式石棺内から熟年女性の人骨とともに、捩文鏡、玉類(硬玉製勾玉・ガラス玉)、鉄斧・鉄剣・刀子が出土している。築造時期については、古墳時代前期末～中期前葉に比定されており、大内北3号墳と同様に組合式石棺を主体部とする古墳として注目される。

### 3. 調査の経過

今回の道路建設予定地における分布調査の結果、総長約800mの間に、古墳状の隆起を呈するか所が、大内北古墳群のほかに2か所で確認された。これらについて古墳の有無を確認するための試掘調査を実施した。地区の名称については、大内北古墳群を1地区とし、この南側にあたる丘陵部を2地区、3地区と呼称する(第2図)。

調査対象地となったそれぞれの地区の現状は山林であり、調査にあたっては、まず樹木伐採から開始した。その後、ラジコンヘリによる調査前の空中写真撮影と地形測量を行った。また、1地区の大内北古墳群については、細部の地形を補足的に測量した。

発掘調査はまず、1地区から開始し、2地区、3地区の順に進めた。結果的に、2・3地区では古墳の兆候は得られなかった。多数の埋葬施設が検出された1地区の大内北3号墳については、再度8月20日にラジコンヘリによる空中写真撮影と調査地の遺構実測を行った。また、調査の終



第2図 周辺遺跡及び調査地位置図

(『大宮町遺跡地図 京都府大宮町文化財調査報告』第17集 1999から転載・改変)

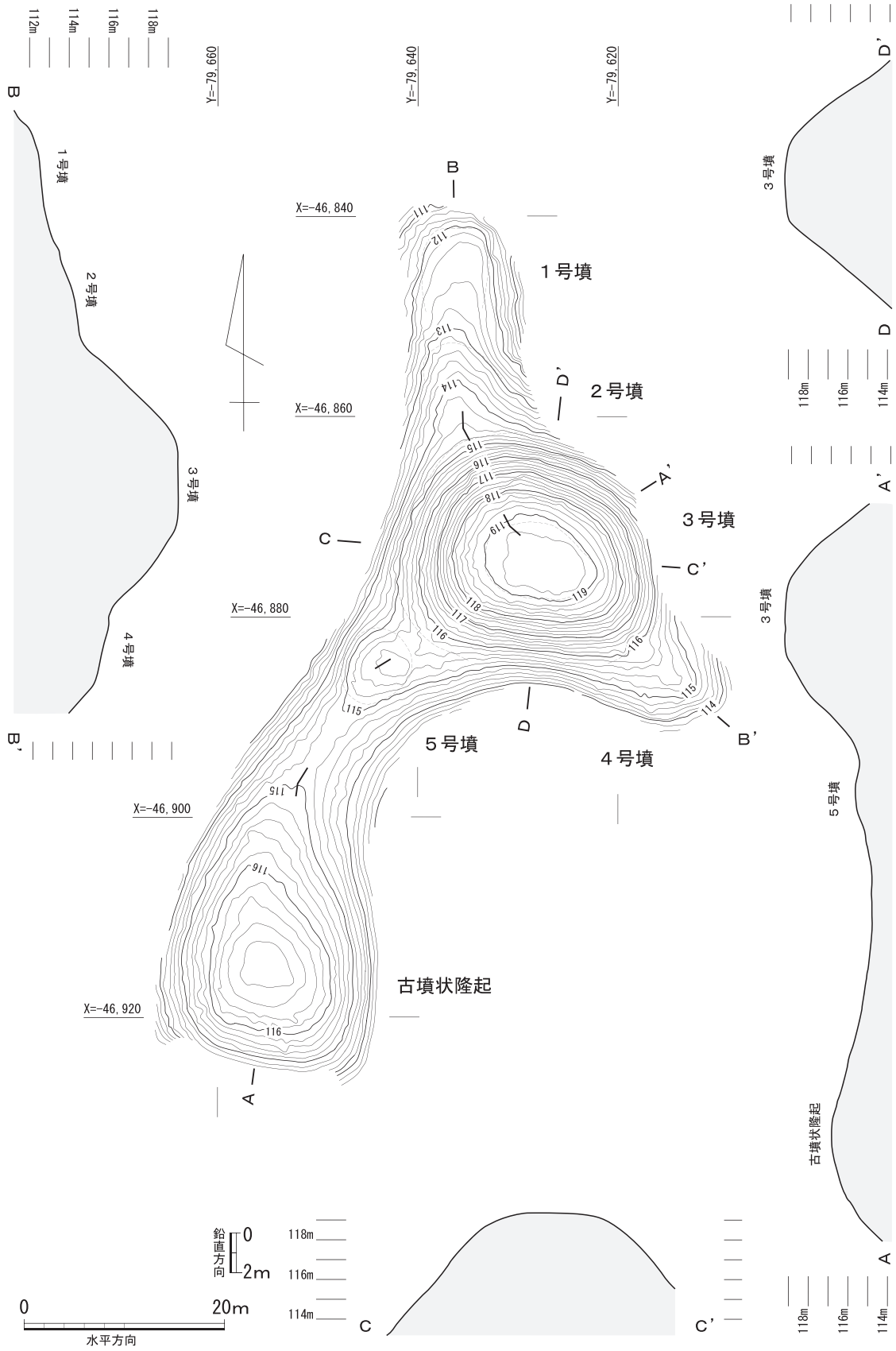
- |              |             |              |             |
|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 163. 大内古墳群   | 166. 三重遺跡   | 172. 大谷城南古墳群 | 176. 森本大谷古墳 |
| 177. 愛宕神社古墳群 | 180. 大内北古墳群 | 181. 星ノ内古墳群  | 191. 三重城跡   |
|              |             | 192. 星ノ城跡    |             |

わりに近づいた9月5日(日)午前11時から大内北3号墳の現地説明会を開催し、摂氏35.8°(宮津市の最高気温)という記録的な猛暑のなか、70名近い参加者を得た。

#### 4. 1地区の調査(大内北古墳群)

##### 1) 古墳群の状況

大内北古墳群は、盟主墳である3号墳を中心にして5基の古墳によって構成されており、また、



第3図 大内北古墳群調査前地形図

今回の分布調査によって南側の尾根先端部に古墳状の隆起部が確認されている。

大内北3号墳は竹野川を見下ろす小丘陵の頂部に築かれた長軸25m、短軸23m、高さ4mを測る東西方向に長いやや歪な円墳で、墳頂部には長軸12m、短軸8mの平坦面を形成している。墳丘の最高地点は標高119mで竹野川周辺の水田面との比高差は約40mを測る。墳丘の南斜面と北斜面は狭い間隔で等高線が直線状に走る。また、北東と西側の墳丘斜面はそのまま丘陵斜面部に移行しており、墳丘裾を確定するのは現状では難しい。墳丘上からは、現在樹木によって見通しが利かない部分もあるが、北側から西側にかけて谷平野を眼下に望む眺望が開ける。3号墳からは、1・2号墳および4号墳、5号墳のそれぞれ北、南東、南西の3方向に丘陵の小尾根が伸びており、それらの尾根が合わさる位置に構築された3号墳は視覚的にも際立った外観を示す。

1・2号墳は3号墳から続く標高115mから111mの緩やかな傾斜面に立地する。1号墳の北側では比高差40mをもって丘陵下の平野部に向かって急激に落ち込む。両古墳は、中央でやや高まりをみせる連続した方形の階段状地形を呈し、1号墳は長辺16m、短辺10m、高さ約1.1m、2号墳は長辺11m、短辺10m、高さ約0.5mを測る。形態や調査前の地形測量からみて丹後地域に類例の多い台状墓と想定された。

4号墳は3号墳の墳丘南東裾に接する位置にあり、長辺10m、短辺9m前後の平坦部をもつ。5号墳は3号墳に接して南西に延びる丘陵上に位置しており、径7m、高さ0.3mの低平な円墳状地形を呈している。

また、5号墳の南西には、1～5号墳とは独立した比高差約2mの古墳状の高まりが認められた。

## 2)大内北3号墳の調査(第3・4図)

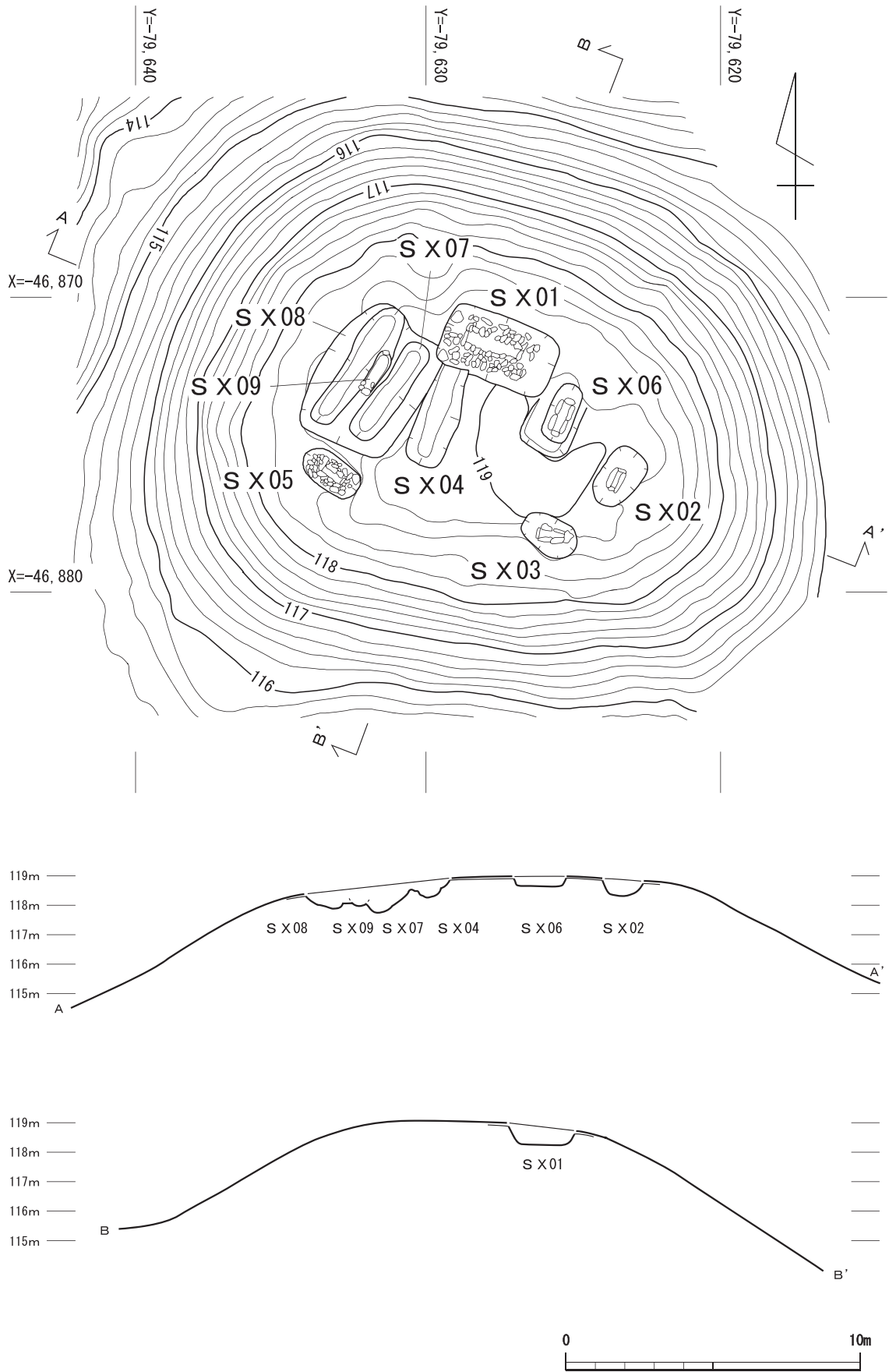
調査にあたっては、まず周囲の古墳との関連と墳丘の構築状況を確認するために、幅1mのトレンチを墳丘を四分する形に設置して行った。その後、トレンチに沿って土層観察用の畦を残して墳丘表面を覆う腐植土を全面除去し、埋葬施設の検出作業を行った。なお、掘削で生じた廃土については、雨水等によって調査地外に流出する危険性があるため、安全対策として傾斜が急な北西側と北東側に土留め柵を設置した。

墳丘の腐植土を除去すると直ぐに風化した花崗岩が露出し、各埋葬施設は概ねこの花崗岩を掘り込んで構築されていた。すなわち墳頂平坦面の北側の縁辺からは、竪穴式石槨1基が主軸を東西に置いて検出され、また東側と南側からは、箱式石棺4基が墳頂平坦面の縁辺に沿うように検出された。さらに木棺直葬の埋葬施設3基が、墳頂中央から西側にかけて主軸の方向を揃えて検出され、墳頂平坦面の埋葬施設の配置状況は稠密なありかたをほぼ南北に示している。

墳丘の築造にあたっては自然地形の高まりを最大限に利用し、地山を掘削して整えられたものと考えられるが、墳頂平坦面の北東側では地山上に暗黄褐色の粘砂質土による盛土が一部で確認された。この部分については墳頂部の高低を揃えるため若干の盛土を行ったものと思われる。なお、調査前の外形観察では、埴輪・葺石・段築等は認められなかった。

以上の結果、大内3号墳からは竪穴式石槨1基、組合式箱式石棺4基、木棺直葬4基の合計9





第4図 3号墳墳丘及び埋葬施設配置図

付表1 埋葬施設規模一覧

## 豎穴式石槨

埋葬施設	墓壙規模(m)			石槨規模(内法:cm)			天井石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X01	3.75	2.0	0.35	190	西 40 東 28	25	5石	被覆粘土、鉄槍先1点、鏝状鉄器1点出土

## 箱式石棺

埋葬施設	墓壙規模(m)			石棺規模(内法:cm)			蓋石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X02	上段2.14 下段1.5	1.35 0.83	0.6	60	18	36	6石	壁面赤色顔料塗布
S X03	2.0	1.0	0.7	85	西 26 東 15	30	5石	
S X05	0.16	1.1	0.46	74	東 18 西 15	18	5石	
S X06	上段3.0 下段2.1	1.8 1.0	0.34	96	南 26 北 24	23	5石	刀子1点出土

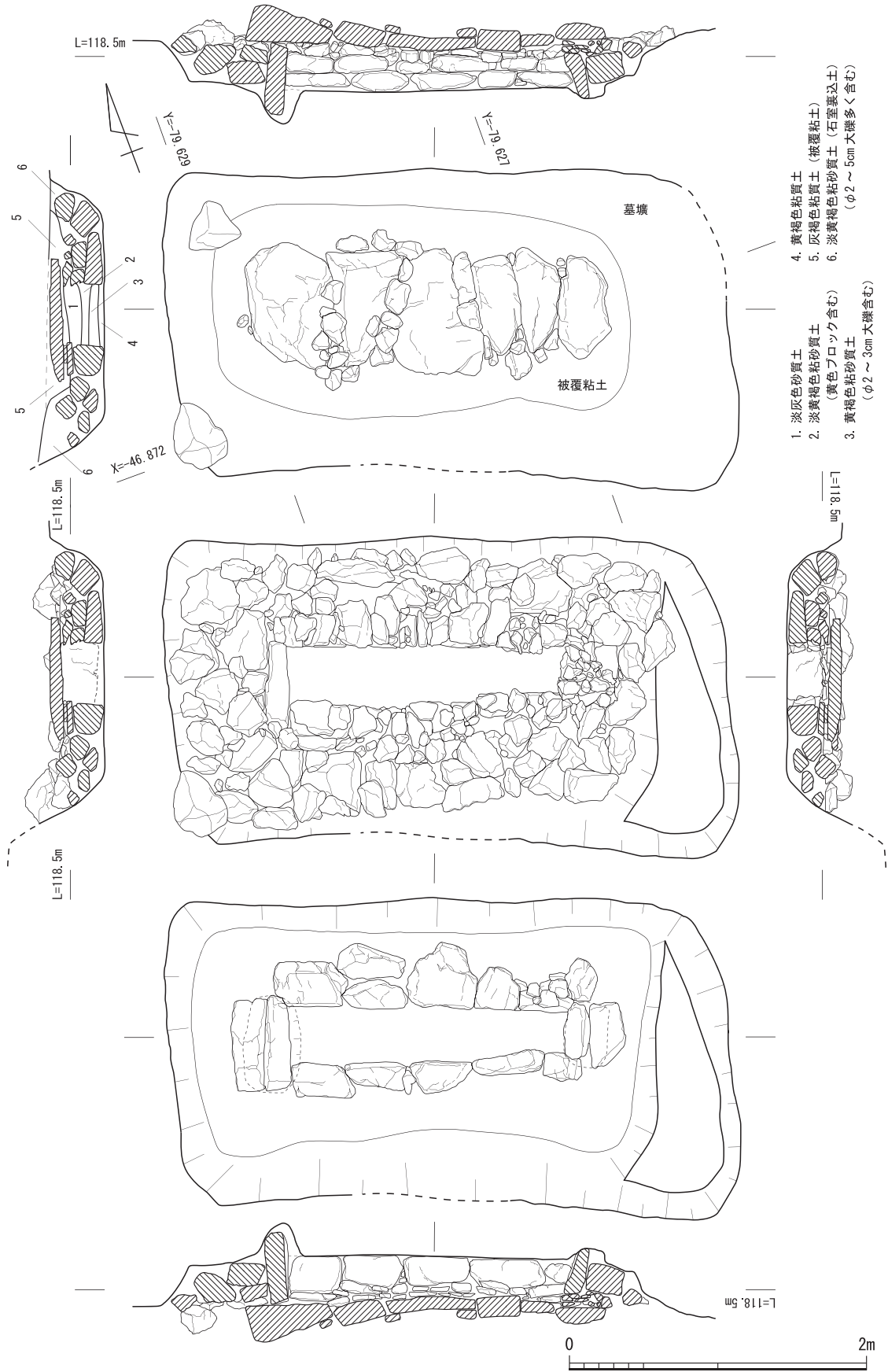
## 木棺(直葬)

埋葬施設	墓壙規模(m)			木棺規模(cm)			棺形態	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X04	3.5	1.5	0.45	300	80	20	割竹形	
S X07	5.1	3.65	0.5	384	85~100	20	割竹形	棺北東部に赤色顔料集積
S X08				455	58~86	20	割竹形	鉄鎌1点出土
S X09	1.7	0.5以上		130	50	残存部34	箱式	両小口に割石

基の埋葬施設が検出された。各埋葬施設についてはそれぞれ検出順に、S X01～09の遺構番号を付けた。以下、これらの埋葬施設について記述したい(付表1)。

## (1)埋葬施設S X01(第5・6図)

豎穴式石槨<sup>(注1)</sup>を内部主体にする埋葬施設である。墳頂平坦面の北東縁辺側に沿って位置する。主体部を納める墓壙は、花崗岩の風化した土からなる地山面を掘り込んで構築されている。墓壙平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸を北西から南東方向に置く。規模は、長さ3.75m、幅2m、底面までの深さ0.35mを測る。調査では、まず表土の腐植土を除去した段階で天井石と思われる扁平な大形の石材が並んだ状態で検出され、その周囲に灰褐色粘質土の分布が認められた。この灰褐色粘質土は、天井石の石列周囲と上部面にも広がっており、石槨上部を覆う被覆粘土であることが分かった。使用されている粘土は、小礫と砂を多く含む良質なものとは言えない。この被覆粘土は天井石下面の石材上面にも広がっており、天井石を架ける際に高さ揃えのために置かれた側壁上部の小石材を粘土で固定し目張りするための役目を担っている。天井石は長さ90cm、幅60cm程度の大きさのものを最大に、概ね扁平な石が使用されており、合計6個の石材で構成される。それぞれの天井石が重なる間隙部には小礫を並べて目張りを行っている。墓壙と豎穴式石槨の側石及び小口石との間には、裏込めとして多数の礫を詰めている。特に墓壙の北東隅と南

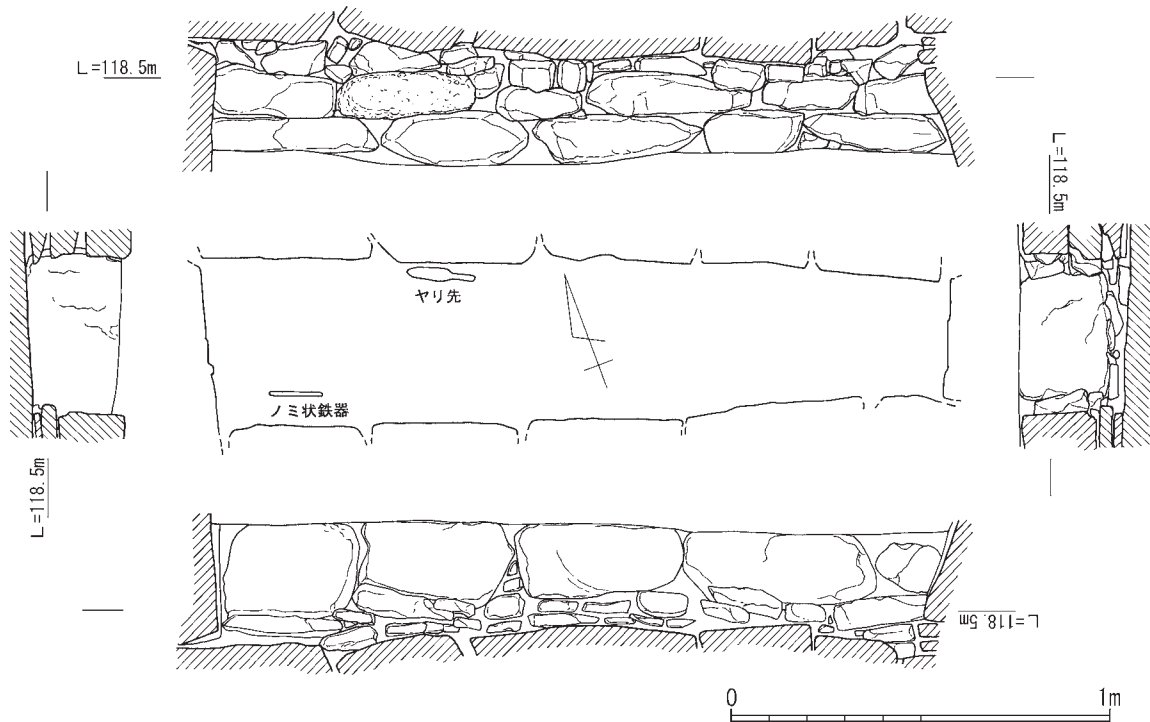


第5図 3号墳埋葬施設S X01平・断面図

東隅には比較的大きな石材を置いている。

竪穴式石槨は、内法で長さ190cm、幅は短側面(小口)西側で40cm、東側で28cm、高さ25cmを測る。石槨の主軸はN70° Wを示す。石槨の幅が東側で少し広くなることから、東側を頭位として被葬者を安置したものと思われる。石槨の石積みは、基本的に石の平らな面を内側に向けて構築される。北側側壁では、5個の石材を横長に並べて基底石とし、その上にやや小ぶりの石材を1段ないし2段積み上げて壁面とする。これに対し、南側側壁はやや広い面をもつ方形の石材4個を並べて壁面を構成し、天井石との間には小さな石を詰めて空隙を埋める。両短辺の側壁(小口)は、長方形の扁平な石材各1個を横長に置いて構築する。また、この両小口の裏側に接して小口石を支持するように石が置かれていた。石材については、5点をサンプリングしてプレパ  
ラート作成による石材鑑定<sup>(注2)</sup>を行った。鑑定結果により、黒雲母花崗岩・普通角閃石・砂岩が使用されていることが分かった。これらの石材は当丘陵の周辺で採取されたものと考えられる。調査最終時点で石槨部分の小口石を外した結果、小口石の下部を埋め込む形で小穴が掘られていることが判明した。これは小口部の安定を行うとともに天井石を置くときの高さ調整を図るためと思われる。石槨は墓壇底を基底として構築されており、特に東側部は礫層からなる地山面が露出する。石槨内は、しまりのない砂質土でほぼ充填されていたが、棺の存在を示すような痕跡は検出することができなかった。石槨内の土層断面の観察では、地山上に黄褐色粘質土の置土を行って床面とした可能性が大きい。

出土遺物としては、石槨内の東側小口部付近から、鉄器2点を検出した。1点は北側側壁に接する位置で壁面と平行に切先を東方向に向けて出土し、その配置・形状から槍先と考えられる。



第6図 3号墳埋葬施設S X01竪穴式石槨実測図

もう1点は鑿状鉄器で、南側側壁面に接して壁面と平行した状態で出土した。2点の鉄器は石槨底部の地山面から4cm程度上で出土しており、この点からも、石槨底部には薄く置土を行って床面としたものと考えられる。

### (2) 埋葬施設 S X 02 (第7図)

墳丘平坦部の東側縁辺部で検出した組合式箱式石槨からなる埋葬施設である。埋葬施設 S X 06の南東側に1.4m距離を置いて位置している。

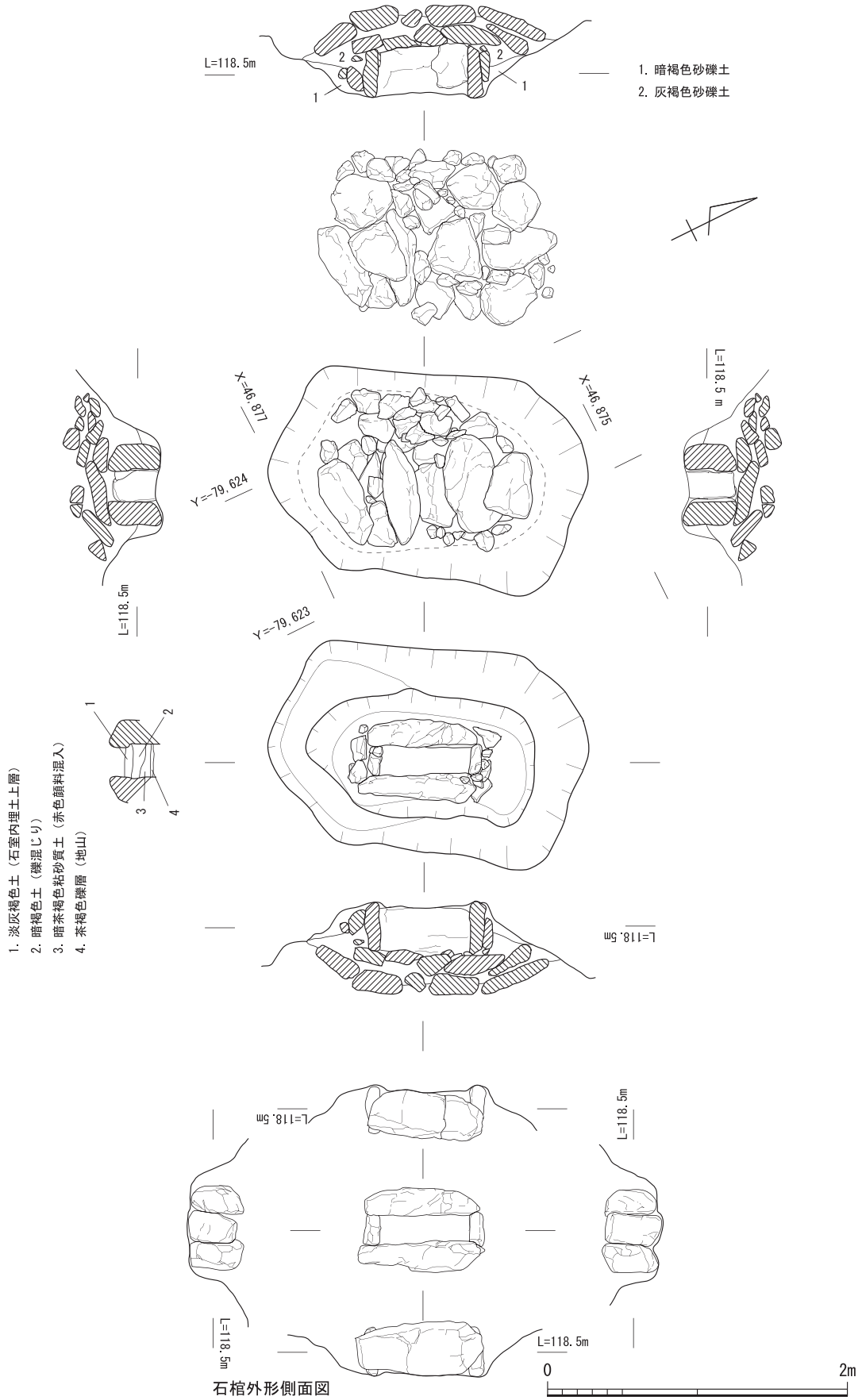
長さ2.14m、幅1.35mの墓壙を掘り込みその内部に石槨を構築する。検出時は小山状に重なった石材集積の形状から、丹後地域に多くみられる経塚とも推測されたが、調査の結果、古墳の埋葬施設であることが判明した。集石群は墳頂の腐植土を除去した時点で検出された。上部は最大30cmから50cm程度の割石を中心に、大小の石が長さ約1.6m、幅約1.1mの広がりをもって積み上げられた状態であった。これらの石材を除去すると墓壙長軸に対し直行する状態でやや細長く扁平な石材が並んで検出され、石槨の蓋石であることが確認された。墓壙内には蓋石上部を覆うように石材が充填され、一部は墓壙と石槨の間隙にも詰められている。蓋石は5石からなり、自然石の平坦面を利用して棺身の上部を覆うように並べられているが、両端部は棺よりも外側に出る。墓壙下部は石槨を納めるためにさらにもう一段掘り込まれている。

棺の構造は、長さ約80cm、幅約30cm、厚さ約15cm程の大きさをもつ扁平な石材を横長にして長辺側の側石とし、左右各1石で構成される。短辺側、すなわち小口は長さ約30cm、幅約18cm、厚さ約8cmの長方形石材を立てて用いる。小口の石材は側石端部の内側に挟みこまれた状態で組み合わせられており、さらに背後に固定させるためと思われる石材を置く。棺の内法規模は、長さ60cm、幅18cm、高さ36cmを測る。棺底には石を用いていない。石槨の主軸はN25° Eを示す。

棺の内壁面には、上半部を中心に赤色顔料(ベンガラ)<sup>(注3)</sup>が残っており、四方の壁面に赤色顔料が塗布されていたことが分かる。また、棺床面にも赤色顔料が含まれた土が堆積していた。これらは壁面から顔料が流れ落ちたものと見るより、棺底の地山面に整地を行って、その上にも散布していたものと考えられる。なお、赤色顔料は、蛍光X線分析の結果、水銀朱をわずかに含むパイプ状ベンガラであることが判明した。棺内からの遺物の出土は無かった。

### (3) 埋葬施設 S X 03 (第8図)

埋葬施設 S X 02の南西方向に2m程離れて位置する。埋葬施設 S X 02と同様、組合式箱式石槨を内部主体とする。立根により墓壙の南側部分は大きく攪乱を受けており本来の形状をとどめていない。墳丘平坦面の南縁際に長さ2m、残存部の計測で幅1～1.2mの墓壙を掘り込んで石槨を構築する。腐植土を掘り下げると、比較的大形の石材を中心にしてその周りに割石を積み上げた集石が表れた。当初、これらの石材が蓋石等にあたるものと予想したが、石材を取り除くとさらに墓壙の長軸と並行に並ぶ4個の石列が確認され、これらが蓋石であることがわかった。蓋石は他の石よりやや大形のものをを用いており、扁平な面を選んで石槨の上面に合致するように置かれていた。これらの蓋石を外し石槨の本体を確認した。埋葬施設 S X 02と同様、石槨背後の墓壙内



第7図 3号墳埋葬施設S X02平・断面図及び石棺実測図

には礫石を充填する。石棺本体は、両小口に各1石、長辺側に各2石の計6石によって構成されている。底石は用いられていない。棺の規模は、長さ85cm、幅は西側小口部で26cm、反対側の東側小口部で15cmを測る。高さは30cmを測る。石棺の主軸はN80°Wを示す。小口の幅は、西側が広くっており、埋葬に際しての頭位を意識していたとすれば、本棺の被葬者は規模からみても小児と考えられる。石棺に使用された石材のうち両側壁は、北側壁の1石を除き、壁面に適した方形の石材を横長に用いている。西側の小口の石材は扁平な石を用いているのに対し、東側の小口石は角をもつ方形の石で、その内の平らな一面を壁面として使用する。すなわち石棺を上部からみると三角形を呈している。小口の石は、側壁両端部の外側に塞ぐようにして置かれており、埋葬施設SX02例のように側壁に挟まれるものとは異なった形式をとる。石棺の底部は、墓壙底である地山面が露出するが、この上面に土を敷いて床面としていたかどうかは明らかでない。棺内から遺物は出土しなかった。

#### (4) 埋葬施設SX04(第11図)

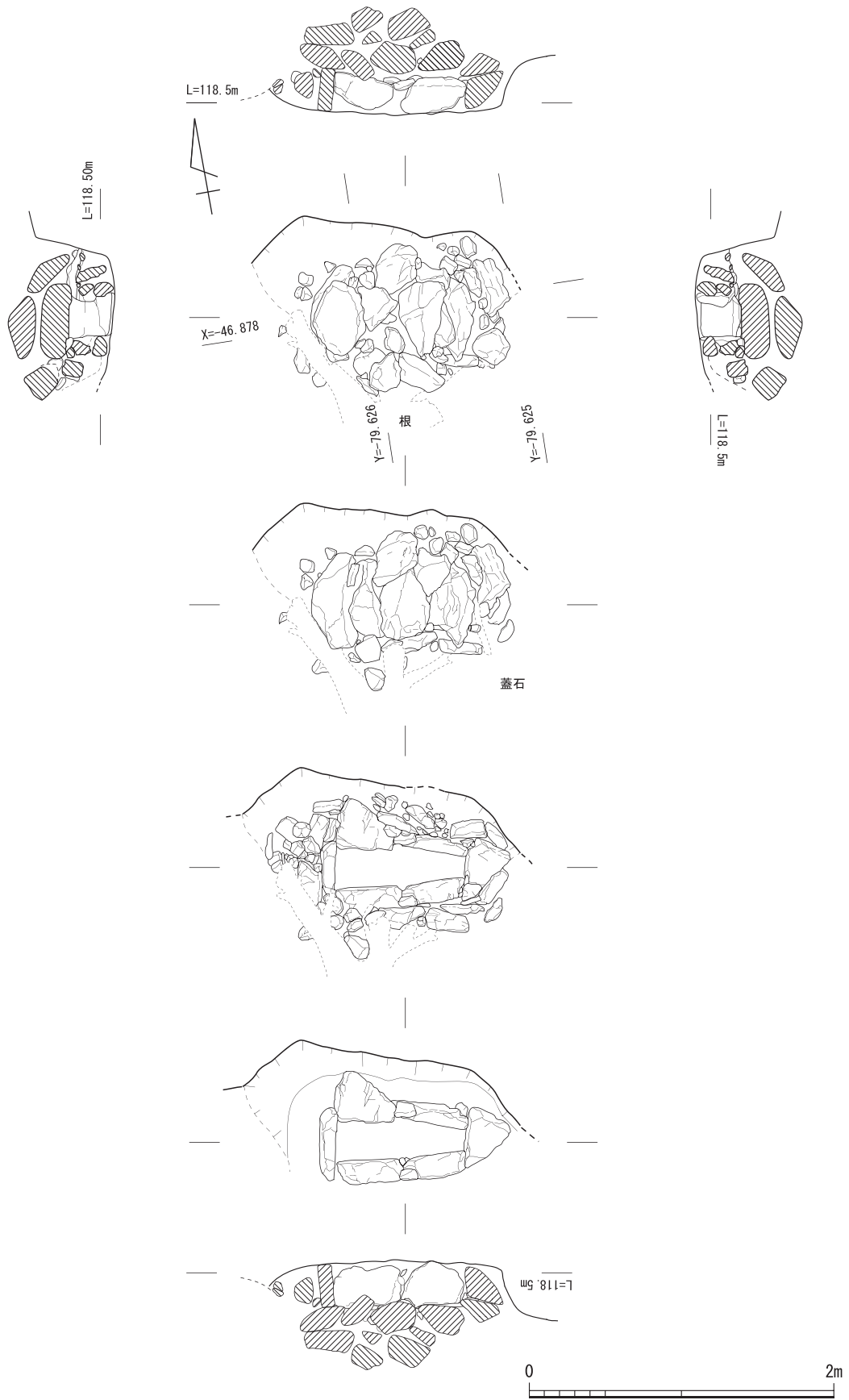
墳頂部平坦面のほぼ中央部で検出された木棺を直葬した埋葬施設である。墓壙は花崗岩の風化土の地山面から掘り込まれている。墓壙は、北西から南東方向に長軸を向けて、平面形は隅丸の長方形を呈している。検出長は3.5m、幅1.5mを測る。墓壙の北端部は、埋葬施設SX01により切られている。また、墓壙西側の掘り込み部分も、土色の変化や硬さの違いが明瞭でなく検出の際に時間を要したが、最終的にこの部分は埋葬施設SX07・08の墓壙によって削平されていることが判明した。墓壙は、上面から下方に向かって緩やかな傾斜をもって掘削されており、上肩部から20cm程深くなった位置で角度を変えて段を形成する。下段の掘り込みは墓壙の全体に及んでおり、いわゆる二段墓壙を構築していることが判明した。下段の墓壙は、底部がやや平坦な横断U字形を呈しており、この部分に木棺が据え置かれていたものと思われる。二段目の墓壙の形状から、棺の形式は割竹形木棺と推測されるが、墓壙両端部の小口面も内側に向かって緩やかに傾斜しており舟底形の底部をもつ棺であった可能性もある。木棺の規模は、残存部の長さ3m、幅0.8m、残存部の高さ0.15mを測る。棺の主軸はN20°Eを示す。一段目と二段目墓壙の埋土の状況はあまり差異が認められなかったが、下段墓壙の方が若干粘土質が強い傾向がみられた。棺および墓壙内からの出土遺物はなかった。

上述したように、本埋葬施設の墓壙は、埋葬施設SX01及び埋葬施設SX07・08によって切られており、構築時期は、これらの埋葬施設に先行することがわかる。また、構築位置が墳頂部のほぼ中央を占めていることからみて、各埋葬施設のなかでは最も早く構築されたものと考えられる。

#### (5) 埋葬施設SX05(第9図)

墳頂部平端面南西側の縁辺部に構築された、組合式箱式石棺からなる埋葬施設である。他の石材を使用する埋葬施設とはやや離れた地点に位置する。

墓壙は、花崗岩からなる岩盤が風化して軟質な砂礫層となった地山を、やや斜め下方に傾斜をつけて掘り込んでいる。墓壙の平面形は、長楕円形を呈しており、北西から南東方向に長軸を置



第8図 3号墳埋葬施設S X03平・断面図



く。上面での規模は、長さ2.16m、幅1.1m、深さは地山面の高い東側で0.6m、反対側の西側で0.3mを測る。墓壙の検出に合わせて壙内を少し掘り下げたところ、墓壙の長軸と平行に5個の石材が並んだ状態で検出された。これらの石列の周辺に重なった石材を取り除いた結果、石列が石棺本体を覆う蓋石であることがわかった。

蓋石は、中央に位置する石材が最も大きく、長辺75cm、短辺35cm、厚さ25cmを測るが、他の4石はこれを超えないやや小形の石材を使用する。蓋石は、比較的扁平な面を下側にして石棺本体の上部に架けられており、蓋石が覆う範囲は石棺の両小口端を超えている。蓋石の周囲および墓壙内には、多数の石塊が隙間なく充填されており、その範囲は墓壙上面に達している。

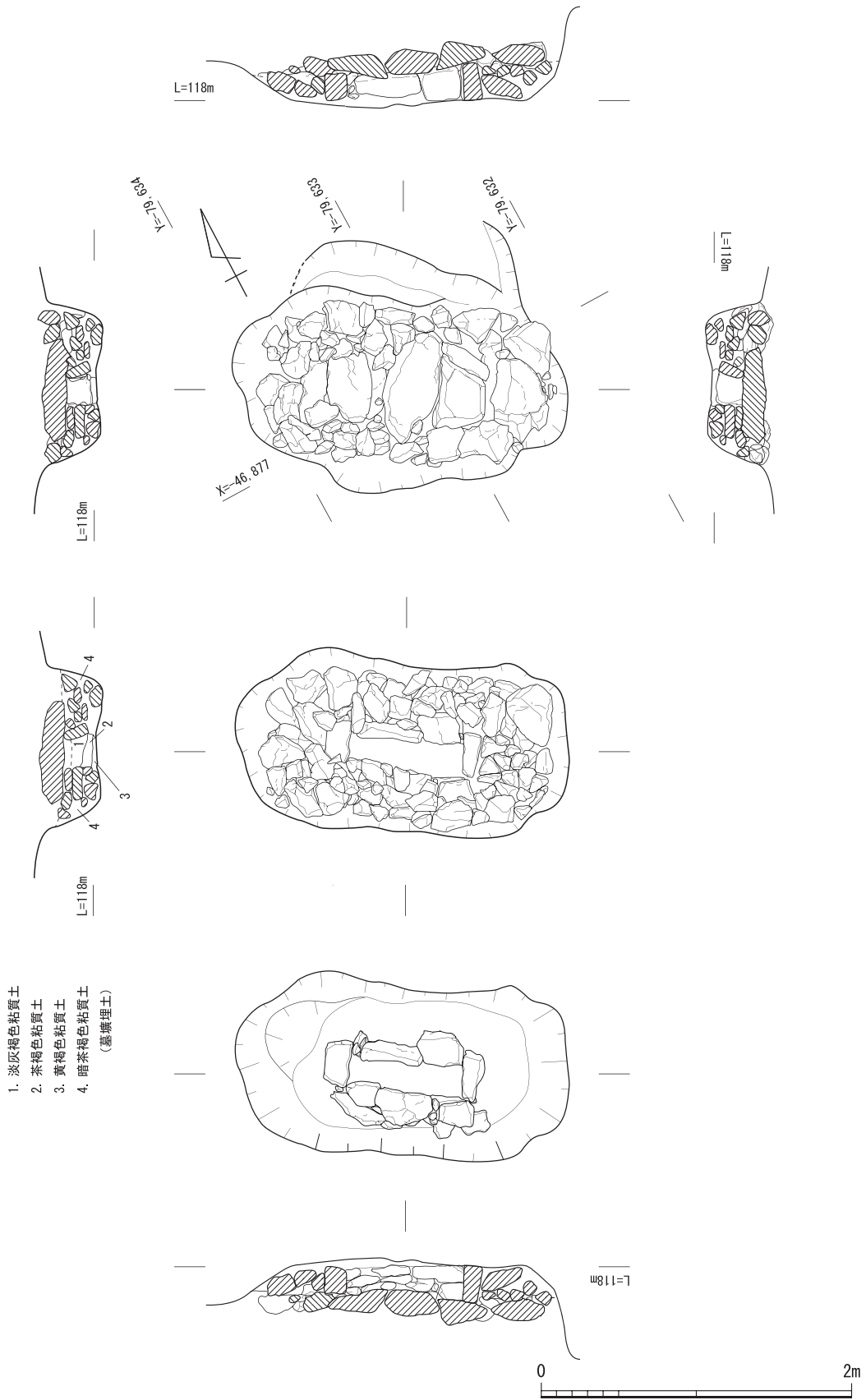
石棺本体は、墓壙底面の中央に設置されている。石棺の内法規模は、長さ74cm、東側小口で幅18cm、西側小口で15cm、高さ18cmを測る。石棺の主軸はN54°Wを示す。石棺の側壁の組み合わせについては、両小口部は方形状を呈する石を選び、その平滑な一面を棺の内側にして各々1石で構築されている。側石は左右でやや異なった構成をとる。北側の側石が2石を並べて構築するのに対し、南側の側石は、基底に3石を平積み置き、その上に平滑な小口面をもつ小形の割石を2～3段に重ね置いて構築している。北側壁のうちの1石は、検出前から既に背後の裏込め石からの加圧によって石棺内側に少し倒れ込んだ状況であったことがわかる。石棺底部に底石はなく墓壙底の地山面が露出する。

両小口の石材は、側石端部の外側に置かれており、側壁を両小口で挟む形状を示す。石棺部の実測の後、全ての石材を除去し側壁下部の状態を確認した。その結果、側石は墓壙底に直接石材を置いており、地山面を掘り込んで石材を設置するための据え付け穴等の痕跡は検出されなかった。出土遺物はない。

本埋葬施設は、墓壙の裏込めに多量の石材を充填するように、全体の構築の形態は埋葬施設S X01の竪穴式石槨に類似することが窺われる。今回、大内北3号墳で検出した石棺の側石は、基本的に1段で構成されているが、この埋葬施設S X05の側石は複数段積み上げて構築しており、他の石棺とは異なる形態をとっている。これらも埋葬施設S X01に類似する点であり、両者は規模の差をもつものの共通する構築方法で造られたものと考えられる。出土遺物がなく築造時期については不明確であるが、埋葬施設S X01とほぼ同時期か、その構造を省略した形で埋葬施設S X01の後に造られたものと考えられることができる。

#### (6) 埋葬施設S X06(第10図)

墳頂部の東寄りにあり、埋葬施設S X01と埋葬施設S X02に挟まれて位置する。組合式箱式石棺からなる埋葬施設である。墓壙は、埋葬施設S X01の墓壙東側辺に接する形で、花崗岩の地山面を掘り込んで構築される。墓壙の南西側は、地山の高い部分から掘り込まれており15cm程掘り下げた位置で一端、平坦な面を形成する。この位置からさらに内側に石棺本体を埋納するための墓壙を掘り込んでおり、いわゆる二段墓壙の形状をとる。これに対して上段墓壙の東側半分は地形の下がりとなるため墓壙は全周せず、検出時の平面形状は「コ」字状を呈している。下段墓壙は、上段墓壙から少し控えたか所から掘り込まれており幅30cm程の平端面を残す。下段墓壙



第9図 3号墳埋葬施設 S X 05平・断面図

の東側部は上段墓壙面に連続して掘り込まれており平坦面をもたない。上段墓壙の規模は、残存部での長さ約2m、幅1.8mを測る。下段墓壙は長さ2.1m、幅1m、深さ0.34mを測り、平面形は方形状を呈している。また、下段墓壙短辺の北東側は、石棺小口部の蓋石に重ねる石材を置くためか、墓壙の中段から外側に張り出す小さな平端部を形成している。

石棺本体の上部は、蓋石の上にさらに蓋石の隙間を埋めるように比較的扁平な石材が1～2段重ねて置かれている。蓋石は5石で構成され、石材の平な面を石棺身に重ねて置かれている。石棺本体は、下段墓壙に納まる大きさ一杯に構築されており、そのため石棺背後と墓壙壁との間隙は狭くなっている。墓壙内には、裏込め土として暗褐色粘土が充填されており、埋葬施設S X02や埋葬施設S X03にみられたような裏込めの石塊は詰められていない。石棺の側石は、両端の小口部に方形の石材を各1石、両側壁は、扁平な石材を各2石使用し、合計6石によって構成されている。棺底部は石材を用いない。石棺内法の規模は、長さ96cm、幅は北側小口で24cm、南側小口で26cm、高さ23cmを測る。石棺の主軸はN28°Eを示す。両側の側石は、やや平滑な面を石棺の内壁に用いており、側石の間には小石材を詰め込んで安定を図っている。側壁の構築にあたっては、小口の石を先に設置し、その後、この小口を挟む形で側石が置かれている。壁を構成する石材は、今回検出した4基の石棺のなかでは各面が整った方形状の花崗岩が用いられているが、北東側側壁の1石は風化の進んだ軟質の石が使用されていた。

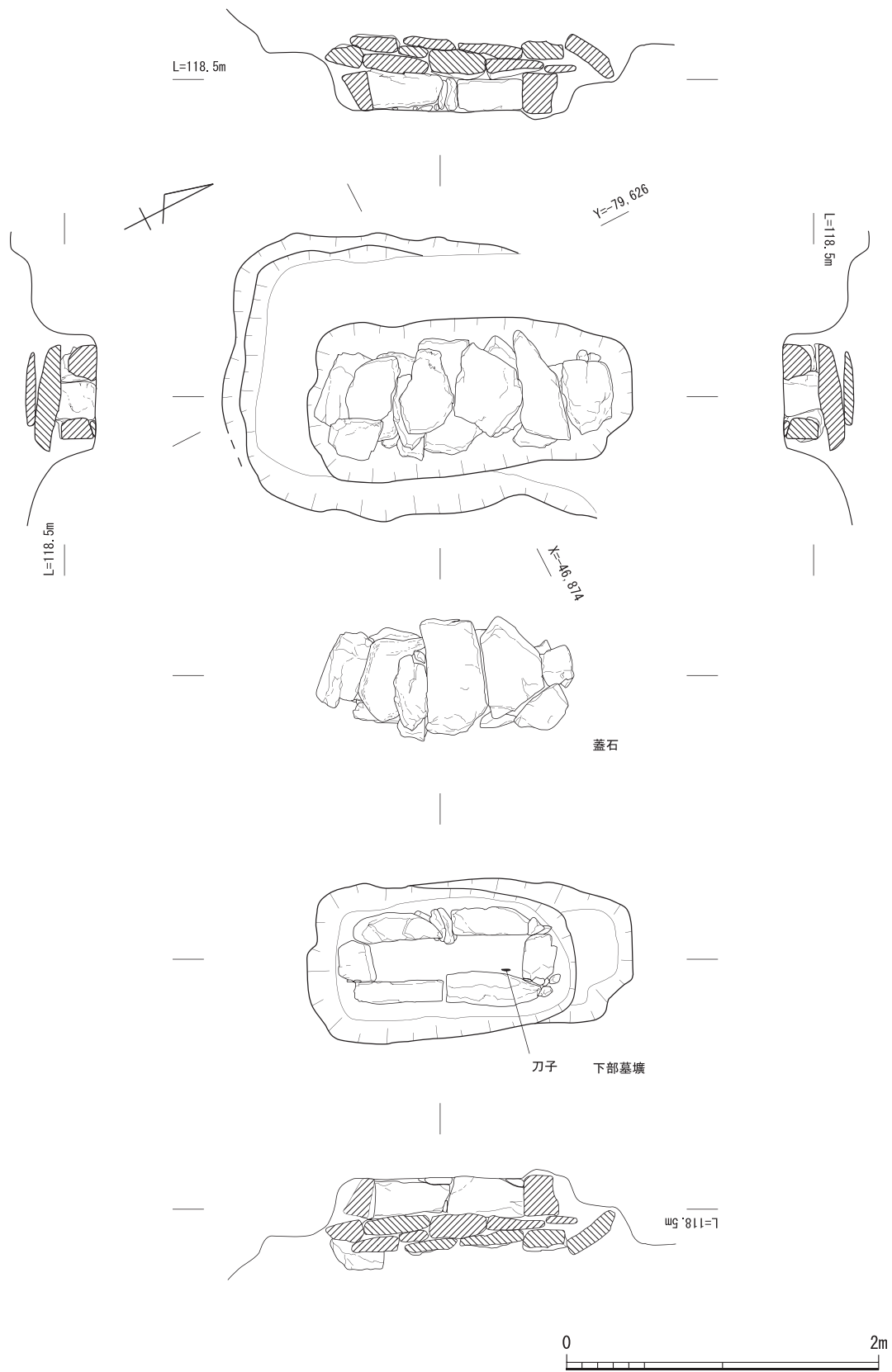
副葬品については、石棺内部の北東隅部から、切先を北側の小口に向けた状態で鉄刀子1点が出土した。これ以外に遺物は出土していない。

#### (7) 埋葬施設S X07(第12図)

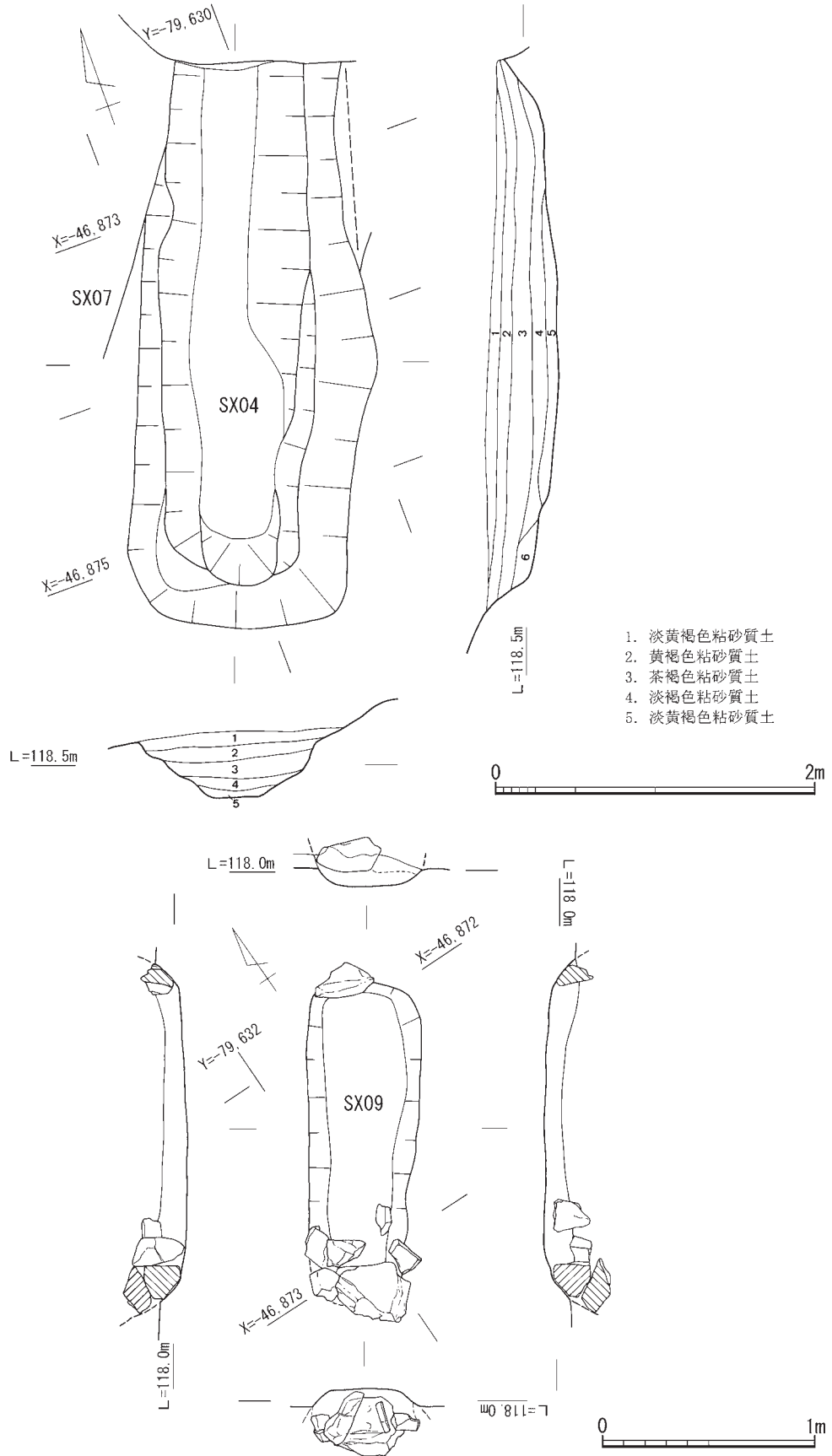
墳頂部平坦面の西寄りに位置する埋葬施設で、東側に埋葬施設S X04、北東側に埋葬施設S X01が接している。木棺を直葬する埋葬施設で、埋葬施設S X08・09と共に同一墓壙内に棺を納める。墓壙は、花崗岩風化土の地山面から掘り込まれており、北東から南西方向に長軸を置いている。墓壙規模は、長辺側の南北面で約5m、短辺側の東西面で約3.5mを測る。埋葬施設S X04の項で記述したように、墓壙北東側は埋葬施設S X04の墓壙を切り込んでおり、さらに、この部分に重なるように竪穴式石槨を主体部とする埋葬施設S X04の墓壙によって切られている。S X07の墓壙埋土の上面には、S X01の主体部を構築した際に使われなかったと考えられる大形の石材が遺存しており、構築の順序を判断するうえでの手がかりとなる。

墓壙は上下二段からなり、上段墓壙の下面部に3基の木棺を据える下段墓壙が平行して掘り込まれている。埋葬施設S X07はこれらの主体部のうち東側に位置しており、木棺を納める下段墓壙の規模は、長さ3.82m、中央部の幅0.85m、残存部の高さ0.25mを測る。棺の主軸はN35°Eを示す。

墓壙断面の形状から割り抜きの木棺を据え置いたものと考えられる。墓壙の底部まで掘り下げたところ、北端側から赤色顔料の広がりが検出された。赤色顔料は約1～2cmの厚さを持ち、長さ1.15m、幅0.35mの範囲に広がっていた。特に北側部分では厚く堆積する状況を示していた。この高まり部分を断ち割って断面の観察を行った。その結果、赤色顔料の堆積は「U」字形の断



第10図 3号墳埋葬施設S X06平・断面図



第11図 3号墳埋葬施設SX04・09平・断面図

面を呈しており、この曲面は割竹形木棺の底部を示すものであることが推測された。赤色顔料は木棺全体に撒かれたものでなく、位置からみて被葬者の頭部付近を中心に集積されたものと判断される。赤色顔料については、分析の結果、パイプ状ベンガラであることが判明している。

赤色顔料の遺存以外に、本埋葬施設からの出土遺物はなかった。

#### (8) 埋葬施設 S X 08 (第12図)

埋葬施設 S X 07 の西側に、長軸を揃え平行して設営された埋葬施設で、木棺を直葬している。上段墓壙の南側部分は、下段墓壙との間に平坦部を残すが、北側部分は埋葬施設 S X 07 と同様、平坦部を設けず直接掘り下げられている。上段墓壙の西辺側は、地山上に盛土した軟質の砂質土面から掘り下げられている。

木棺を据え置くための下段墓壙の規模は、長さ4.6m、中央部の幅0.68m、残存部の高さ0.18mを測る。棺の主軸はN35° Eを示し、埋葬施設 S X 07・09と同一の軸方向をとる。

墓壙底部の掘削深度は、埋葬施設 S X 07 に比べて浅い。横断面の形状から、埋葬施設 S X 07 と同様、割竹形木棺もしくは断面がゆるやかに弧を描く木棺が用いられたと思われる。墓壙の幅は、埋葬施設 S X 07 に比べ狭いことが観察でき、やや幅の狭い木棺が使用されたことが推測できる。なお、北側で85cm、南側で56cmと棺の北側部分が広がっていることから、使用された木材の幅の広い側を頭部(北)に、狭い側を足側(南)に向けて置かれていたものと思われる。下段墓壙南西側の掘り込みの肩部分から鉄製鎌が1点出土したが、これ以外に出土遺物はみられなかった。

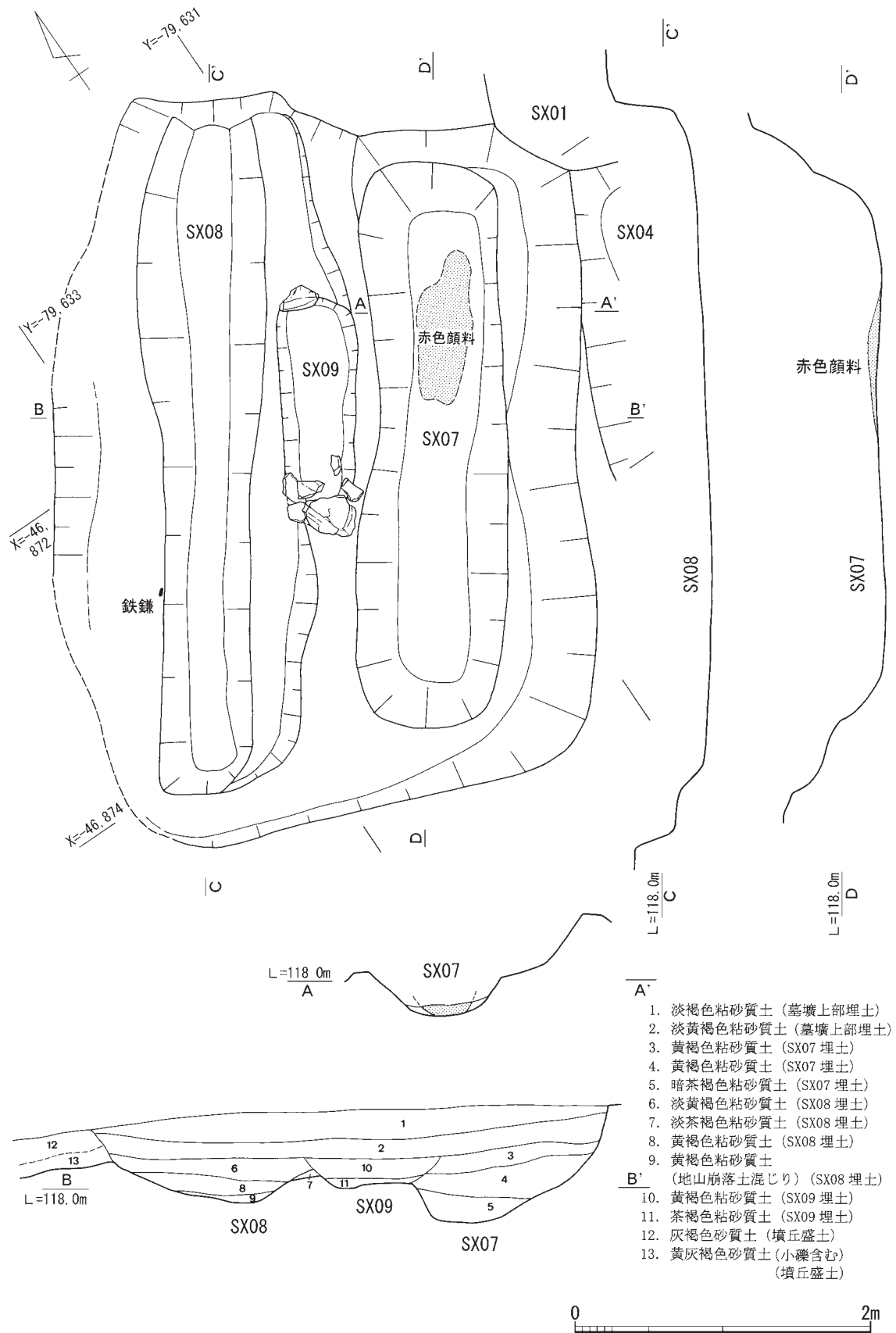
#### (9) 埋葬施設 S X 09 (第12図)

埋葬施設 S X 07、埋葬施設 S X 08 と墓壙を共有する。埋葬施設 S X 07 と同 S X 08 に挟まれほぼ真ん中の位置に構築される。先の2基の主体部の断面が割竹形状の木棺を使用するのに対し、埋葬施設 S X 09 は小型の箱式木棺を納めたと考えられる。小口部には石材が置かれており、この石材が小口板の代用であった可能性がある。このうち南側小口については、花崗岩の人頭大の石材を土と共に二段に積み上げ、さらにこの石組を挟むように、両側面側にも2個の扁平な石材が「コ」字状に立て置かれていた。なお、粘土の使用は認められなかった。木棺を納める墓壙の底部は平坦で、この形状からみて箱形木棺が埋納されていたものと考えられる。なお、木棺痕跡は確認できていない。

規模は、両小口の石組を含めた範囲で現存長170cmを測り、石組を除いた部分での内法長は130cm、幅50cmを測る。主軸はN35° Eを示す。前述の南側小口部の石組の性格については、不明な部分が多いが、現状では木棺小口の側板を裏側と側面から支持するための施設と考えておきたい。棺内外からの出土遺物はない。

棺の小口に石材を置く例としては、周辺の古墳としては、京丹後市帯城3号墳、与謝野町小虫2号墳第1主体、宮津市柿ノ木2号墳などの類例が知られる。

埋葬施設 S X 09 からの出土遺物はなく、築造時期については明らかでないが、埋葬施設 S X 07 と同 S X 08 の間に、主軸を揃えて造営されており、しかも両主体部の下段墓壙を壊さないように構築されている点が注目される。墓壙面の掘り下げ時に設定した土層断面用の畔壁面の観察では、



第12図 3号墳埋葬施設 SX07～09平・断面図

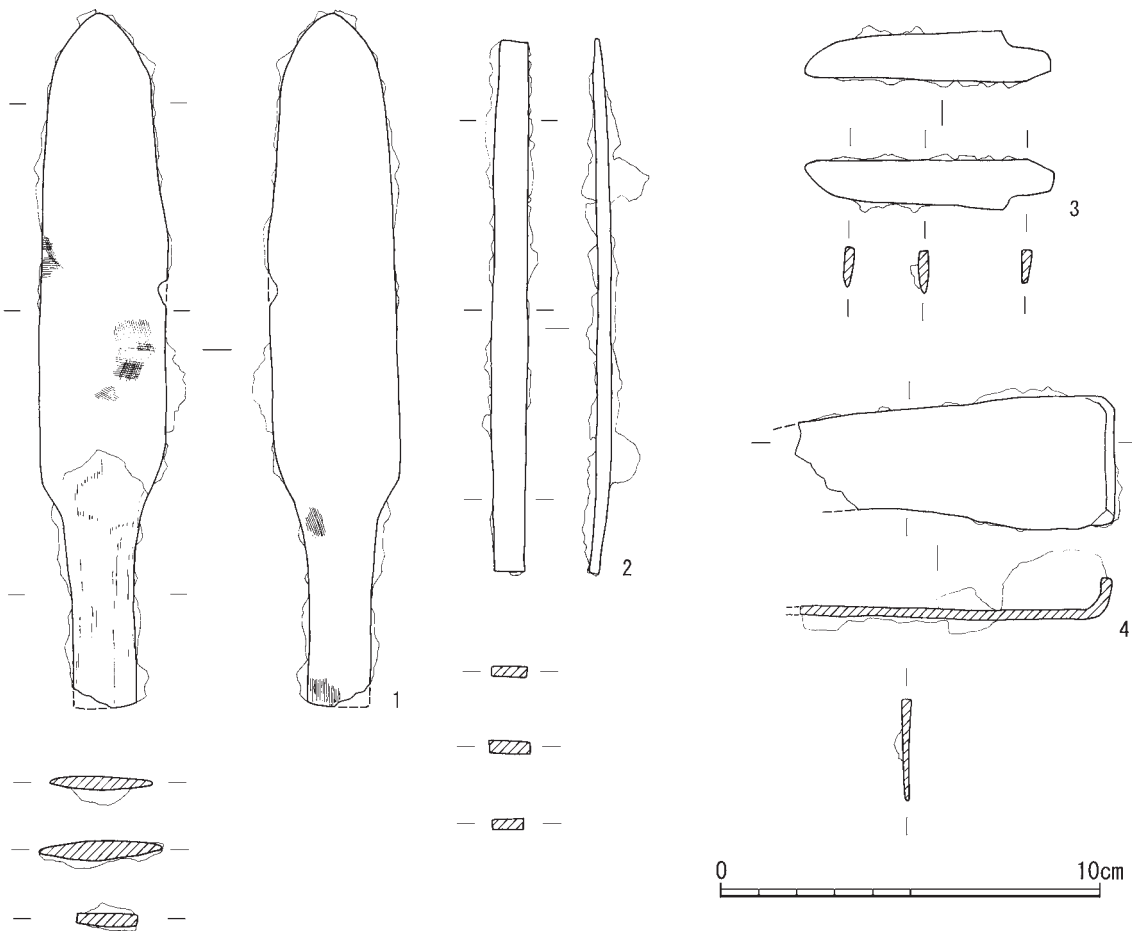
同質の墓壙埋土内での観察であり不確定な部分も多いが、埋葬施設S X09の墓壙は、埋葬施設S X07と同S X08の上段墓壙面を切り込んで構築されていることが確認できた。このことにより、埋葬施設S X09は、埋葬施設S X07・08の後に埋葬されたことが想定されるが、両埋葬施設の木棺部分を意識的に避けて構築されていることから、これらの3基の埋葬施設は、当初から同一の墓壙内に納めるため、計画的に造営されたものと考えられる。複数の木棺を同一の墓壙内に納める古墳の例としては、与謝野町鳴谷東3号墳と同小虫1号墳があげられる。いずれも5世紀前半に位置づけられている。

## (10) 出土遺物

### ① 鉄製品 (第13図)

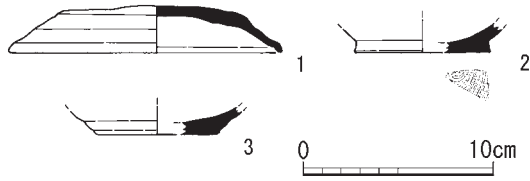
**槍先 (第13図1)** 埋葬施設S X01から出土した。ここでは槍先としたが短剣としての用途も考えられる。全長18.3cm、身長約12.5cm、幅約3.4cm、厚さ約0.5cm、柄長約5.8cm、幅は関で約2cm、柄尻で約1.6cm、厚さ0.5cmを測り、重量は現状で83gを量る。鏝は錆化が著しく明瞭でない。関部分も錆化によって膨らんでいる。現状では柄部に目釘穴は確認できない。身の片面には局部的に布状の圧痕が認められる。柄部についても柄と平行する縦方向の木質痕が認められるが、部分的に遺存するのみであり長柄との装着状況を示すものかどうかは不明である。

**鑿状鉄器 (第13図2)** 槍先と同じく埋葬施設S X01から出土した。断面方形の細長い板棒状を



第13図 3号墳出土鉄器





第14図 3号墳出土土器

呈し、やや両端部に向かって反り返る。片方の端部は先が断面三角形状に薄くなっており形状から鑿とした。検出時点では反り返りの形状からヤリガンナとしていた。全体的に錆化が著しいが、長さ14cm、幅約0.8cm、厚さは中央で約0.4cm、端部で約0.2cmを測る。重量は現状で19gを量る。

刀子(第13図3) 埋葬施設S X06の棺内から出土した。全長6.6cm、刃部の長さ5.2cm、幅は関の部分で1.4cm、厚さは背で0.3cmを測る。刃部は関から3.5cmほどは同じ幅をもち、そこから幅を減じて切先に向かう。柄部は長さ1.4cm、幅は中央付近で0.9cm、厚さ0.3cmを測る。木質は観察できない。重量は現状で7gを量る。背部からみると全体にやや湾曲する形状をしめす。

鎌(第13図4) 埋葬施設S X08の墓壇肩から出土した。刃先端部を含む刃先の一部が欠損するが、この部分も錆化が進行しており破損した鎌を埋納した可能性がある。残存部の形状からは、刃は柄着装部から刃先に向かって湾曲して延びていくことが観察でき、曲刃鎌と考えられる。残存部の長さ8.5cm、幅は中央付近で2.6cm、柄着装部で3.5cm、厚さ0.2cmを測る。柄着装部は刃に直行する位置で斜めに約1cm程折り曲げられている。柄着装部の詳細についてはこの部分に錆塊が生じており不明である。

#### ②その他の遺物(第14図)

墳丘頂部の表土腐植土を掘り下げた際、埋葬施設S X02周辺から少量の土器類が出土した。1は須恵器蓋である。数個の破片で出土したが、ほぼ一個体に復元できた。復元径14.4cm、高さ2.4cmを測る。天井部は扁平でつまみをもたないものである。2は高台付きの須恵器碗か瓶と思われる底部の小片である。高台の底部に回転糸切り痕をもつ。3は土師器杯または碗の底部片である。いずれも平安時代に属するものと思われるが、これらに関する遺構は認められなかった。

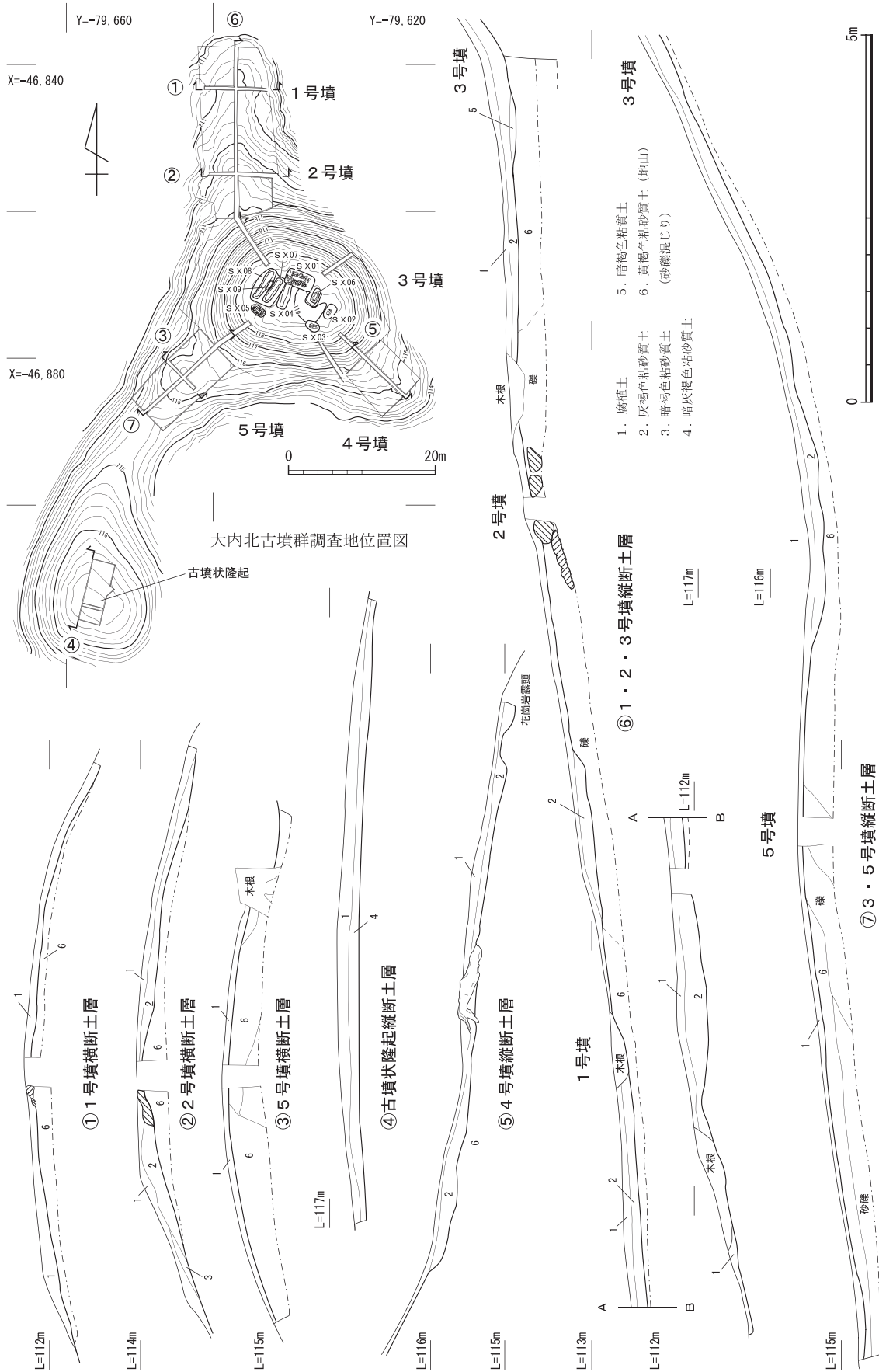
#### 3) その他の古墳の調査(付表2・第15図)

大内北古墳群は、調査前は盟主墳である3号墳を中心にして5基の古墳によって構成されており、また、今回の分布調査によって南側の尾根先端部に古墳状の隆起部が確認されていた。

##### (1) 1・2号墳

1・2号墳は3号墳の北側尾根筋に認められた古墳で、その形状から、丹後地域に特徴的な台状墓と想定された。

調査は、まず3号墳から延長するトレンチを両古墳を縦断する形で設置し、さらにそれぞれの中央部を横断するトレンチを十字形に設けて行った。その後、トレンチ際に畦を残して土層の確認を行うとともに、墳丘全体の堆積土を除去して主体部の検出作業を実施した。調査の結果、表面を覆う腐植土の直下では厚さ10～15cmの灰褐色の粘砂質土が堆積し、それ以下は砂礫層が表れた。特に古墳の中心部と思われる部分では岩盤とみられる礫層が広がることが確認された。この礫層面と周辺部を精査したが主体部になるような遺構は検出できなかった。今回の調査結果では、古墳としての兆候を得ることができず、丘陵の小隆起からなる自然地形であることが判明し



第15図 大内北古墳群(1・2・4・5号墳)調査地及び土層図

付表2 大内北古墳群調査一覧

名称	形状	規模	調査内容
1号墳	方形（階段状）	一辺16m×10m、高さ1.1m	自然地形。古墳の兆候なし。
2号墳	方形（階段状）	一辺11m×10m、高さ0.5m	自然地形。古墳の兆候なし。
3号墳	円墳	長径25m、短径23m、高さ4m	埋葬施設9基確認。鉄器等の副葬品出土。
4号墳	方形（階段状）	一辺9m×10m、高さ0.5m	自然地形。古墳の兆候なし。
5号墳	円形	径7m、高さ0.3m	自然地形。古墳の兆候なし。

た。

#### (2) 4号墳

長辺10m、短辺9m前後の平坦部をもち、3号墳の墳丘南東裾に接する位置にあたる。3号墳の墳丘南東側斜面から延ばしたトレンチを設置して調査を行った。その結果、1・2号墳と同様に、表土の腐植土下で花崗岩の風化した砂礫層が検出されたのみで、主体部と思しき遺構や盛土を示すような土層の変化は認められなかった。また、3号墳裾部分での土層堆積状況の確認を行ったが、裾を区画するような地山の落ち込みや溝は検出できなかった。調査で露出した地山面の形状からみて、当部分は3号墳の墳丘造成のために地山の削り出しが行われた可能性がある。以上の結果により、4号墳については古墳でないことが判明した。

#### (3) 5号墳

3号墳から南西に延びる尾根上に位置しており、径7m、高さ0.3mの円墳状をなしている。墳丘を四分する形に十字形に畦を残して表土層の除去作業を行った。この結果、腐植土の表土下から厚さ5～10cmの暗褐色ないし黄褐色の粘質土層が検出された。その後、墳丘状の高まり面を中心にこれらの粘質土層を掘り下げたが、岩盤を構成する礫層面が検出されたのみで、主体部に係る土色の変化や落ち込み等の遺構は検出されなかった。また、3号墳の裾付近にあたる尾根高位の北東部分では墳丘土の流失と思われる暗褐色粘質土の堆積がみられたのみで3号墳の築造に伴う周溝等の遺構は検出されなかった。以上のように5号墳については、自然地形の高まりと判断されたが、この高まりは3号墳造成に際して古墳の裾を画するため丘陵尾根を掘り下げた結果、生じたものとも考えられる。

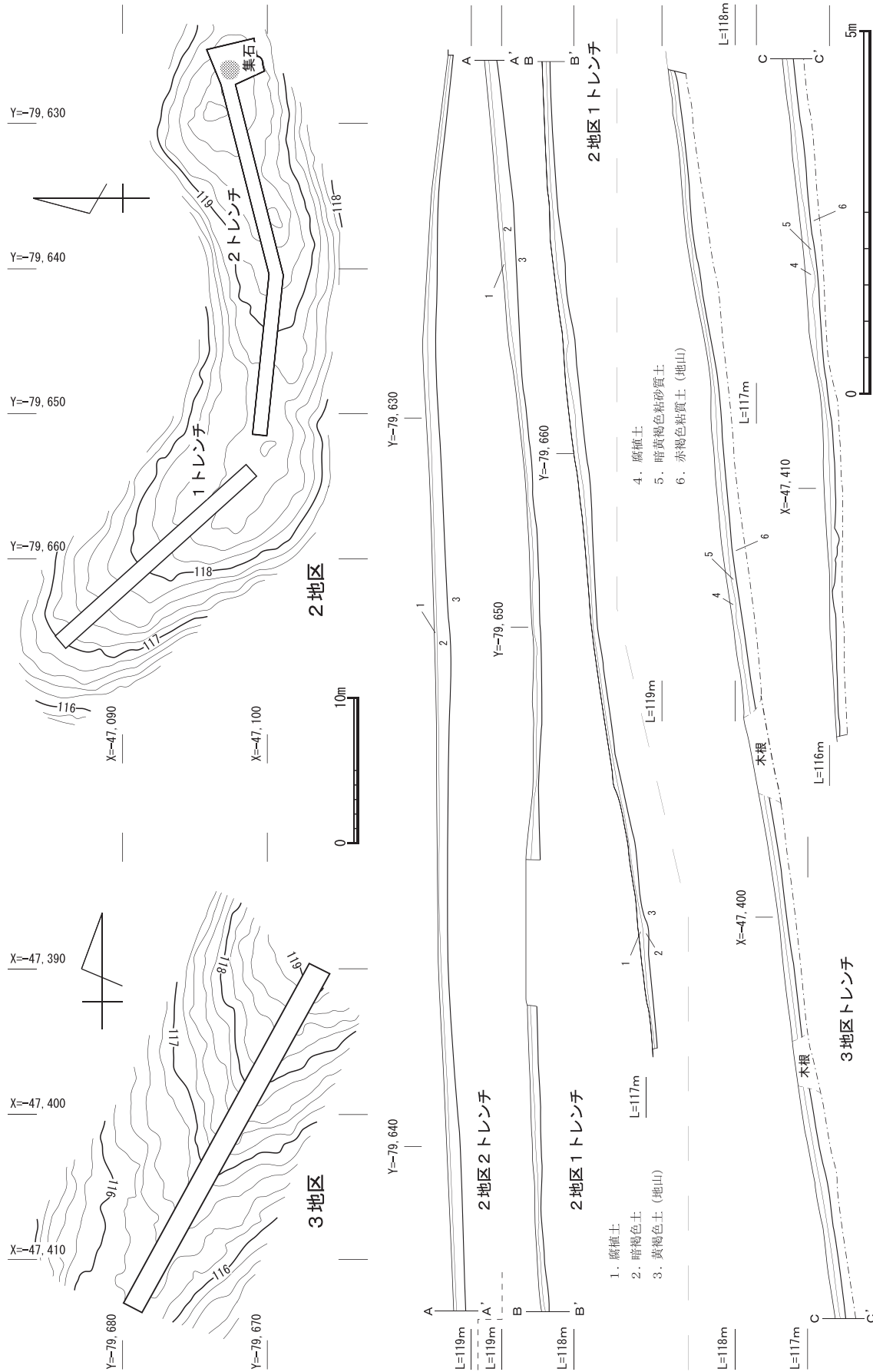
#### (4) 古墳状隆起

5号墳の南西に位置する古墳状隆起の調査を行った。その結果、自然堆積と思われる暗灰色砂質粘土層および礫層の広がりを検出したのみで、古墳としての兆候は認められなかった。この付近は固い礫層面が露出しており、周辺の山土の流失から取り残されて高い地形が形成されたものと考えられる。

### 5.2・3地区の調査(第16図)

今回道路建設予定地における分布調査の結果、古墳状の隆起を呈するか所が、大内北古墳群のほかに2か所で確認された。これらについて古墳の有無を確認するための試掘調査を実施した。

#### 1) 2地区



第16図 2・3地区古墳状隆起調査トレンチ及び土層図

大内北古墳群(1地区)の南方約200mに位置しており、東西に延びる丘陵の狭い尾根稜線上にあたる。120mから116mの標高差で東側から西側に向かって緩やかに傾斜し、中央付近で若干の高まりをみせる。調査は、東側尾根高所の隆起部と中央部の隆起部を結ぶ、やや屈曲する形状で幅1m前後のトレンチ2本を設けて実施した。調査の結果、丘陵の低い側に設けた1トレンチでは、表土の腐植土の下位で厚さ6～8cmの暗褐色の粘砂質土層を検出したが、それ以下は黄褐色土の地山面であった。地山面の精査を行ったが古墳等に関する地形の変化は認められなかった。丘陵の高所に設営した2トレンチについては、東端部の地形の高まりの周辺から、拳大から小児頭大の20数個の礫石の広がりを検出した。集石はこの部分に存在する木株を中心に径約1.2m程の広がり呈するが、腐植土の中にも石が含まれており、掘形等の落ち込みも検出されなかった。集石を除去して下部の精査を行ったが特に変化は認められなかった。出土遺物はなく不明確であるが、おそらく近現代の植林に伴う仕事の可能性が高いものと思われる。2トレンチについても古墳としての確認は得られなかった。

## 2) 3地区

2地区の南側約300m離れた丘陵上に位置し、大内古墳群の分布範囲にあたる。古墳状隆起は、標高119mから116mの丘陵部の北東側から南西側になだらかに傾斜する尾根の稜線部に所在し、周囲よりやや高い地形の高まりをみせる。調査は丘陵尾根を中心に幅1.5mのトレンチを設営を行った。調査の結果、2地区と同様、腐植土下で暗灰褐色の粘砂質土層が表れ、それ以下は花崗岩の風化土からなる黄褐色の地山面になる。トレンチ西側に沿って深さ30cm程の深掘りを行ったが、顕著な土層の変化は認められなかった。出土遺物はなく、3地区においても古墳の兆候は認められなかった。

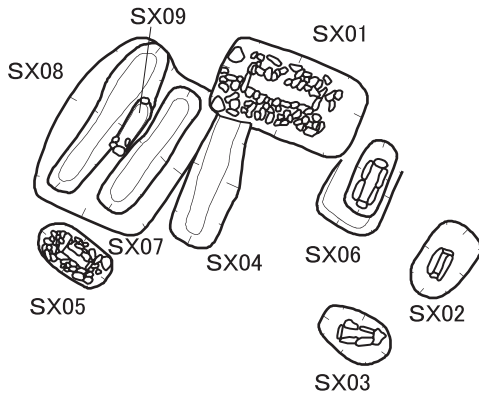
## 6. まとめ

今回、道路建設予定地に含まれる丘陵の3地区において発掘調査を行った。その結果、大内北古墳群に含まれる1地区では、3号墳で埋葬施設合計9基を検出した。3号墳以外の1・2・4・5号墳及び1地区の古墳状隆起部については、調査の結果、古墳でないことが確認できた。また、2地区、3地区の古墳状隆起についても古墳でないことが判明した。ここでは今回調査のまとめとして、多くの成果を得ることができた大内北3号墳について、若干の整理を行いまとめとした。

大内北3号墳の特徴としては、

- ①自然地形を利用した中型の歪な円墳(長軸25m×短軸23m、高さ4m)である
- ②一墳丘多埋葬(9基)である
- ③埋葬施設の形態は、竪穴式石槨(1基)・組合式箱式石棺(4基)・木棺(4基)と多様である
- ④副葬品は鉄器4点(槍先・鑿先・刀子・鎌)と寡少で大形の武器類を含まない

等があげられる。すなわち大内北3号墳については、上記の①のように、墳丘築造にあたって自然地形を最大限に利用し盛土による造成はほとんどされていない点や、②のように、一つの墳



第17図 3号墳埋葬施設配置図

付表3 3号墳埋葬施設形式一覧

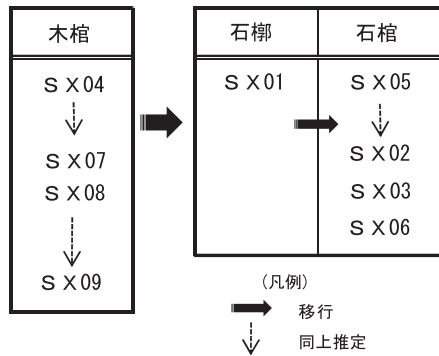
S X 01	竪穴式石槨
S X 02	箱式石棺
S X 03	箱式石棺
S X 04	割竹形(?)木棺
S X 05	箱式石棺
S X 06	箱式石棺
S X 07	割竹形(?)木棺
S X 08	割竹形(?)木棺
S X 09	箱式木棺

丘上に多くの埋葬施設が構築されるなどの点は、丹後地域の京丹後市権現山古墳や但馬地域の豊岡市深谷1号墳・和田山町秋葉山2号墳等に代表される弥生時代後期から続く墳丘の築造方法や墓制を踏襲するものであり、在地における伝統的な葬法をもつ古墳の性格が強く窺われる(付表3・第17図)。

次に、埋葬施設のうち特に竪穴式石槨(室)については、京丹後市域ではこれまでに古墳時代前期～中期に属する例としては5基知られている。代表的なものとしては豊富な副葬品が出土した峰山町域のカジヤ古墳があげられるが、畿内における古墳時代前期の大形前方後円墳に伴う典型的な竪穴式石室とは異なり、石材の用い方や壁面構成に地方的ないし在地的要素が強いことが指摘されている。大内北3号墳の竪穴式石槨S X 01は、大人1人を納めるのがせい一杯で、今回の調査結果では棺は使用されていない可能性も指摘できる。その場合、竪穴式石槨S X 01も石棺として理解すべきである。石槨に天井石を架すと上部に隙間の無いきわめて狭い墓室となり、機能的には組合式石棺と同様な役割しか果たさないものと想像される。組合式石棺については内法長96cm、幅26cmを測る埋葬施設S X 06が最大で成人を埋葬するには無理がある。この場合、埋葬施設S X 01が成人埋葬ではほかの4基の石棺は子供ないし幼児が埋葬されたものとも考えられるが、人骨の遺存するものでは、小型の石棺に成人の再葬骨を納めたものが知られており、大きさからは一概に子供・幼児棺とは断定できないようである。

埋葬施設の構築順については、竪穴式石室S X 01の墓壙が埋葬施設S X 04・07～09の木棺直葬群の墓壙を切っていること等から概ね木棺直葬から石槨・石棺等の石材を使用した葬法への変遷が窺われる。また、木棺直葬については、同じく墓壙の切り合いから埋葬施設S X 04が3号墳では最初に構築され、その後、埋葬施設S X 07～09を含む墓壙が構築されたものと考えられる。

石槨・石棺については切り合い等の明確に先後関係を示すものはないが、5基の埋葬施設を比較すると石材を多用して棺外を厚く覆うものから、やや簡略された構築手法をとるものに移行していくように見て取れる。すなわち規模・構造からみて竪穴式石槨S X 01が石材を使用した埋葬施設としては最も先行するものと考えられる。埋葬施設S X 05は構造から石棺に分類したが、構築形態は埋葬施設S X 01と類似しておりS X 01と同時期かこの直後に構築されたものとみておきたい。次に組合式石棺については、墓壙内に裏込めの石材を詰めるもの(埋葬施設S X 02・03)と



第18図 3号墳埋葬施設変遷想定図

裏込め石を使用しないもの(埋葬施設 S X 06)に分けられる。また石棺の側壁個数では、S X 03と S X 06は基本的に小口と側石左右2石の計6石、S X 02は小口と側石左右各1石の計4石で構成されている。小口の置き方については両側から側石に挟まれる S X 02・06と側石の外に出る S X 03に分けられる。このように側石構成の上では細部に違いが認められるがこれらの類型が構築時期の差を示すものか否かは現状では不明とせざるを得ない。当古墳では先に構築された埋葬施設 S X 01が裏込め石を持つ

ことを重視すれば、裏込め石の有無から判断して(S X 02・03)→(S X 06)への変遷を想定しておきたい。ただし、いずれの埋葬施設も大きく切り合うことなく配置されており、あまり長期間にわたらずに計画的に構築されていったものと想定される(第18図)。

このような石槨や石棺等、石材を使用した埋葬施設が多く用いられるのは、当地域とは地理的にも近い但馬地域で調査例が多く報告されており、墓制上でも両地域の密接な関係が窺われる。

大内北3号墳の築造時期については、出土遺物が少量の鉄器のみで時期の確定については不明な点が多いが、これまで例示した各古墳との比較から、およそ古墳時代前期末から中期前半頃(4世紀末～5世紀前半)と考えておきたい。

周辺古墳の概略でふれたように、同じ丘陵上に位置する大内1号墳では竪穴式石室、三重谷を越えた大谷古墳では組合式石棺等の大内北3号墳と同様の埋葬施設をもつことが知られている。両古墳は、墳丘・主体部の規模とも大内北3号墳に勝っている。埋葬施設は中心主体部1基のみで大内北3号墳の多埋葬のあり方と大きく異なっている。副葬品に関しては、大谷古墳は鉄器類のほか鏡・玉類をもっており、少量の小形鉄器類をもつのみの大内北3号墳とは大きな相違点が見られる。これらの差異は被葬者間の地位や階層差を表すものとも捉えることができるが、現状では資料が少なく、今後の課題としたい。

今回調査を行った大内北3号墳は、当地域における有力者の家族墓(集団墓)と想定される。大内北古墳群が営まれた時代には、竹野川下流域において畿内の大王墓に匹敵する巨大前方後円墳が出現している。これらの前方後円墳と前述の大谷古墳、大内1号墳及び大内北3号墳などの中規模古墳を比較することにより、竹野川中～上流域の在地有力者層のあり方を考えるうえで、新たな資料を提供するものと思われる。

- 注1 このような壁面の石積み構造をもつ「小竪穴式石室」については、最近の用例では「竪穴式石槨」と呼ばれるのが通例であり、本例もこれを用いる。
- 注2 埋葬施設S X01の石槨に使用された石材を複数か所から抽出しプレパラート作成による石材鑑定を行った結果、黒雲母花崗岩・普通角閃石・砂岩が使用されていることが分かった(第19図)。
- 注3 埋葬施設S X02・07の赤色顔料の成分分析により、主成分はベンガラであるが、ごく一部に水銀朱が含まれるとの分析結果を得た。

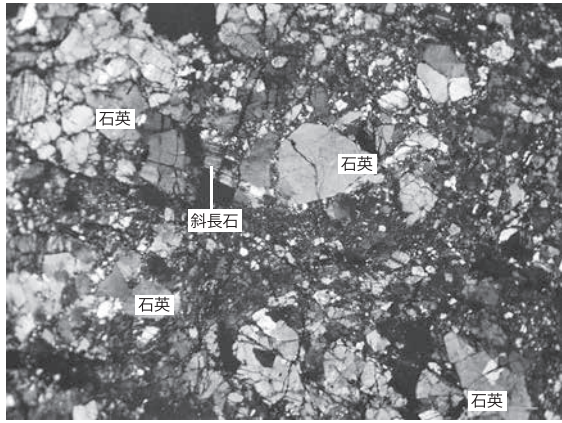
## 参考文献

- 『カジヤ古墳発掘調査報告』 峰山町教育委員会 1972
- 『大内1号墳発掘調査概報』 大宮町教育委員会 1983
- 『丹後大山墳墓群』 丹後町教育委員会 1983
- 『権現山古墳発掘調査概報』 久美浜町教育委員会 1984
- 『大谷古墳』 大宮町教育委員会 1987
- 『大宮町の文化財』 大宮町教育委員会 1988
- 『大宮町遺跡地図』 大宮町教育委員会 1991
- 『加悦町の古墳－加悦町文化財調査報告第16集－』 加悦町教育委員会 1992
- 『大宮町遺跡地図』 大宮町教育委員会 1999
- 『梅田古墳群Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2003
- 瀬戸谷皓『シリーズ但馬2 但馬の古代2』 但馬文化協会 2005
- 京丹後市史資料編『京丹後市の考古資料』 京丹後市 2010

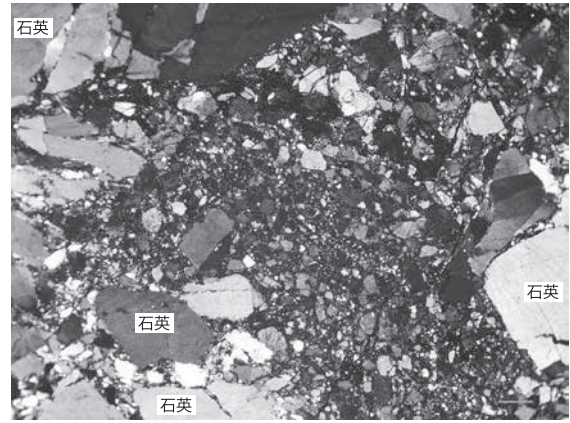
付表4 京丹後市域の竪穴式石室(石槨)の規模比較

古墳名	内法規模 (cm)	副葬品等	所属時期
	長 × 幅 × 高		
大山墳墓群 10号墳第3主体	223 × 45 ~ 53 × 70		前期
カジヤ古墳第1主体	450 × 73 ~ 75 × 70	鏡・筒型銅器・石製腕飾類・鉄器	前期後半
権現山古墳第1埋葬施設	400 × 60 × 60		前期後半
大内1号墳	270 × 70 × 45	鉄器	前期末～中期前葉
大内北3号墳埋葬施設S X 01	190 × 28 ~ 40 × 25	鉄器	前期末～中期前葉

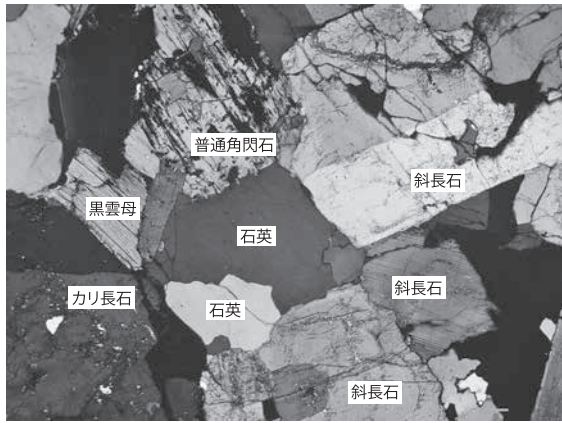




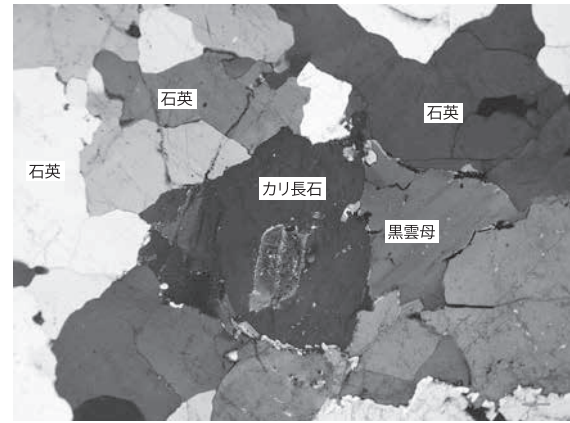
資料1 砂岩



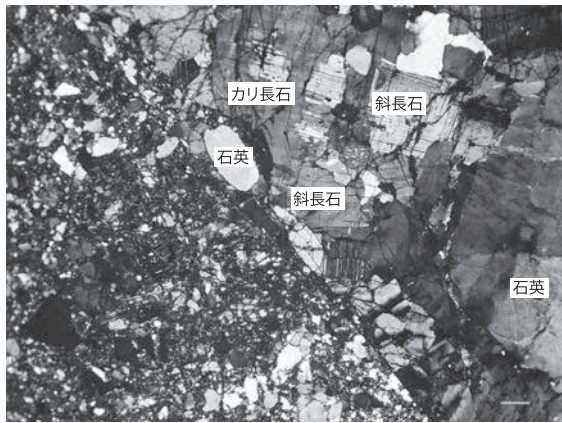
資料2 砂岩



資料3 花崗岩 (普通角閃石・黒雲母)



資料4 花崗岩 (黒雲母)



資料5 砂岩

— 0.2mm

第19図 3号墳石材顕微鏡写真

### 3.加塚遺跡発掘調査報告

#### 1. はじめに

加塚遺跡は、亀岡市安町小屋場に所在する。遺跡範囲内には、須恵器や土師器が散布していることが確認されており、周知の遺跡として「京都府遺跡台帳」に記載されている。この一帯には、古代の集落遺跡が存在したと推定されている。

今回、京都府建築交通部により加塚遺跡の範囲内に道路整備事業が計画されたことから、事業に先行して発掘調査を実施するはこびとなった。

当センターでは、平成22年度国道372号地方道路交付金(公安)事業に係る加塚遺跡発掘調査を、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会等の関係機関、および地元自治会のご協力を得た。なお、本報告は田代が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司  
同 次席総括調査員 田代 弘

調査場所 亀岡市安町小屋場

現地調査期間 平成22年12月8日～平成23年1月18日

調査面積 300㎡

#### 2. 遺跡の立地と周辺の遺跡

加塚遺跡は、西山の北から北東に広がる段丘上に広がる集落遺跡である。周辺には土器類などが散布しているのが認められ、古代の集落遺跡が広い範囲で広がるものと考えられる。調査地点は、山麓から小さく張り出す舌状の段丘上に位置する。北側には浸食による谷地形がある。

この遺跡の周辺には、余部遺跡、加塚古墳、狐塚古墳、南の西山には風ノ口古墳群、安行山古墳群などがある。余部城跡、亀山城跡・亀山城下など中世～近世にかけての城郭とその関連遺構などが分布している。

余部遺跡は、加塚遺跡の北西にある集落遺跡である。弥生時代中期初頭から集落が営ま



第1図 調査地と周辺遺跡  
(『京都府遺跡地図 第3版』第2冊  
京都府教育委員会 2002)

じめ、中期を通じて大型の集落遺跡を形成する。1997年度と1998年度の調査で、中期初頭の玉作り遺構や、方形の竪穴式住居跡が多数みつき、大井川右岸の弥生時代中期の有力なムラのひとつであることが判明した。以後、中世にかけて断続的に遺構が営まれる。

加塚古墳は、全長60mの規模を持つものである。大半が壊れているが、墓地の中に墳丘の一部が残っている。築造時期はわからない。狐塚古墳は、段丘の縁辺に造られた長さ22m、幅17m、高さ2.3mの楕円状の不定型な古墳である。築造時期はわからない。

安行山古墳群、風ノ口古墳群は、古墳時代後期に造営された古墳群と推測されている。安行山古墳群は二基からなる。1号墳は、径18.7m、高さ1.4mの円墳で、段築が確認されている。2号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。風ノ口古墳群は、10基の円墳からなる。4～7・10号墳は横穴式石室があることが確認されている。この古墳群は、直径10mを前後するものが多いが、10号墳だけは直径21.4mと大型であり、この古墳群の中でもっとも地位が高い人物あるいはその家族が埋葬されたと考えられる。

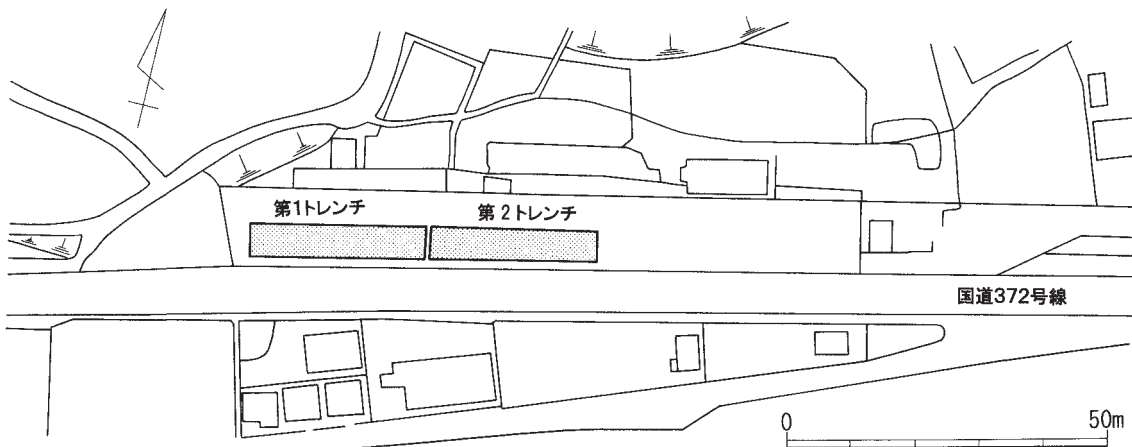
余部城跡は、加塚遺跡の真北に位置する中世の平城跡である。本丸跡、堀跡、空堀跡の一部が遺存している。城主は、福井因幡守貞政である。明智光秀による丹波平定の折に落城し、その後、砦として機能した。

亀山城は、中世に山城として築かれた。その後、明智光秀によって丹波統治の拠点として築城された。江戸時代初頭には重要拠点として整備され、江戸時代を通じて丹波を押さえる城として重要視された。交通の要衝に位置しており、城下町も栄えた。天守台、本丸、石垣、大堀、内堀、外堀の一部が遺存している。

### 3. 調査成果

調査対象地内に東西方向に二本のトレンチを設定した。西側のトレンチを第1トレンチ、東側のトレンチを第2トレンチとした。

調査は、表土である現代の整地土層を重機を用いて除去した。その後、壁面での土層堆積の観察、遺構面を確認するための掘り下げ、精査などを人力により行った。作業の進捗に応じて、随



第2図 トレンチ配置図

時、実測図作成、写真撮影などの記録作業を行った。

二つのトレンチの土層堆積状況は、第4図に示したとおりである。

第1トレンチでは、3層を確認した。第1層が現代置土、第2層が水田土壌である暗青灰色のグライ土壌、第3層が地山にあたる黄灰色粘質土である。かつて、地山を整地し水田耕作地として土地利用されていたが、その後、道路拡張工事や住居地の移転などのため、埋められて整地されたと考えられる。

第2トレンチでは、第1トレンチで確認した第2層がなく、第1層の現代置土、置土直下で地山にあたる黄灰色粘質土である第3層を検出した。

### 第1トレンチ

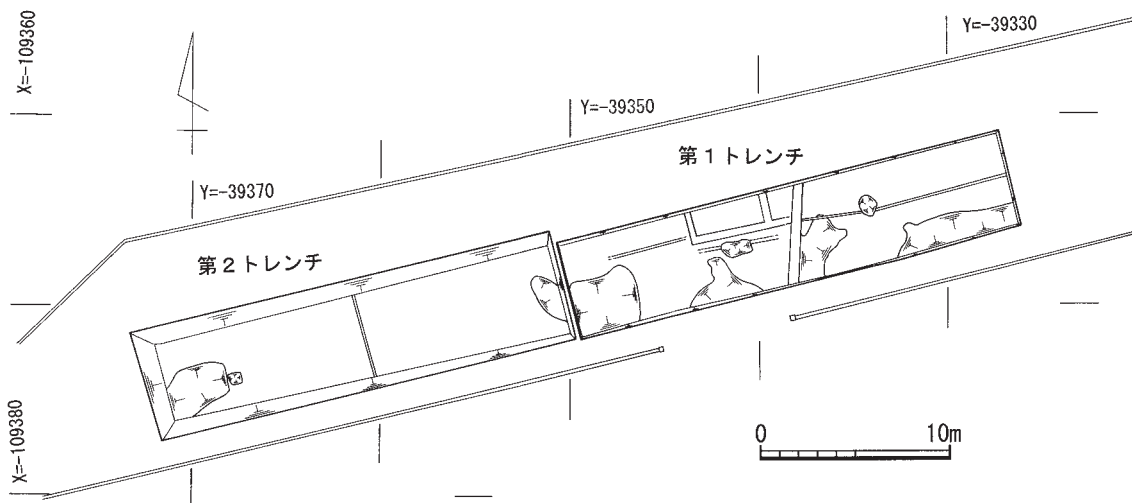
160㎡を調査した。調査にあたって、まず、現代整地層を重機で掘削した。旧水田層が認められたので、重機で床土まで除去し、その後、人力でトレンチ内を掘削し、精査を行った。

表土下60cmで、青灰色の良質の粘土が認められた。この粘土層は、黒ボク層より下位に認められる古い堆積層であり、遺構のベースとなる層である。この粘土層上面で精査を繰り返したが、古代の遺構・遺物を検出することはできなかった。

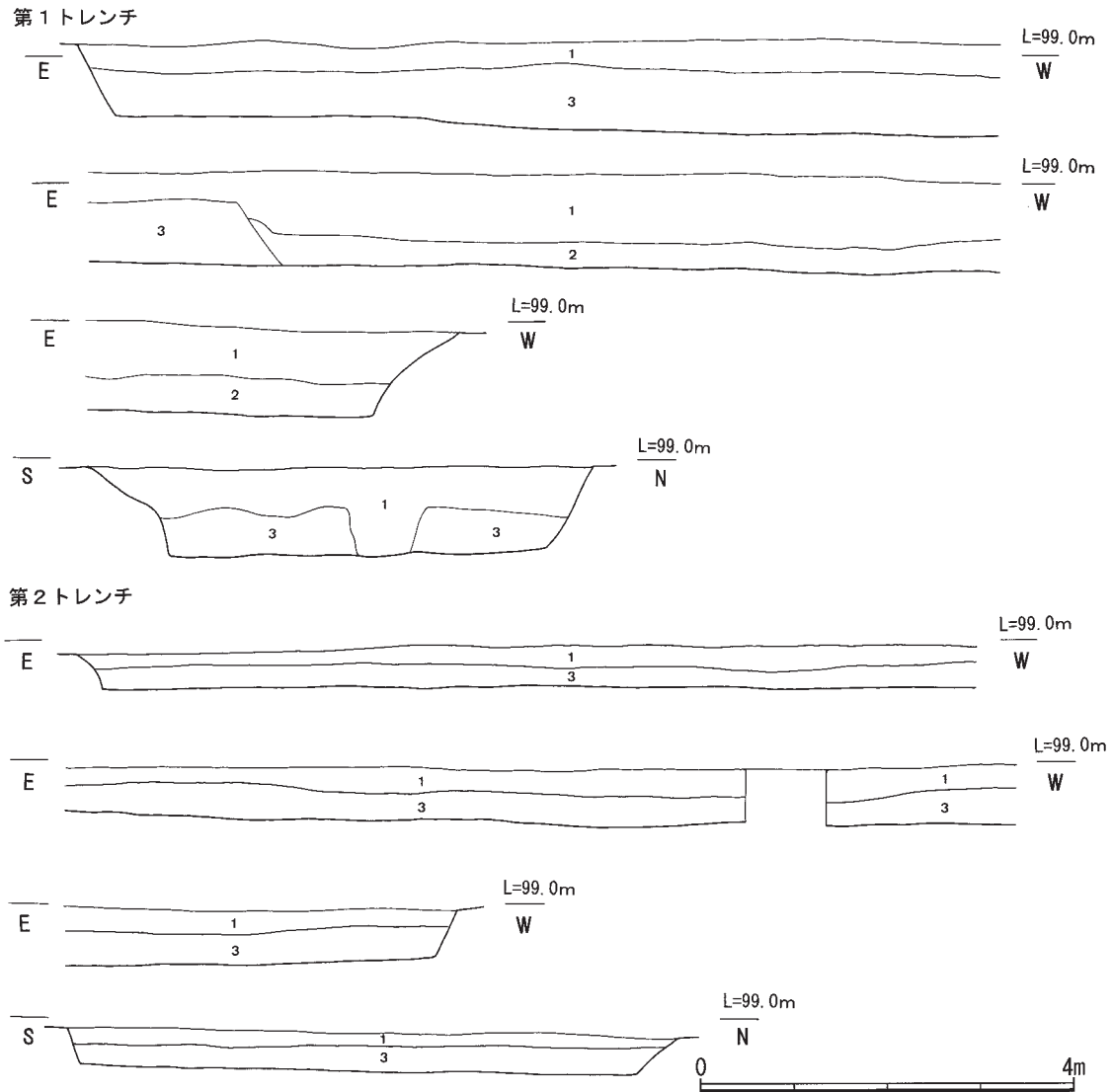
### 第2トレンチ

140㎡を調査した。第1トレンチと同様の方法で、約20cmの現代整地層を除去すると、やや黄色がかった青灰色粘土を検出したが、旧水田跡は認められなかった。この場所は、段丘のピークへと向かう地点にあたるので、もともとベースの水準が高いことから、水田等はすでに削平されて失われたと考えられる。

この粘土層は、第1トレンチ同様、黒ボク層より下位に認められる古い堆積層であり、遺構のベースとなる層である。この粘土層上面で精査を繰り返したが、古代の遺構・遺物を検出することはできなかった。



第3図 第1・2トレンチ実測図



第4図 第1・2トレンチ土層断面実測図

#### 4. おわりに

後世の削平により、遺構面が失われてしまった可能性が高い。加塚遺跡に伴う、遺構・遺物を検出するには到らなかったが、以下の点について新たな知見があった。

今回の調査地点は、地形が改変され、盛り土がなされているなどの見解があった。しかし、水田造成や宅地開発などの際に行われた整地作業により削平は受けているものの、旧地形が段丘縁辺部まで、ほぼ残っていることがわかった。

したがって、西山と北に接する開析谷までの間は、削平された部分を除けば、自然な状態をとどめており、古代の遺構や遺物が遺存している可能性が高いと考えることができる。

## 4.長岡京跡右京第997次(7ANGKN-3地区)

### ・松田遺跡発掘調査報告

#### 1. はじめに

今回の調査は、平成22年度京都縦貫自動車道整備事業に係る発掘調査を、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。

調査地は、乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田(大山崎中学校グラウンド西側)にあたる。この地点は、長岡京復原案(旧条坊)によると、九条大路と西二坊大路の交差点付近(旧条坊復原案)となる。また、東西350m、南北500mの範囲に広がる、縄文時代から中世にかけての集落遺跡である松田遺跡の南西部にもあたる。

今回の調査地の周辺では数回の調査が行われ、多くの成果を得ている。現在の大山崎中学校校舎新築に伴う調査(長岡京跡右京第933次)では、数時代の遺構面を確認しており、弥生時代の流路跡や古墳時代の竪穴式住居跡など、鎌倉時代の掘立柱建物跡や柵列などの遺構を検出している。今回の調査地北側では長岡京跡右京第940次調査が行われているが、第2・3・5トレンチは小泉川の氾濫原にあたっており、遺構の検出には至っていない。今回の調査地の南側では長岡京跡右京第971・974次が行われており、中世の遺構は確認できなかったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出している。周辺地域におけるこのような成果から、今回の調査地の北側は小泉川の氾濫域にあたり、南側は古墳時代と鎌倉時代の遺構が存在するものと想定された。しかし調査対象地内の遺構の分布状況は不明であったため、南北方向と東西方向に線掘りによる調査をし、遺構が広がる範囲を確定し、面的に展開した。調査地は、小泉川の河川保全区域にあたるため、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所が乙訓土木事務所に掘削許可申請を提出し、発掘調査を実施している。

本報告書で使用した国土座標は、現地記録も含め日本測地系の第Ⅵ座標系を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帳』を用いた。現地調査ならびに報告については、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、乙訓土木事務所を始め関係機関、大山崎中学校、地元各自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。なお、本報告は岡崎・田代が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司

同 次席総括調査員 田代 弘

同 第2係 専門調査員 岡崎研一

同 第1係 主査調査員 柴 暁彦

調査場所 乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田

現地調査期間 平成22年6月2日～9月29日

調査面積 1,890㎡

## 2. 位置と環境

大山崎町は、京都盆地の南西部に位置し、大阪府との府境に接する。丹波地域から流れる桂川と、琵琶湖からの宇治川と京都府南部から北流する木津川の三川が、大山崎町の南側で合流し、淀川となって大阪湾に流れる。大山崎町西側には、京都盆地を囲む山地の西南部にあたる西山山



第1図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

- |              |           |           |          |           |
|--------------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 松田遺跡(調査地) | 2. 下海印寺遺跡 | 3. 西山田遺跡  | 4. 伊賀寺遺跡 | 5. 友岡遺跡   |
| 6. 鞆岡廃寺      | 7. 開田遺跡   | 8. 神足遺跡   | 9. 脇山遺跡  | 10. 西法寺遺跡 |
| 11. 南栗ヶ塚遺跡   | 12. 恵解山古墳 | 13. 境野1号墳 | 14. 円明寺跡 | 15. 久保川遺跡 |
| 16. 百々遺跡     | 17. 金蔵遺跡  | 18. 算用田遺跡 | 19. 裕遺跡  | 20. 宮脇遺跡  |
| 21. 下植野南遺跡   | 22. 山崎城跡  | 23. 白味才遺跡 | 24. 山崎遺跡 | 25. 堀尻遺跡  |
| 26. 山崎津遺跡    | 27. 長岡京跡  |           |          |           |

地が迫る。山地の裾には丘陵や段丘が分布し、その東側には桂川とその支流である小泉川によって形成された沖積地が広がる。松田遺跡は、小泉川下流の左岸にあたり、その沖積地の中にわずかに広がる河川沿いの微高地上に立地する。<sup>(注1)</sup>

調査地周辺に分布する遺跡としては、後期旧石器時代にさかのぼるものがある。J R 山崎駅北側の丘陵部に位置する山崎遺跡や天王山東麓の脇山遺跡<sup>(注2)</sup>では、サヌカイトのナイフ形石器などが出土している。長岡京市に所在する下海印寺遺跡も旧石器時代の遺物散布地として知られる。

縄文時代になると草創期の遺跡である久保川遺跡や、早期の松田遺跡、中期から晩期の縄文土器が出土した下植野南遺跡、中期の友岡遺跡、後期の下海印寺遺跡などがある。これらの遺跡は小泉川付近に集中し、縄文時代には小泉川流域が居住に適した環境であったと推測される。

弥生時代の遺跡では、南栗ヶ塚遺跡から弥生時代前期末の土器が出土し<sup>(注3)</sup>、中期前葉の方形周溝墓を検出した。<sup>(注4)</sup> 脇山遺跡からは中期前半の土坑などの遺構が検出された。<sup>(注5)</sup> 調査地北方の碓遺跡では中期後半の住居跡群が、南東の下植野南遺跡では中期中葉の方形周溝墓群が検出されている。

古墳時代には、前期後葉に築造された鳥居前古墳や低位段丘上に築かれた前期末の境野 1 号墳<sup>(注6)</sup>がある。またこの時期の集落として下植野南遺跡、松田遺跡、算用田遺跡、金蔵遺跡、宮脇遺跡がある。古墳時代後期には、これら複数の遺跡を一括りにする形で一大集落が営まれる。

奈良から平安時代には、神亀 2 (725) 年行基によって、山崎橋が築かれる。天平 3 (731) 年には布教活動の拠点として山崎院が建てられる。山崎国府第 1 次調査で出土した埴仏は山崎院に使用されていたとされる。延暦 3 (784) 年、桓武天皇によって長岡京遷都が行われる。京城の一部が大山崎町北部にかかり、また、都から西に向かう道路や港の整備が行われたものと推定される。長岡京初期の建物は、難波宮から移設されており、その際に山崎津が港として整備され、荷揚げが行われた。

平安時代には、嵯峨天皇が水無瀬・交野方面に鷹狩りに出かける際に山崎駅に宿泊される。行幸が頻繁になされるようになると、離宮が設けられることとなり、当初は山崎離宮と呼ばれ、次いで河陽離宮と呼ばれた。天皇没後には離宮の利用が減ると、貞観 3 (861) 年には河陽離宮は国府として再利用されるようになる(第 4 次国府)。第 4 次国府跡は、J R 山崎駅南の離宮八幡宮付近とされている。平安時代後期には、大山崎地域で荏胡麻油の生産が開始されるようになる。

平安時代前期には 2 本の道路、久我畷と西国街道が整備されたと推定されている。条里地割りを斜めに横切る久我畷は、平安京の羅城門から南に伸びる鳥羽造道と鳥羽離宮に続く道である。西国街道は、大山崎町から北上し、長岡京市を経て向日丘陵を横切って平安京に通じる道路である。この道路は条里の方向とは異なり、百々遺跡で関連の遺構が確認されている。この遺跡では西国街道の側溝と、道路沿いに道と平行する形で平安時代から中世にかけての建物群や井戸など<sup>(注7)</sup>が見つかっている。

中世になると油座が結成され、八幡宮を本所とする神人たちが生産と流通を一手に担うようになる。彼らは有力者によって関料免除などの権益を得ている。山崎国府第 20 次調査では、備前焼の大甕が据え付けられた状態で検出され、甕内の土を成分分析すると、荏胡麻油が貯蔵されてい



たことが判明した。また、現在の円明寺には西園寺公経の別荘円明寺山荘が建てられる。現在の大字円明寺に所在する御茶屋池がその庭園跡とされている。

天正10(1582)年6月2日、明智光秀は京都本能寺で織田信長を倒すと、6月13日には羽柴秀吉は小泉川を挟んで明智光秀と対峙し、明智光秀を倒した。羽柴秀吉は、天王山に空堀と石垣などをもつ城を築いた。またこの頃に千利休が造ったとされる茶室が、JR山崎駅前の妙喜庵に現存している。

### 3. 調査概要

平成22年4月から現地調査の協議行い、着手のための準備を進めたが、その中で小泉川堤防斜面及び調査対象地内にヒメボタルの生息地が存在することが判明した。同保存協会と協議した結果、6月2日から現地調査を実施することとなった。

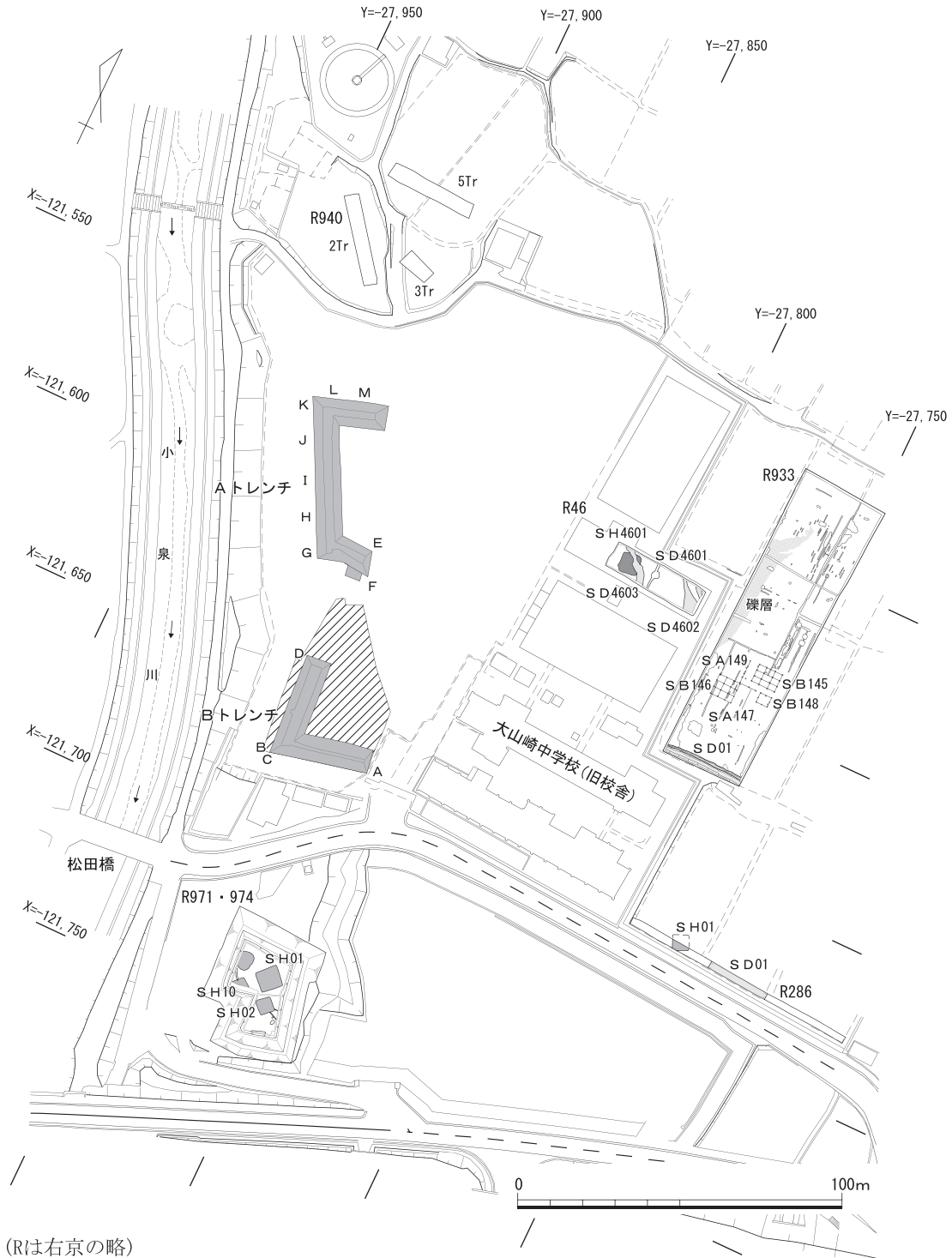
調査は、周辺の調査結果から想定される遺構の広がりの確認やその深さを調べるため、まず大きく2か所にトレンチを設けた。調査対象地の北半部に逆「コ」字状のAトレンチを、南半部には「L」字状にBトレンチを設定した。

Aトレンチは、地表から約2mの深さで重機による掘削を行い、部分的に3か所の深掘りを行った。地表下1m程度で砂層と礫層が互層になって堆積している状況が確認でき、地表から2mより下では拳大から頭大の礫が堆積していた。このことから、小泉川の旧流路もしくは氾濫域であったと推定された。遺構は確認できなかった(第3図下図)。また、Aトレンチ南東隅から灰白色粘質土が認められ、その上に薄く堆積していた灰黄褐色土から瓦器碗や土師器皿の破片が出土した。このことから、この付近より東側では、灰白色粘質土が中世の遺構面になると判断された(第3図上図)。

Bトレンチ南壁を第4図に、西壁を第5図に示した。トレンチの「L」字屈曲部に重機で深掘りを行った。地表から2m以下は、拳大から頭大の礫の堆積(第40層)が認められた。トレンチ断面を精査すると、この礫層上面に柱穴や土坑などの遺構が確認できた。遺構内埋土に瓦器片や土師器片が混入していたことから、この面が中世の遺構面であることがわかった。この層はBトレンチでは、南北・東西にほぼ水平に広がっていた。Aトレンチでの状況をふまえて、Aトレンチ手前までの拡張範囲を設定し(B拡張区)、面的な調査を行うこととした。調査を進めていくとB拡張区南西隅に掘立柱建物跡が存在し、さらに西に延びている可能性があったことから、さらに調査対象地西限まで部分的に拡張を行った。

調査の結果、掘立柱建物跡、柵列、井戸、土坑、流路などで構成された中世の集落の一画を検出した。各遺構ならびに包含層から出土した遺物は、土師器皿や瓦器碗をはじめ青磁や白磁などの陶磁器類、石鍋、銅製の水滴、石製の硯などがあり、13世紀後半から14世紀前半のものが主体であった。

平成22年8月29日に現地説明会を開催し、9月29日をもって調査を終了した。



(Rは右京の略)

(アルファベットは、第3～5図の断面図作成場所)

第2図 松田遺跡調査地配置図

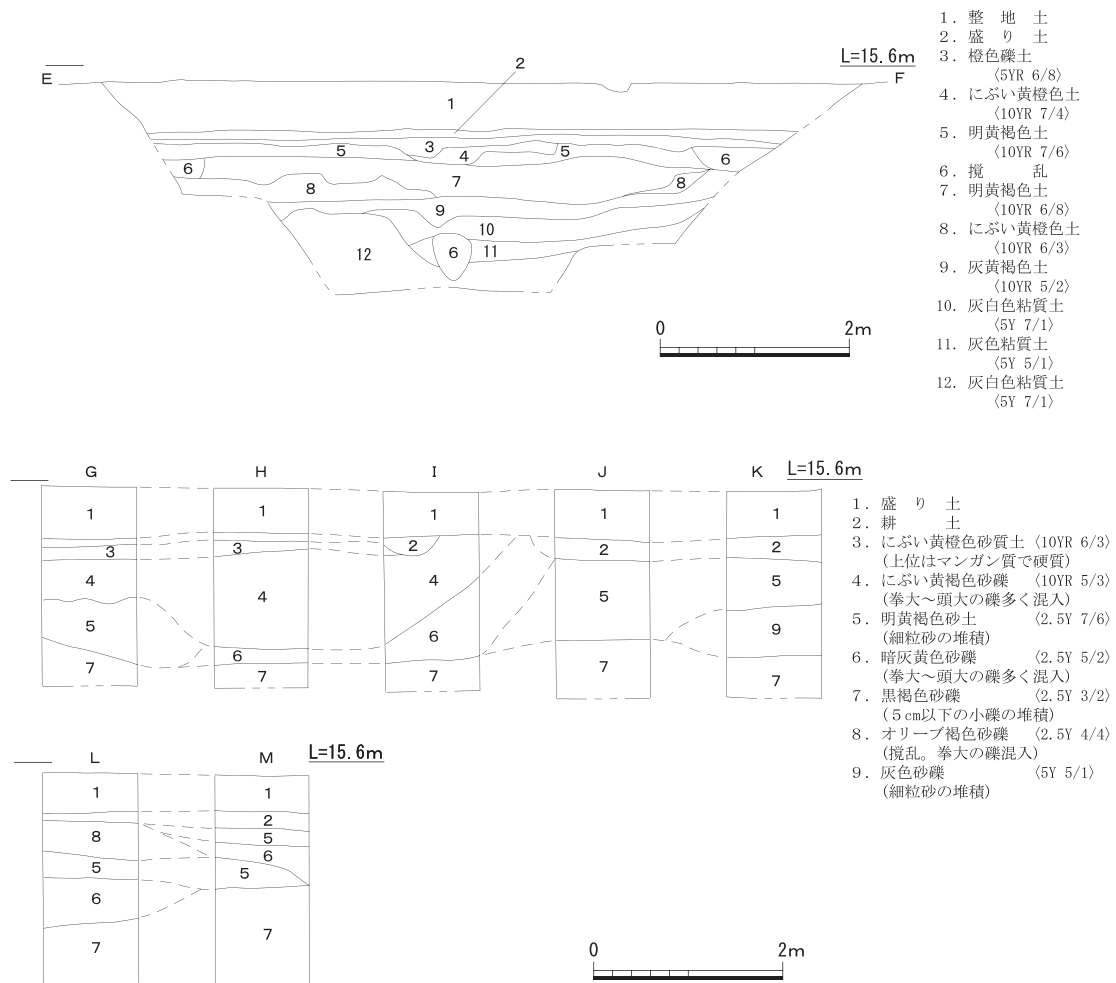
#### 4. 層序

Aトレンチ 調査着手以前は大山崎中学校のグラウンドであったため、地表下0.5mまでは盛り土であった(第3図下図1層)。その下は旧耕作土(第2層)となる。旧耕作土の下は、砂礫や礫の堆積が続いており、部分的に3か所で重機による深掘りを行ったが、同様の堆積状況であった。その堆積の中で2か所ほど「U」字状に堆積する。明黄褐色砂土(第5層)を掘り込むもの(第4層)

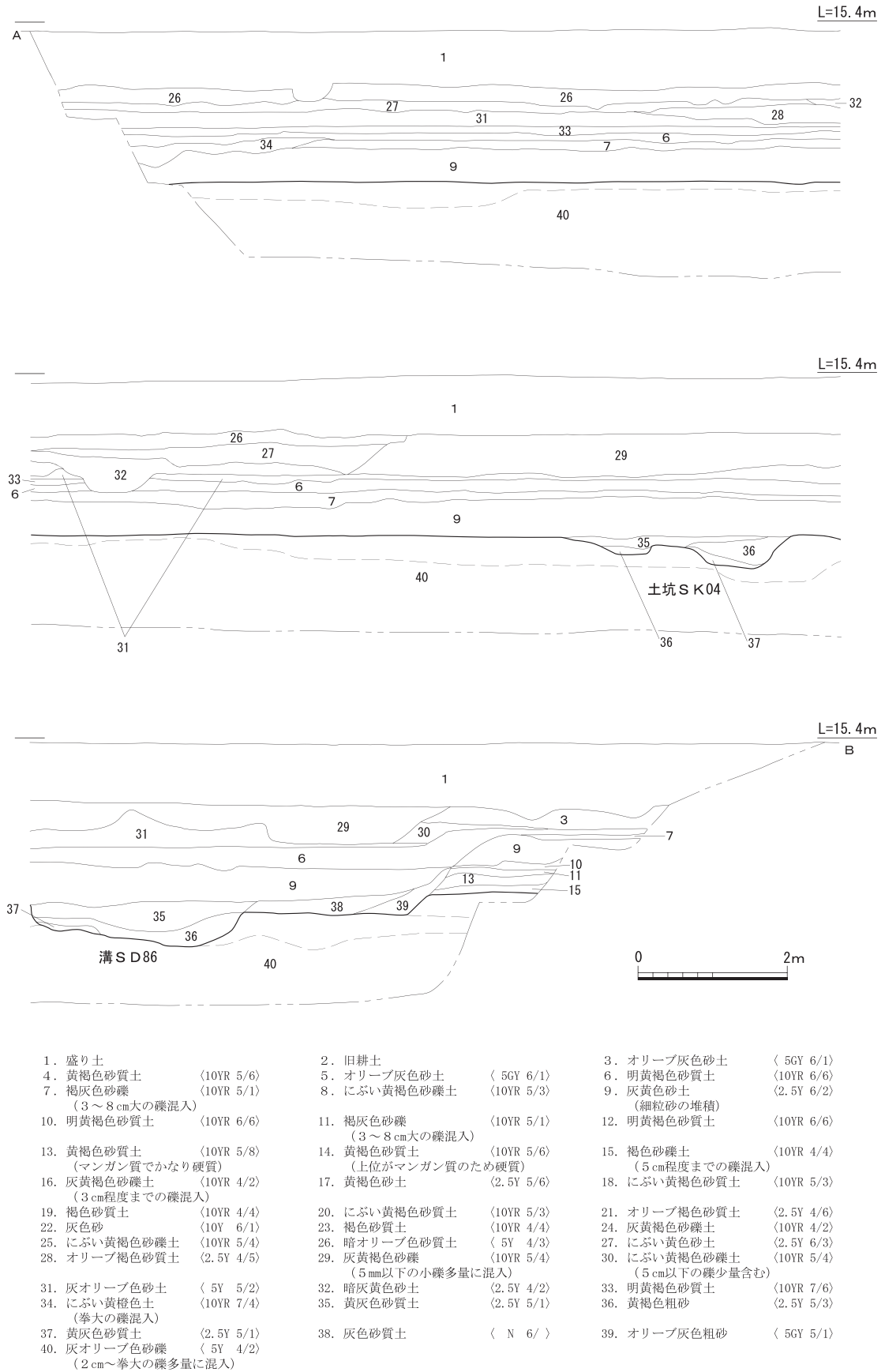
と黒褐色砂礫(第7層)を掘り込む形の流路跡(第6層)である。旧小泉川が時代とともに流域を変えながら堆積していったものと思われる。出土遺物がなく時期については不明である。

Aトレンチ南東部では、上述のものとは異なる堆積が認められた。砂礫や礫の堆積が見られず、灰白色粘質土が見られる(第10～12層)。標高14.0m付近である。この粘質土は、右京第971・974次では、古墳時代後期の遺構面をなしているベースの土と同色・同質である。Aトレンチ南東部では、これ(第12層)を掘り込む形で灰白色粘質土や灰色粘質土を埋土とする溝が検出できた(第10・11層)。この溝の上を遺物包含層である灰黄褐色土が覆っていた(第9層)。遺構埋土である灰白色粘質土と灰黄褐色土からは瓦器椀や土師器皿の破片が出土した。このことから、ここで検出した溝は中世の溝と考えたが、調査地東端をかすめる形で検出したため、全容を把握することはできなかった。

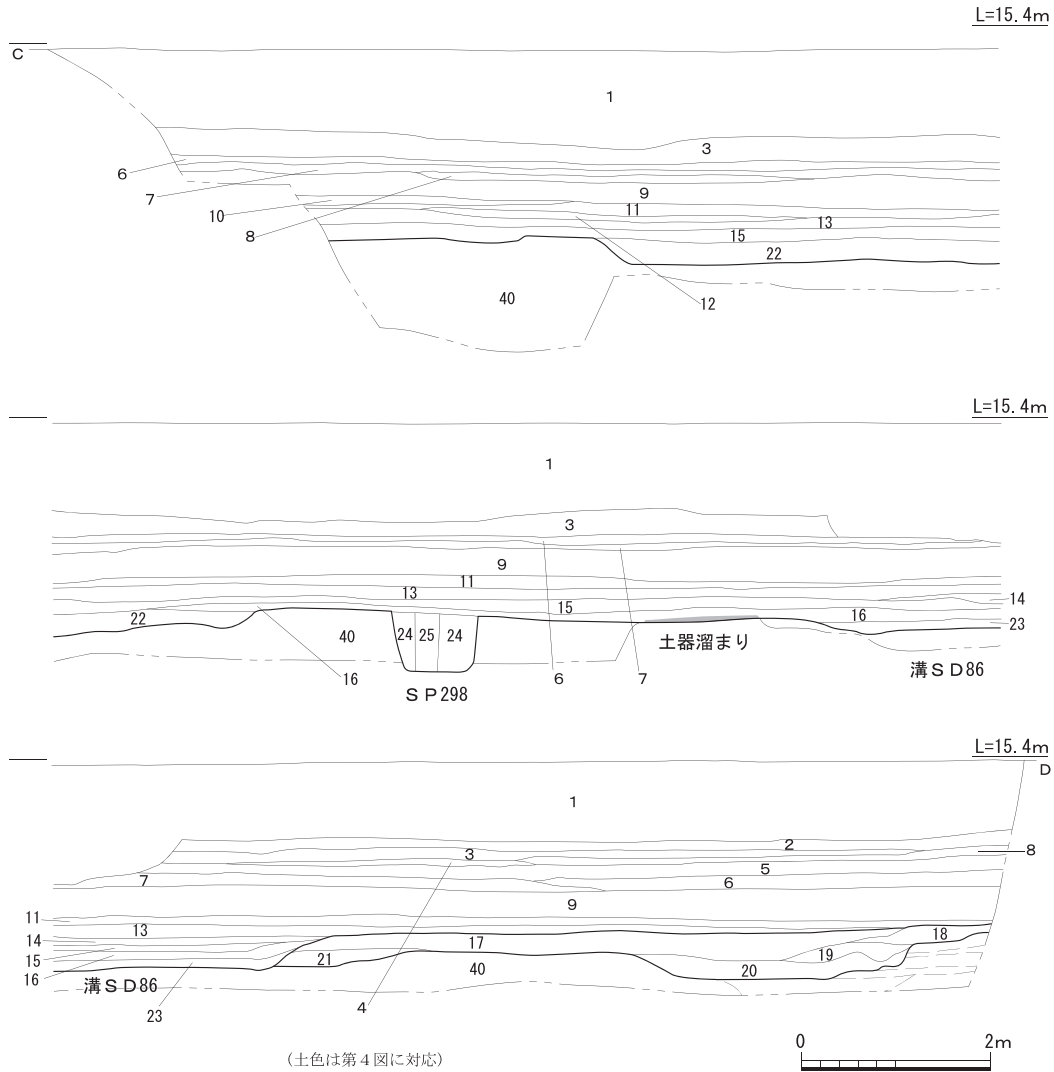
Bトレンチ(第4・5図) 中世の遺構は、灰オリーブ色砂礫を掘り込む形で柱穴、溝や土坑などを検出した。遺構面は、標高13.3mである。東西方向の断面観察では、遺構面直上に堆積した灰黄色砂土(第9層)には瓦器椀や土師器皿の破片が混入していた。土坑SK04や溝SD86がこの断面にかかる。また、西端は旧小泉川の左岸にあたるためか、0.8mほどの盛り土(第9～11・



第3図 Aトレンチ土層断面図



第4図 Bトレンチ土層断面図(1)



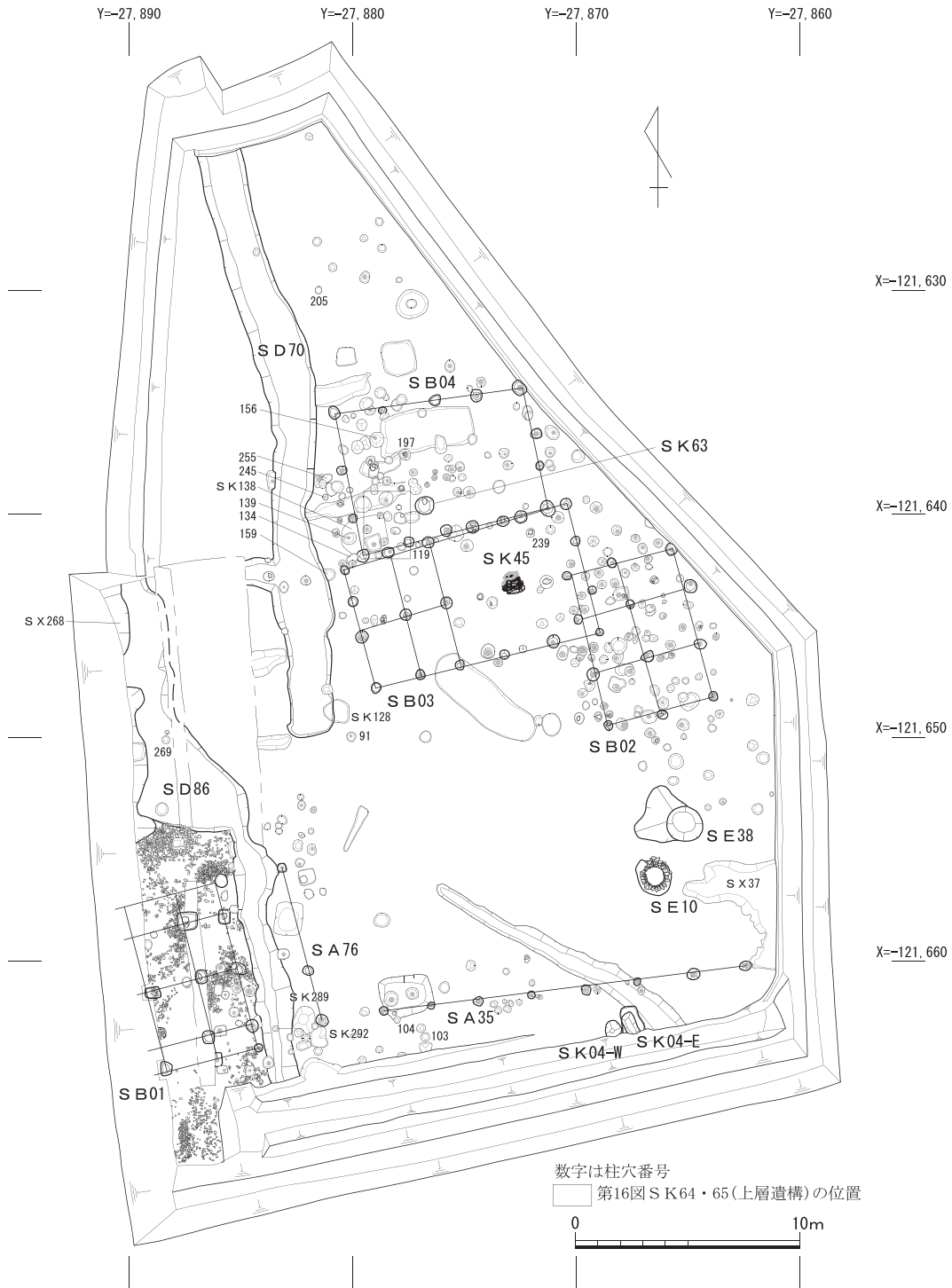
第5図 Bトレンチ土層断面図(2)

13・15層が認められ、土手状になっていたと思われた。盛土内からの遺物の出土はないが、層位から中世以降のものとする。南北方向の断面では、わずかな高まりと一辺0.9mを測る柱穴掘形(S P 298)を確認した。またトレンチ内では、平面形が方形の掘形内に根石と判断される石をもつ柱穴(S P 257・260)を検出した。この近辺には、これらの柱穴で構成される掘立柱建物跡が存在すると想定でき、さらに西方に延びることから、調査対象地西限まで部分的に拡張を行った。遺構面直上から部分的に遺物が集中するかが認められた(S X 02・S D 86肩部付近)。Bトレンチ北端の狭小な範囲では遺構面2面を検出した。出土遺物から、上面が14世紀前半、下面が13世紀後半であった。土坑S K 64・65は上面から掘り込む遺構である。

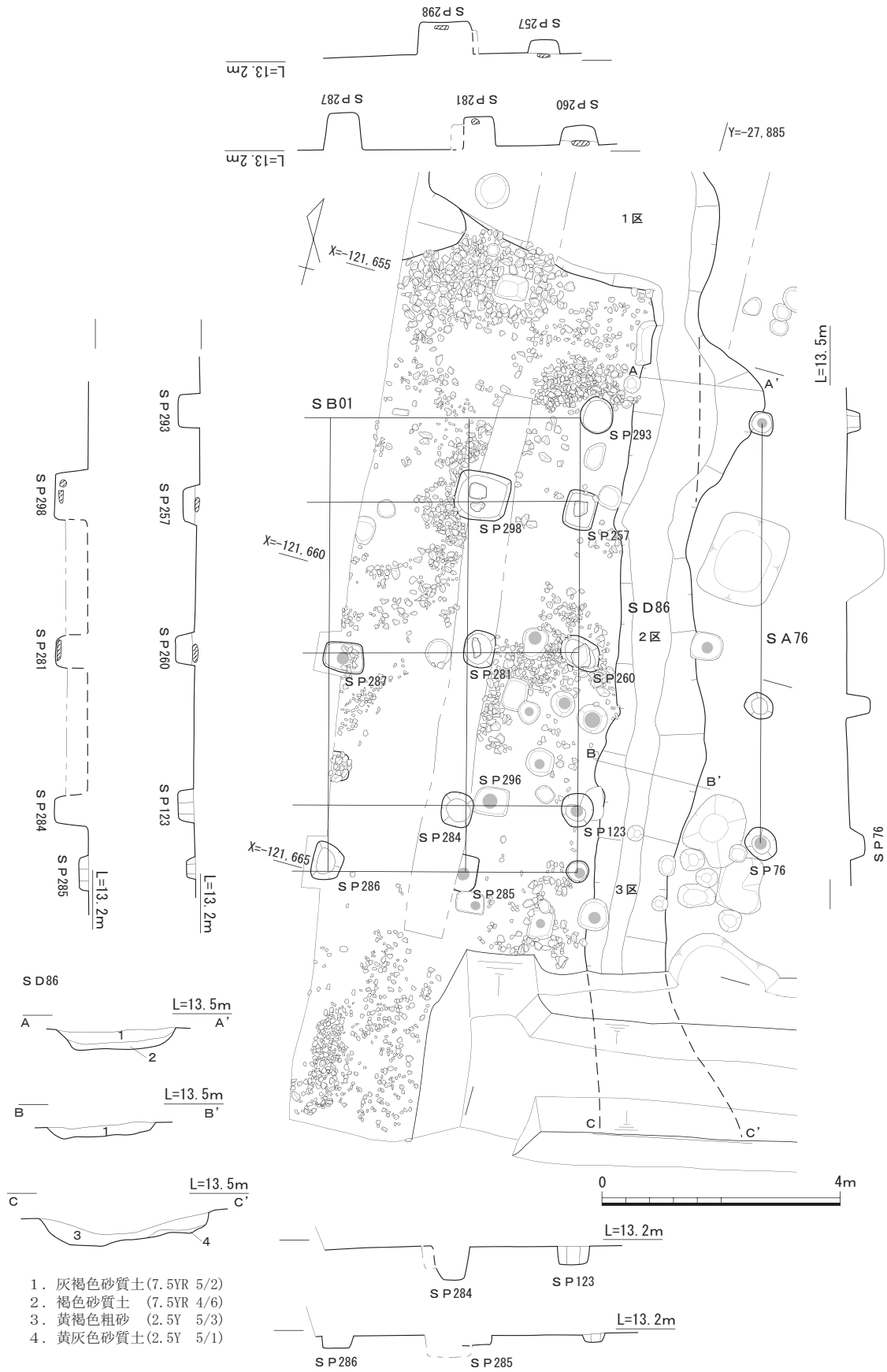
### 5. 検出遺構(第6図)

検出した主要遺構は、掘立柱建物跡4棟、柵列2条、井戸2基、土坑5基、溝2条、その他柱穴群である。これらの遺構は概ね同一面から検出されたが、部分的に20cmほど上から掘り込む遺構も存在した。

掘立柱建物跡 S B 01 (第 7 図) B 拡張区南西隅から検出した掘立柱建物跡である。建物周囲の柱穴掘形は、平面形が円形あるいは隅丸方形で、一辺あるいは直径が 0.4 ~ 0.7m、深さは約 0.2 m と浅い。中央寄りの柱穴掘形は平面形が隅丸方形で、一辺 0.5 ~ 0.9m、深さ約 0.5m と深く、根石を敷くものもあった。柱当たりは径 0.2m である。建物本体としては東西 1 間 (2.3m) 以上 × 南北 2 間 (5.1m) で、北・東・南に庇が付くと考えた。主軸方向は、N14° W である。柱穴内から瓦



第 6 図 遺構配置図



第7図 掘立柱建物跡SB01、柵列SA76、溝SD86実測図

器や土師器片の他、須恵器鉢(32)や瓦質の羽釜(33)や石鍋(34)が出土した。

この建物の東・北側を区画する形で溝 S D86 が逆「L」字に設けられ、さらに東側には建物に平行して柵列 S A76 が配される。建物東側は溝 S D86 と接しているが、北・南側には一定の空地が存在し、拳大の礫が敷かれた状況である。この礫は、小泉川の氾濫によるものではなく、S D86 で区画された内側に集中し、一定の大きさの石で面をなしていること、その範囲は周囲より若干高くなっていることから、意図的に敷かれたものと判断される。

建物跡北東側からは、土師器皿を主体とする遺物が南北1.5m、東西1.0mの範囲に集中した状況で、2か所で検出した。正位置で重なって出土する皿もあった(第8図)。

溝 S D86 (第7・8図) 掘立柱建物跡 S B01 の北側から東側にかけて、逆「L」字状に掘削された溝である。規模は、幅0.6～1.8m、深さ0.1～0.3m、N12°Wである。断面U字状を呈することから溝としたが、溝底に凹凸が見られることや底面が一方の傾斜をなさないことから、排水施設でなく、建物を区画する施設であったと思われる。この落ち込み内やその肩部付近からまとめて遺物が出土した(第8図)。出土遺物は、土師器皿をはじめ瓦器碗や須恵器や白磁など



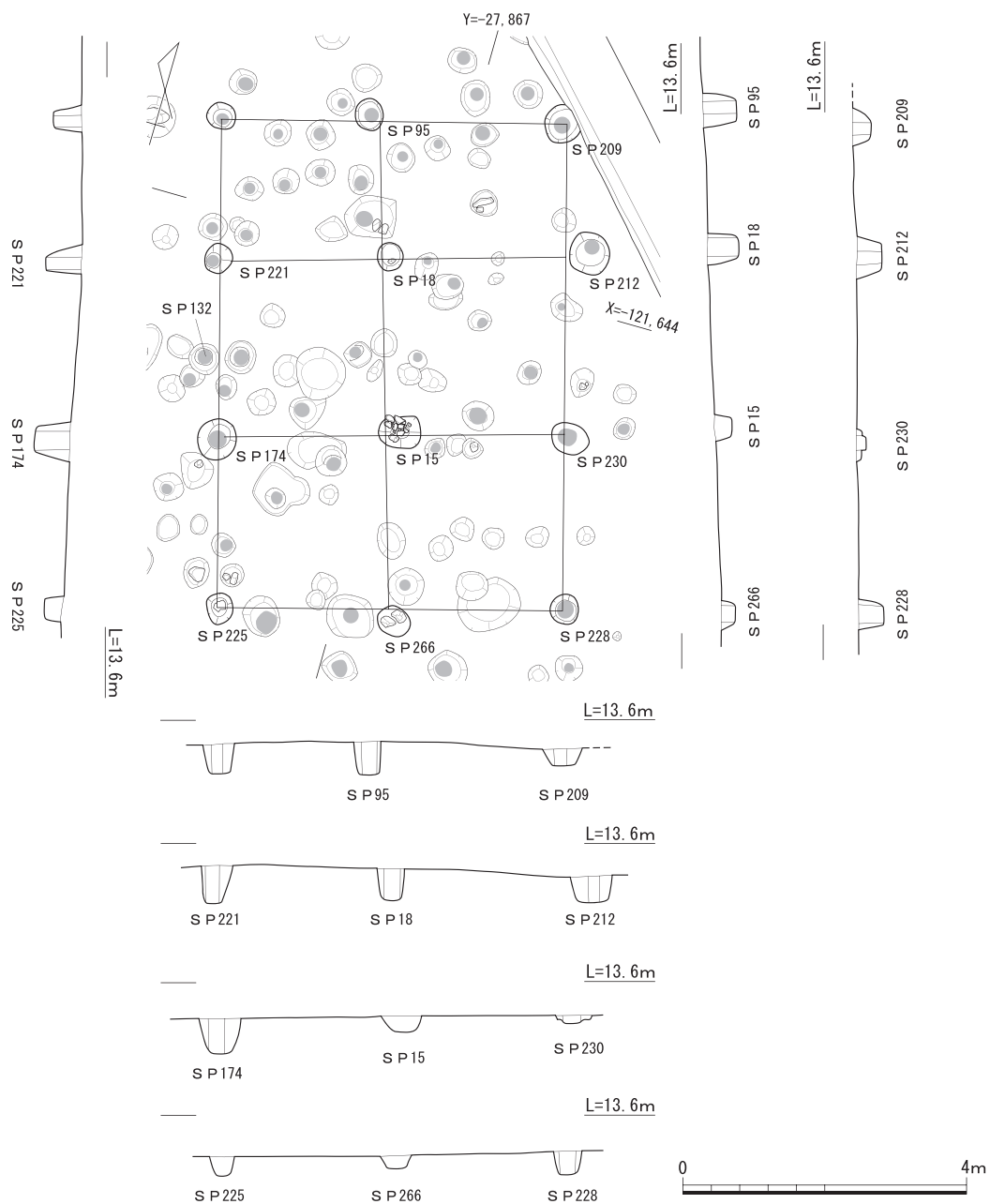
第8図 掘立柱建物跡 S B01 周辺遺物出土状況図



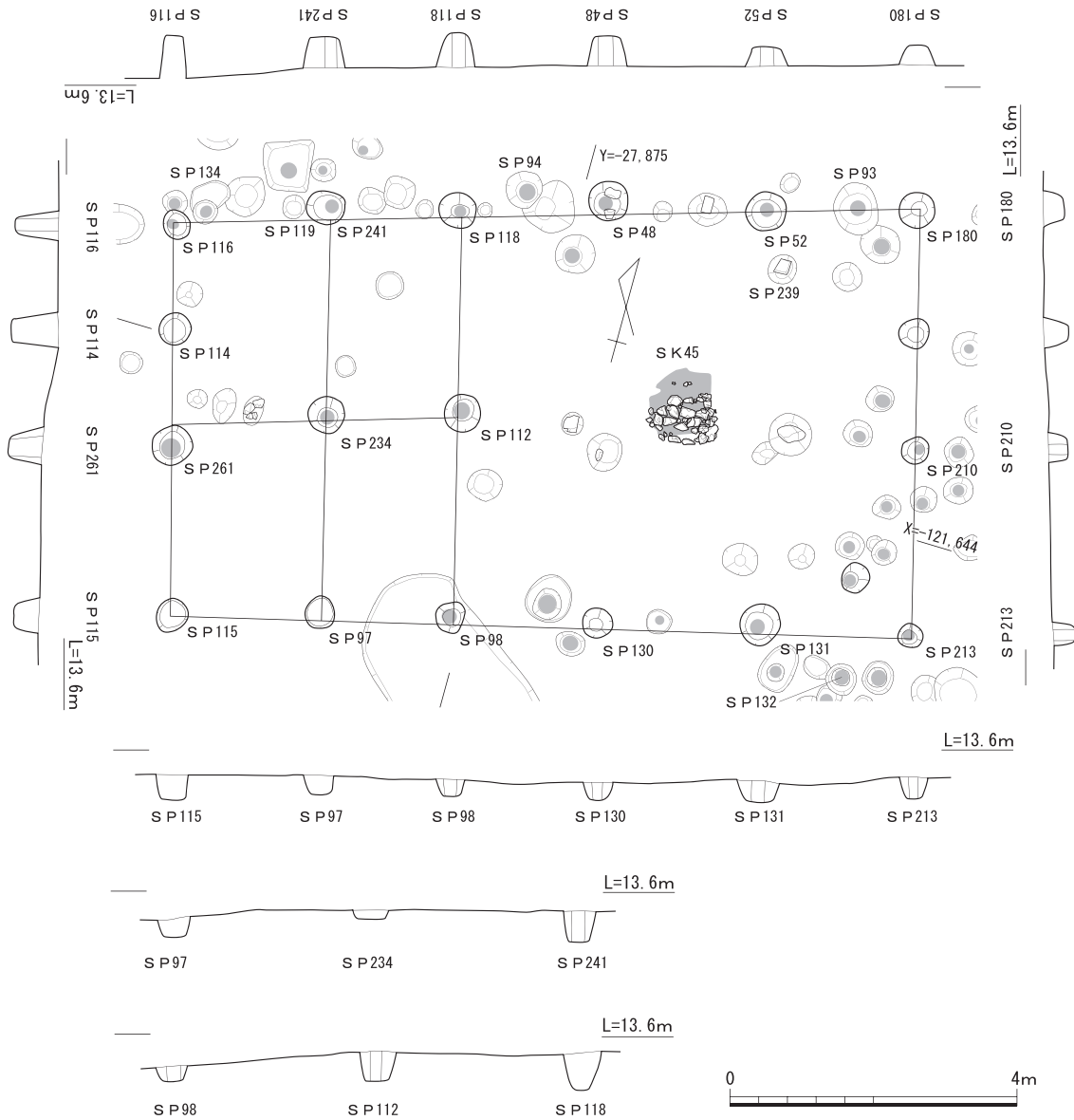
(43～84)がある。S D86肩部付近から出土した遺物は、S B01とS D86の間に敷き詰められたと考える拳大の礫の隙間に、正位置や裏向けに重なるように出土する特徴が見られた。この地点は、S B01の北東部あるいは北辺部付近となり、S B01の良の方角、鬼門にあたることから、掘立柱建物跡S B01で実施された祭祀に関わる可能性もある。

柵列S A76(第7図) 掘立柱建物跡S B01の東辺から東に3.0mの所で検出した、南北方向の柵列である。建物と平行関係にある。一部後世の攪乱で削平されていたが、3間(7.0m)分を検出した。主軸方向は、N15°Wである。柱穴の掘形は円形で、径約0.5m、深さ約0.2mである。柱痕は径0.2mである。

掘立柱建物跡S B02(第9図) 調査地中央東側で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。S



第9図 掘立柱建物跡S B02実測図

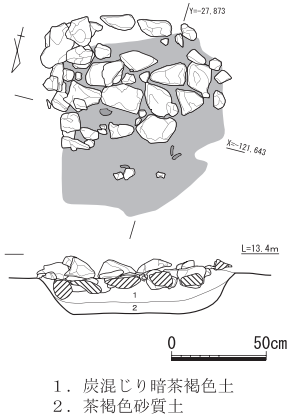


第10図 掘立柱建物跡S B03実測図

B02の北西角がS B03の南東角に重複する。東西2間(4.8m)×南北3間(7.0m)の総柱建物で、柱穴掘形は円形で、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.5mを測る。柱痕は、径0.2～0.3mである。主軸方向は、N15°Wである。柱穴内から瓦器や土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

**掘立柱建物跡S B03(第10図)** 調査地中央で検出した東西棟の建物である。東西5間(10.3m)×南北2間(6.0m)である。柱穴SP234・112が検出できたことから、建物跡西側の東西2間(4.0m)×南北2間(5.5m)は、床貼りと考えられる。建物東側の東西3間(6.3m)×南北2間(6.0m)は、中央部で柱穴が検出できなかったことから、土間であったと考える。この土間の中央から配石遺構SK45を検出した。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.6mを測る。柱痕跡は、径0.2～0.3mである。主軸方向は、N77°Eである。柱穴内から瓦器や土師器片が出土し、図示できたものは土師器皿(9)のみである。

この建物は、掘立柱建物跡S B02・04と重複するが、柱穴の切り合い関係がなく、出土遺物に



- 1. 炭混じり暗茶褐色土
- 2. 茶褐色砂質土

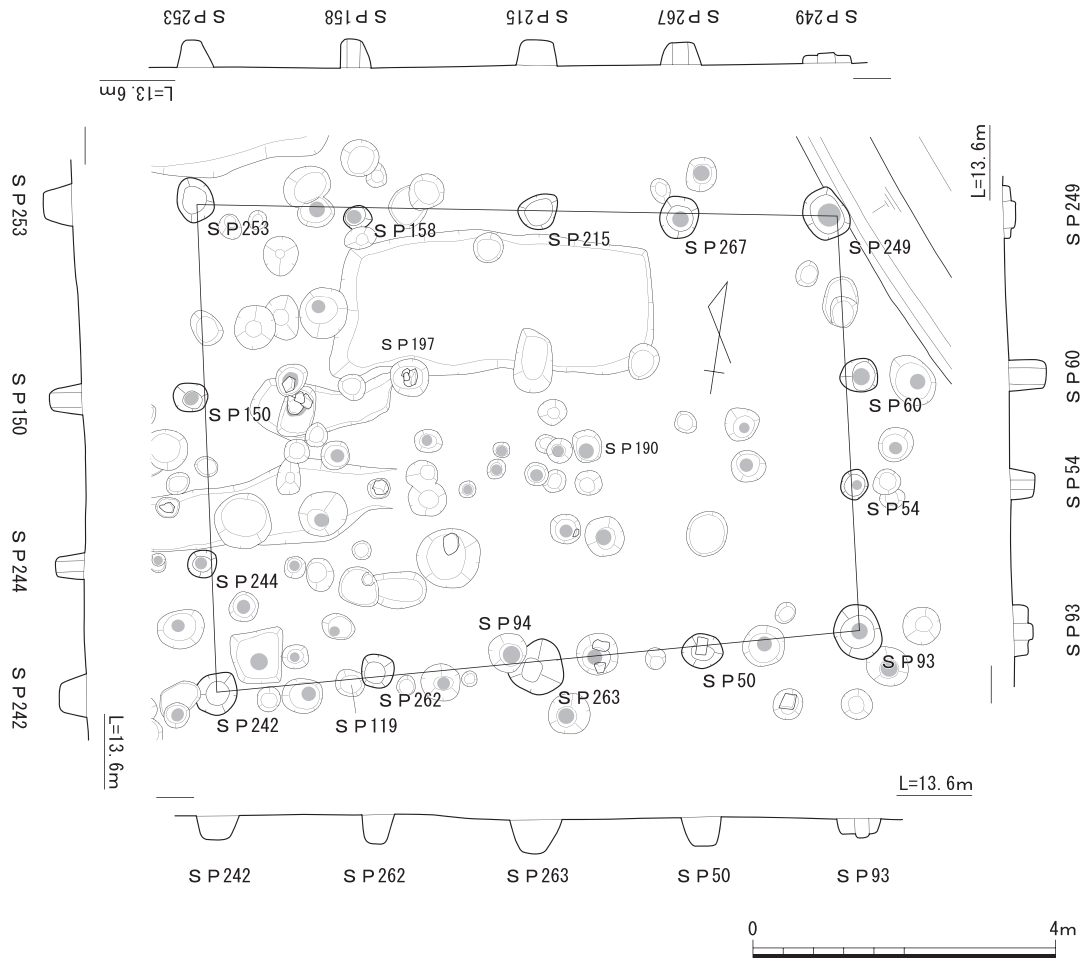
第11図 配石遺構  
SK45実測図

時期差が認められないことから、その構築順は不明である。

配石遺構SK45(第10・11図) 掘立柱建物跡SB03の土間の中央で検出した遺構である。一辺0.85mの遺構で、建物跡に平行して設けられていた。南半分は扁平な石を敷き詰め、南辺・東辺の石は立てていた。石の上面は火を受けて赤色に変色しており、石の隙間には炭が堆積していた。このような状況から、炉であったと考える。配石上面から、土師器皿・高台付皿、瓦器椀(35～42)が出土した。敷き詰められた石礫は、チャート・砂岩などの堆積岩で、チャートが主体をなす。礫は垂円礫に限られ、形状は箱形のものが多く、選択して搬入されたと思われる。

構築時には、一辺1.0m、深さ0.2mの方形の穴を設け、炭混じり暗茶褐色土・茶褐色砂質土を敷き、上面に石を配する。周辺の柱穴内の根石に、火を受けたものが存在したことから、SB03解体時に石が一部抜かれ、新たな建物を建設する際に柱穴の根石などに再利用されたと思われる。

掘立柱建物跡SB04(第12図) 掘立柱建物跡SB03の北側で検出した。SB03の北辺がSB



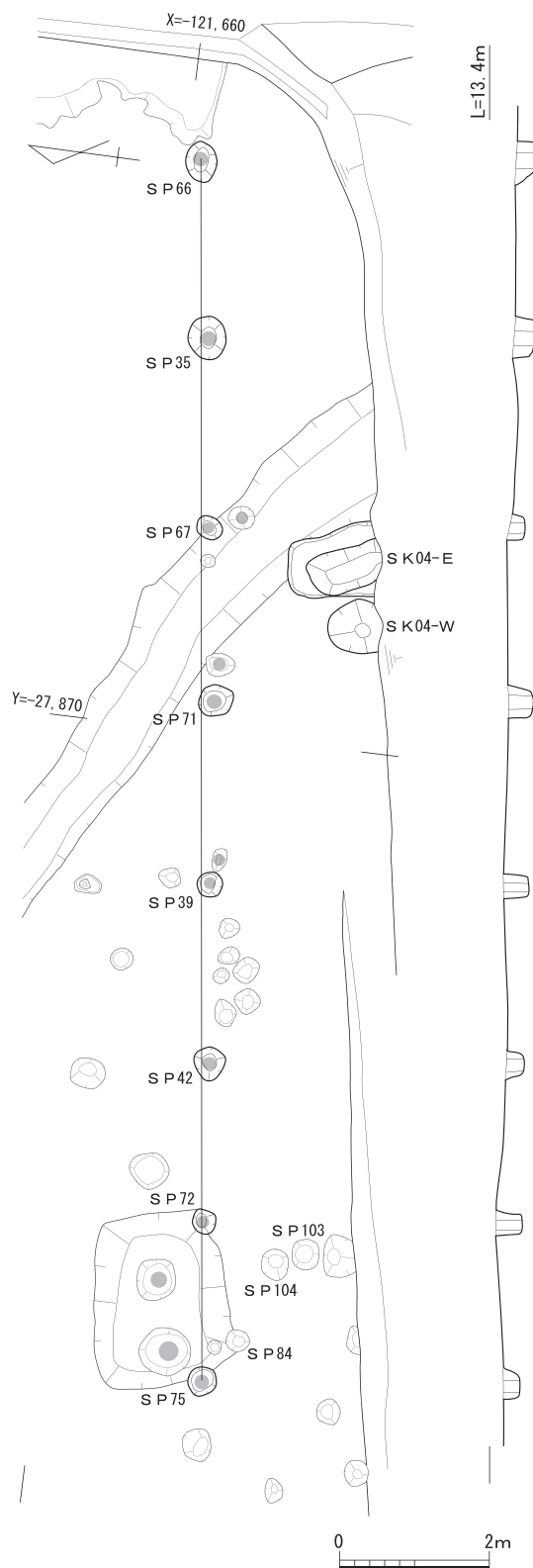
第12図 掘立柱建物跡SB04実測図

04の南辺と重複する。東西4間(8.5m)×南北3間(6.4m)である。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.7m、深さ0.2～0.5mを測る。柱痕跡は、径0.2～0.3mである。主軸の方向は、N82°Eである。柱穴内からは瓦器や土師器片が出土したが、図示できたのは瓦器椀(28～30)だけである。高台が低く、内面底部にわずかな暗文が認められるなど、14世紀前半のものと考えられ、掘立柱建物跡4棟の中では最も新しいと考える。

**柵列 S A 35(第13図)** 調査地南側で検出した東西方向の柵列である。確認したのは7間分で16.3mを測る。柱間は、2.1～2.4mである。さらに東方に延びる可能性もある。柱穴掘形は円形で、径0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mであった。主軸方向はN84°Eである。柵列 S A 76と「L」字に屈曲する柵列の可能性もあるが、柵列 S A 35の西端の S P 75と柵列 S A 76の南端の S P 76の間が2.7mと他の柱間隔より広いことから別の柵列と考えた。

**柱穴群(第14図)** 今回の調査で検出した掘立柱建物跡周辺からは数多くの柱穴を検出した。これらの柱穴群は、掘立柱建物跡や柵列など明確な遺構としては復原できなかったが、中には柱抜き取り穴に瓦器椀や土師器皿がほぼ完形品の状態で埋納されたものや、扁平な石を根石とする柱穴、柱穴の埋土上面に根石を設けたものなどがある。遺物が埋納された柱穴については、建物の建て替えや移築に関連して祭祀が営まれた結果と考える。

柱穴 S P 91や S P 134からは、柱抜き取り後にほぼ完形品の瓦器椀や土師器皿が埋納されていた。S P 91は、瓦器椀4点(20～23)を立てて向かい合わせにし、その中に土師器皿を数点立てた状況であった。S P 134は柱穴検出面か

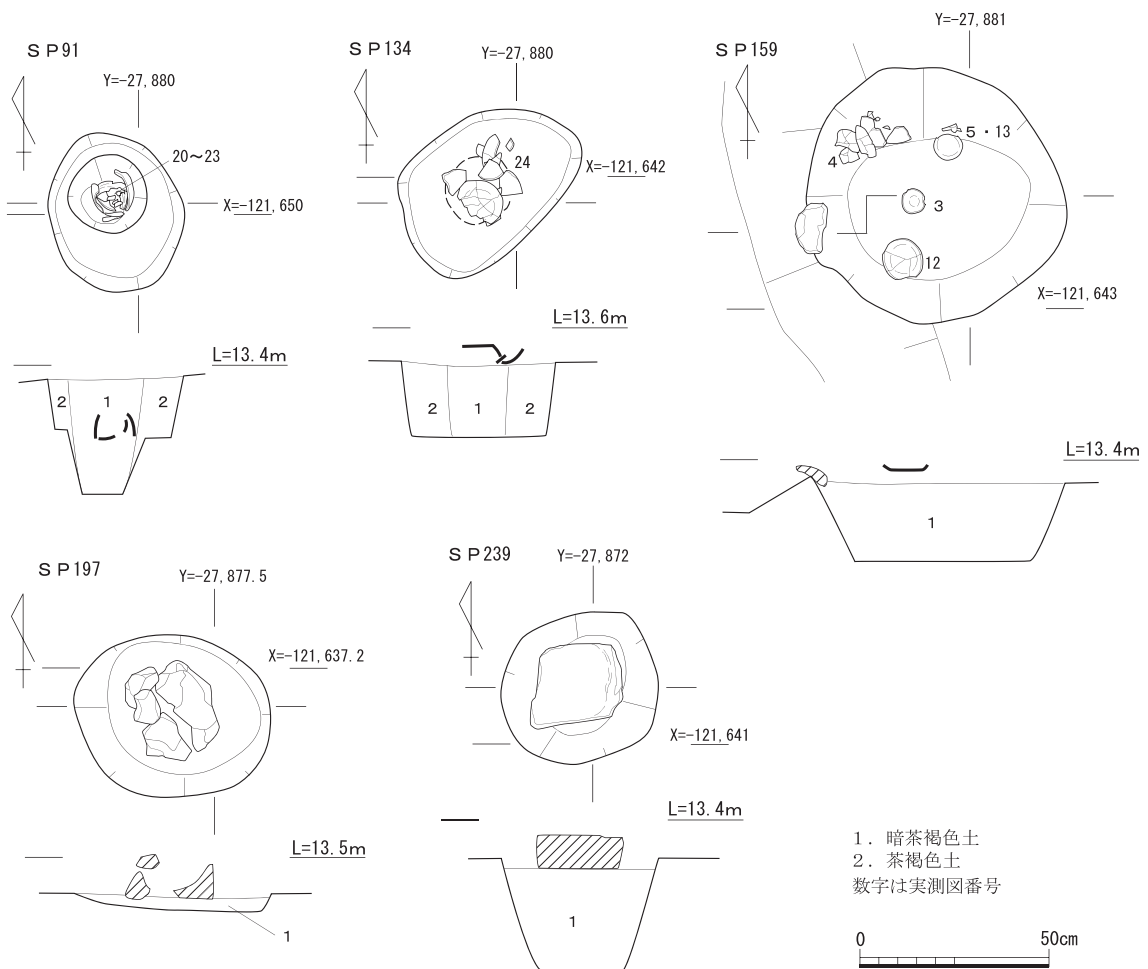


第13図 柵列 S A 35実測図

ら瓦器碗や土師器皿が出土した。これらは掘形からでなく、柱痕跡の埋土中からの出土であった。柱穴159は柱痕跡を確認できなかったが、柱穴検出面から土器片(3・5・12・13)が認められた。

柱穴S P 197は、今回検出した根石をもつ柱穴の中で唯一凝灰岩を根石とするものであった。根石中央部が凹状に窪む。また、半球面上に窪んだ、マンガン質に変化した土の塊が柱穴底面に存在するものもあった。これは、柱穴掘形内に柱を立て、柱底面に接する土が長年の月日でもってマンガン質に硬化し、それが残った結果と考える。また柱穴S P 239から検出した根石は砥石を再利用したもので、柱穴底面での検出ではなく、底面から25cm上の柱穴検出面に据わっていた。このような柱穴が他にも存在したことから、建て替え時に新たに柱掘形を掘るのではなく、建て替え前の古い柱穴を再利用したものと推察する。その際に、根石の高さを上下に置いて調整したために、柱穴の中で根石が底面にあったり、25cmほど浮いたのではないかと考える。

井戸S E 10(第15図) 調査地南東部から検出した石組みの井戸である。拳大から頭大の自然石を積み上げていた。平面形は、上面では円形で、下段に近づくほど方形となる。掘形は円形で、上面では径1.7m、石組み最下段付近では径1.5mを測る。井戸の規模は、上面では径0.8m、下段では一辺0.75m、深さ1.4mを測る。石組み下の井戸最下段には、一辺0.9m、深さ0.3mの方形の坑が設けられ、その掘形に沿う形で幅0.2mの板材を検出した。板材は石組みに沿って方形に組

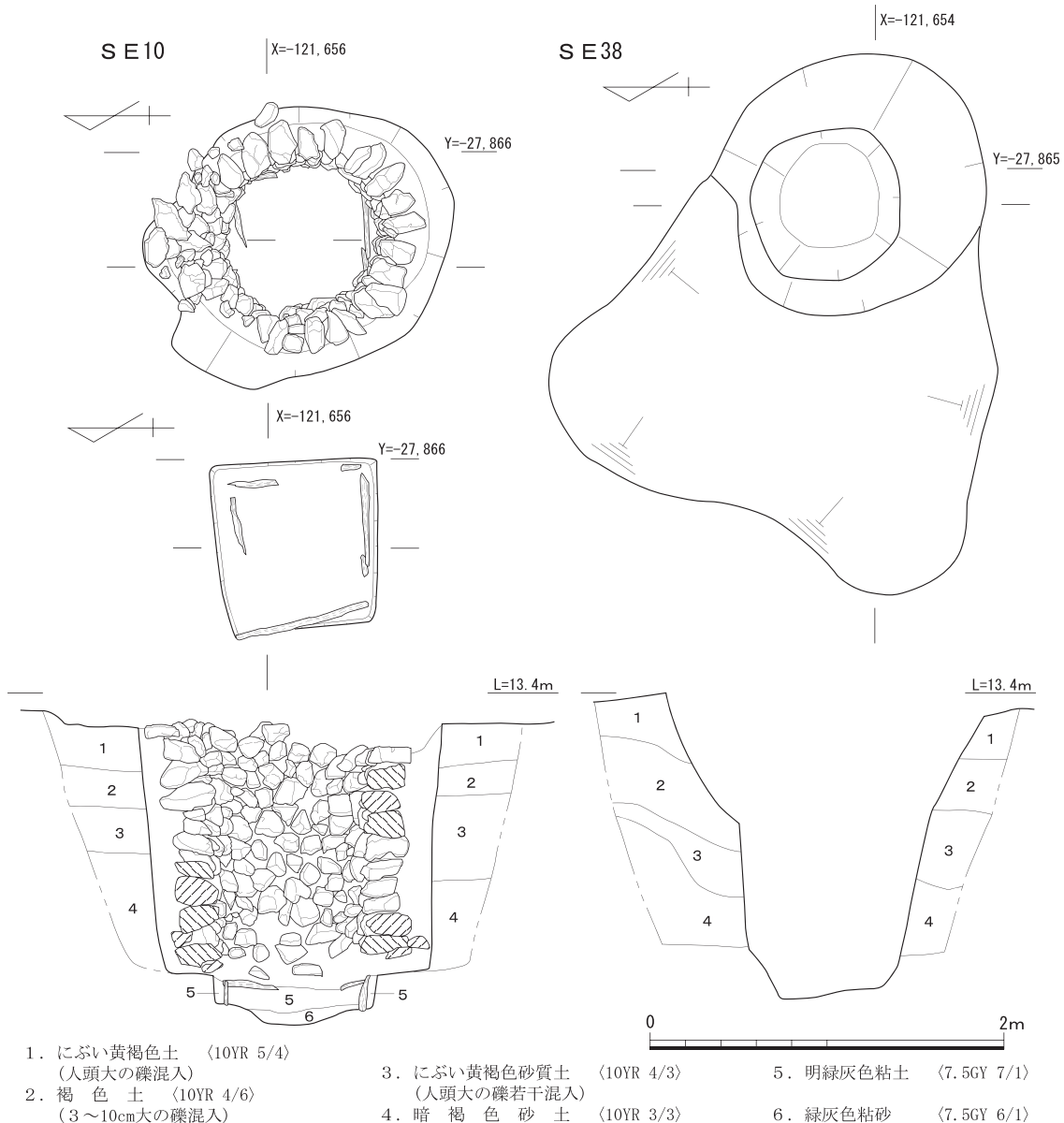


第14図 柱穴内遺物・根石検出状況図

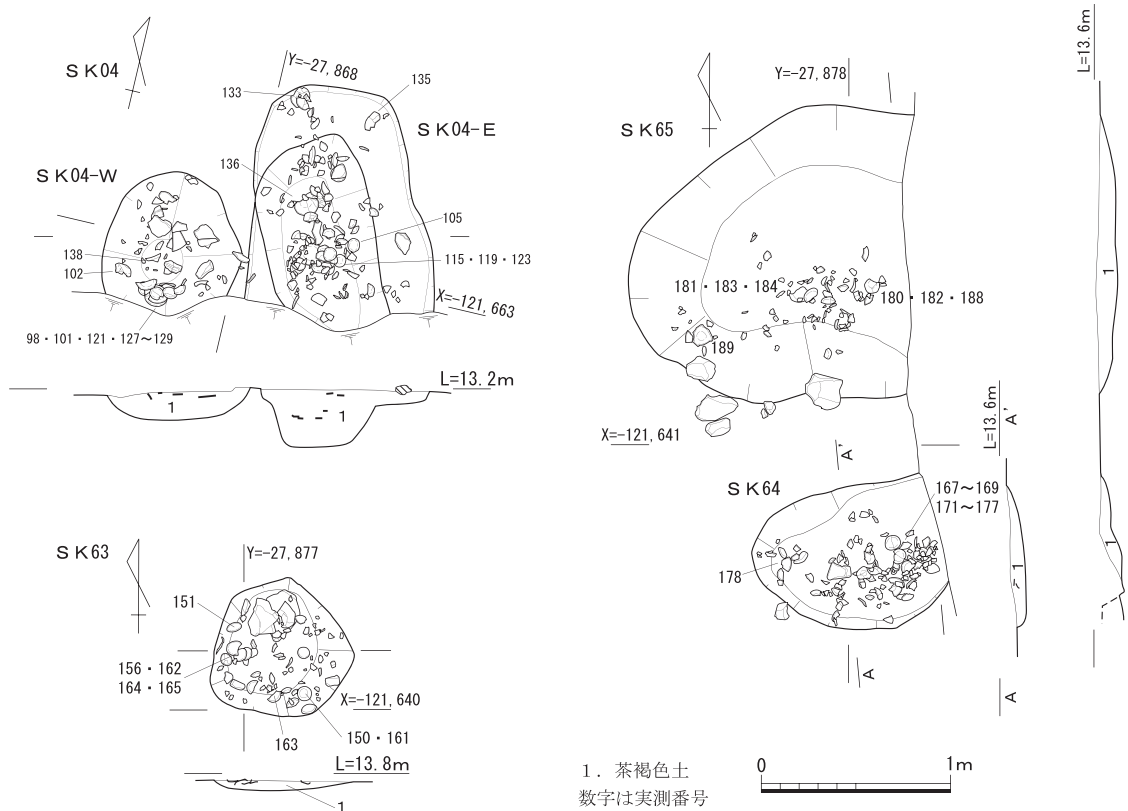
まれていたようであるが、検出時は土圧で崩れていた。方形に組み立てていた板材の内側には明緑灰色粘土や緑灰色粘砂が堆積しており、この付近まで水が溜まっていたと思われる。埋土中から瓦器や土師器の破片など(85・89・92・93・96)が出土した。瓦器椀(89)の年代観から、14世紀前半の井戸と考える。

**井戸 S E 38(第15図)** 調査地南東部、井戸 S E 10の北側に並んで検出した素掘りの井戸である。平面は円形である。井戸掘形の上部西側が大きく崩壊していた。井戸下部での規模は径1.0m、検出面からの深さは1.6mである。埋土中から緑釉陶器・瓦器・土師器など(86～88・90・91・94・95)が出土した。13世紀後半の井戸と考える。

**土坑 S K 04(第16図)** 調査地南側、柵列 S A 35の南側で検出した土坑である。検出時には1基の土坑として調査を進めたが、掘り下げるにしたがって、2基の土坑が隣接していることがわかった。出土遺物も当初は S K 04として取り上げたが、状況が明らかになるにしたがって S K 04



第15図 井戸 S E 10・38実測図



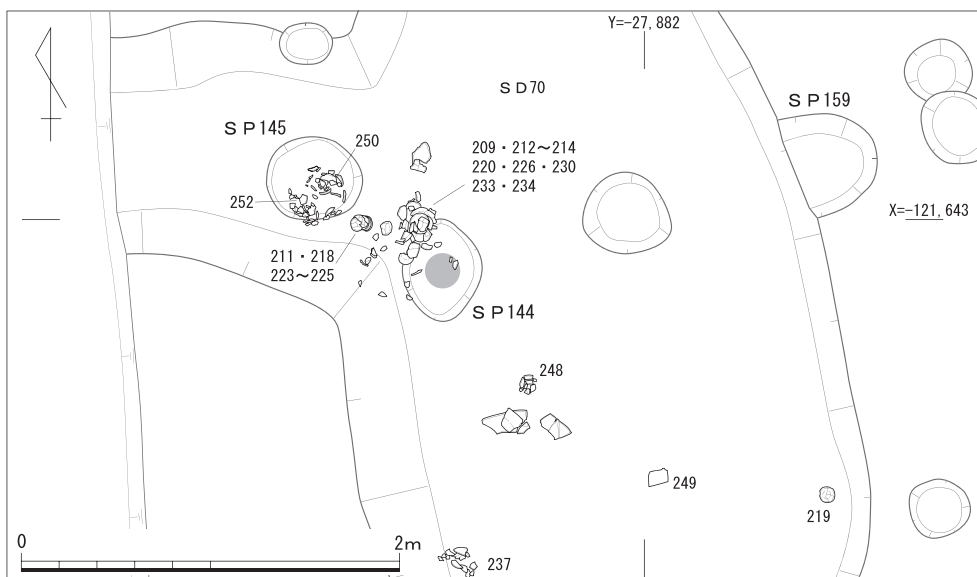
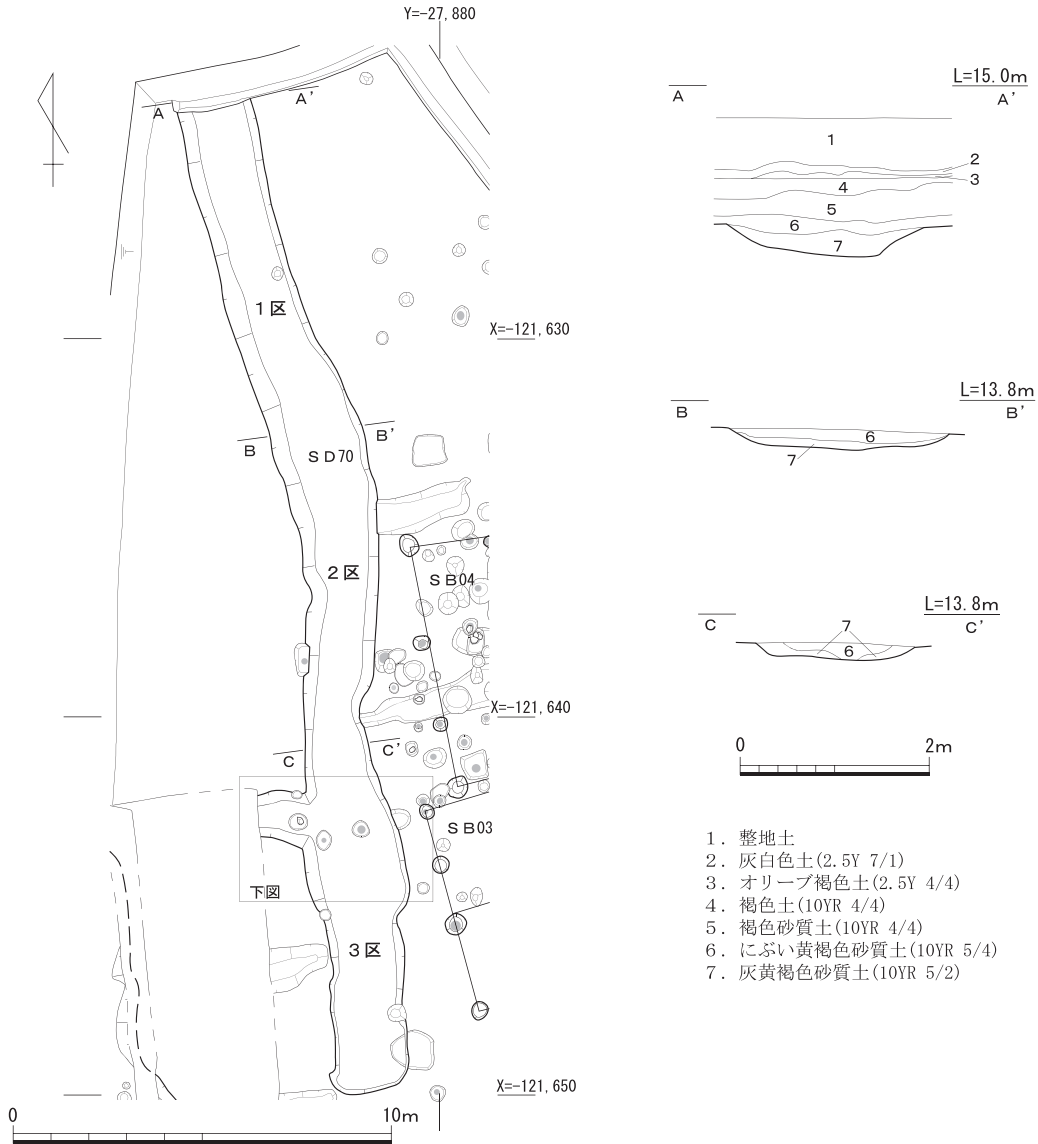
第16図 土坑S K04・63～65実測図

－E・Wとして取り上げた。その規模は、S K04－Eが短辺1.0m、長辺1.3m以上、深さ0.3mを測る、長楕円形の土坑である。S K04－Wは短辺0.7m、長辺0.75m以上、深さ0.15mを測る、楕円形の土坑である。両土坑は同一面で検出でき、出土遺物に時期差がないことから、同一時期の遺構と考える。また両土坑からは多量の土器(97～138)が出土した。その大半は土師器皿である。その出土状況は、ほぼ完形品の皿が正位置に重なる形もしくは、正位置の土師器皿の上に裏向きの皿が重なるなどの状況であった。その様相から廃棄した状況でなく人為的に土坑に入れられ状況である。何らかの祭祀に伴って埋納もしくは、片付けられた可能性が高い。瓦器碗(133～136)の出土により、14世紀前半の土坑と判断される。

**土坑S K63(第16図)** 調査地中央部で検出した円形の土坑である。径0.7m、深さ0.05mを測る。この土坑からは、多量の土師器皿とわずかな瓦器碗が破片の状態出土した。調査後、出土遺物を接合するとほぼ完形品になるものが多いことから(148～166)、この土坑は廃棄土坑であったと判断される。瓦器碗(166)の出土により、14世紀前半の土坑と考える。

**土坑S K64(第16図)** 調査地中央で検出した土坑である。Bトレンチ北端については土坑S K64・65付近までの狭小な範囲で遺構面2面を確認することができた。土坑S K64・65は、この上面で検出した遺構である。

土坑の規模は、長辺1.0m以上、短辺0.8mの長楕円形で、深さ0.1mである。埋土中から土師器や瓦器の破片が出土した(167～179)。これら破片は整理時にかなり接合できたことなどから、廃棄されたものと推測される。瓦器碗の形状などから、13世紀後半と考える。



第17図 溝 S D70実測図



土坑 S K 65(第16図) S K 64に隣接して、北側で検出した楕円形の土坑である。規模は、長辺1.5m以上、短辺1.5m、深さ0.1mを測る。埋土中から、土師器・瓦器・青磁などの破片が出土した(180～189)。これらの遺物は、S K 64と同じく廃棄されたものと思われる。時期もほぼ同時期である。

土坑 S K 128(第6図) 調査地中央付近から検出した不定形な土坑である。長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.2mを測る。溝 S D 70に切られていた。瓦器碗(145～147)が出土した。その形状から13世紀後半と考える。

土坑 S K 138(第6図) 調査地中央部、掘立柱建物跡 S B 04西辺付近で検出した、不定形な土坑である。長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.2mを測る。瓦器碗をはじめとして、白磁や天目茶碗などが出土した(139～144)。瓦器碗は、13世紀後半である。

土坑 S K 289(第6図) 調査地南西部、掘立柱建物跡 S B 01東側から検出した、不定形な土坑である。長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.5mである。須恵器皿、土師器皿、瓦器碗、羽釜などが出土した(190～202)。瓦器碗から13世紀末から14世紀前半と考える。

土坑 S K 292(第6図) 調査地南西部、S K 289の南東隣で検出した、楕円形の土坑である。長辺0.75m、短辺0.5m、深さ0.5mを測る。調査中は土坑と判断したが、同規模の柱穴が周辺に存在することから柱穴の可能性もある。遺物実測図は柱穴群出土とした。瓦器碗(18)が出土した。

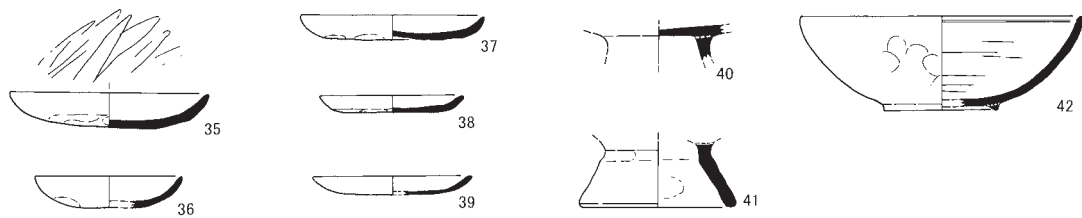
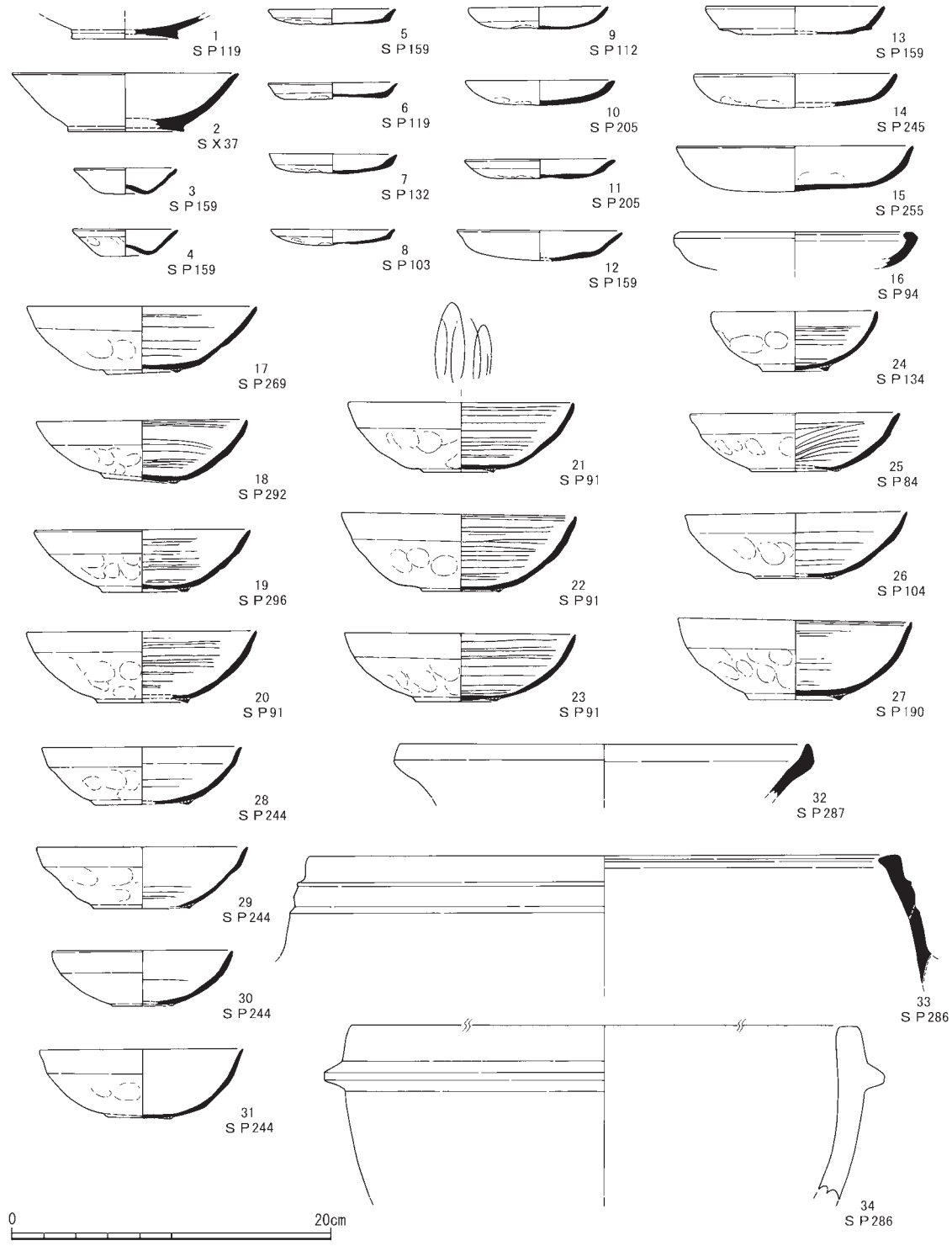
不明遺構 S X 268(第6図) 調査地西辺中央部で検出した。小泉川に向けて落ち込む形で検出したため、旧小泉川の河川肩部になる可能性がある。埋土中から、土師器皿や瓦器碗が出土した(203～207)。

溝 S D 70(第17図) 調査地北側、掘立柱建物跡 S B 03・04の西側で検出した南北方向の溝である。わずかに蛇行するが、両掘立柱建物跡に重なることなく、むしろ建物の西辺に平行するように検出した。検出長26.0m、幅1.8～2.3m、深さ0.1～0.15mを測る。3区画に分けて遺物を取り上げた。区画境でB-B'、C-C'の断面図を作成した。1・2区からは少量の遺物が破片の状態出土した。それに対し3区からは多量の遺物が出土した。遺物は、土師器皿や瓦器碗をはじめ白磁や石鍋のほか、白磁の合子蓋がある(208～252)。特に西方に溝が分岐する付近に遺物が集中した。西方に分岐する溝の南肩部付近から出土した遺物は、正位置あるいは裏向けに重なって出土した。この遺物群については、当初溝の埋土中から出土したと考えたが、溝完掘後に溝の底面で柱穴を検出したことから、この遺物群は柱穴に伴ったものである可能性もある。瓦器碗は、13世紀前半と14世紀前半のものが出土することから、掘立柱建物跡群が存在した期間、この溝は機能していたと思われる。

## 6. 出土遺物(第18～24図)

出土遺物には土師器や瓦器が多く、土器・金属器(貨幣)などがコンテナバッドにして18箱出土した。以下、出土遺構ごとに記述する。

柱穴群(第18図 1～34) 柱穴から出土した遺物は第18図に図示し、図番の下に出土した遺構



第18図 出土遺物実測図(1)

番号を併記した。今回検出した掘立柱建物跡に伴う遺物としては、S B01に伴うものが32～34で、S B03に伴うものが9で、S B04に伴うものが28～30である。20～23はS P91から出土したもので、柱抜き取り後に意図的に埋納されたと判断される遺物である。

1・2は、須恵器碗である。蛇の目高台である。この時期の遺物の出土は極めて少ないことから、混入したと思われる。3・4は、土師器皿である。底部中央が上方に盛り上がる、いわゆるへそ皿である。白色系の土師器皿である。14世紀前半である。5～8は、平坦な底部と短く外反する口縁部からなる。内外面にユビオサエの痕跡がわずかに残る。9～13は、丸みを帯びた底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。底部に指押さえ痕跡が残るものもある。14・15は、平坦な底部から上方に立ち上がる皿である。口径8.0～11.0cmの5～13と比べて、14・15は12.5～14.5cmとひとまわり大きい。部分的に指押さえ痕跡が残る。いずれもDタイプの土師器皿である。<sup>(注8)</sup>16は、口縁端部が内上方に尖る。器壁の厚い皿である。17～27は、楠葉型の瓦器碗である。平坦な底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は上方に立ち上がる。体部から口縁部内面には、ヘラミガキを施す。外面下半には指押さえ痕跡が残る。低い高台を貼り付ける。17～21、23～26は、口縁端部を尖り気味に丸くおさめる。体部半ば上位で、器壁を厚くして、わずかに屈曲する。22・27は口縁部内面、端部付近にヘラ状工具による沈線が巡る。28～31は、口径11.5～13.5cmとやや口径の小さなもので、底部から体部にかけて丸みをもつ。底部内面下半に粗いヘラミガキを施す。外面に指押さえ痕跡が部分的にみられる。簡略された高台が付く。32は、東播系の須恵器鉢である。口縁端部を上方に尖らせる。33は、瓦質土器の羽釜である。34は、石鍋である。

**配石遺構 S K 45**(第18図35～42) 配石遺構 S K 45は、掘立柱建物跡 S B03の付属施設と考えられたことから、これらの遺物は S B03の構築時期を示すものである。

35は、瓦器皿である。見込みにジグザグ状のヘラミガキを施す。36～39は、口径8.0～10.0cmのDタイプの皿である。底部外面に指押さえ痕跡が残る。40・41は、高台付皿である。高台は外下方を向き、丸くおさめる。42は、楠葉型の瓦器碗である。内外面は摩滅が著しいが、口縁部内面端部付近に1条の沈潜が巡り、体部内面にはヘラミガキが認められた。外面には指押さえ痕跡が部分的に残る。断面逆三角形の高台が付く。13世紀前半と思われる。

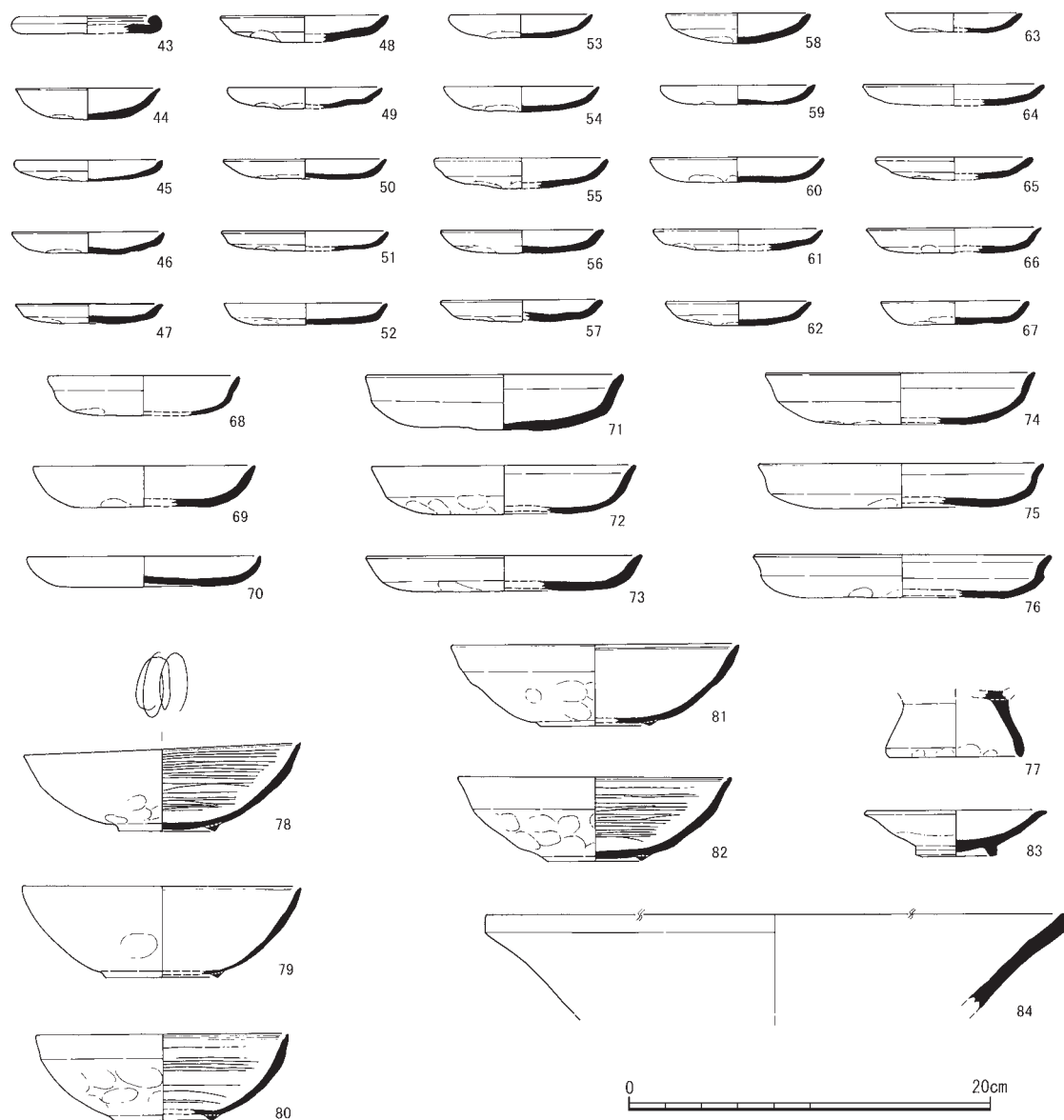
**溝 S D 86及び周辺部**(第19図43～84) 掘立柱建物跡 S B01周辺部、溝 S D 86内、肩部付近から出土した遺物群である。S B01に伴う施設、あるいはそこで行われた祭祀もしくは儀式に係わる遺物と考えられることから、S B01の時期を示す遺物群と考える。出土地点の明確なものは第8図に示した。その他は溝 S D 86内出土である。

43は、口縁端部が玉縁状のCタイプの皿である。いわゆるコースター型の皿である。44～76は、土師器皿である。44は、体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。45～67は、平坦な底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる。口径9.0cm前後のDタイプの皿である。体部外面に指押さえ痕跡が認められた。68～76は、口径11.0～16.0cmの大型の皿である。口縁部を強く一段ナデを施し、端部は外反する。底部外面に指押さえ痕跡が残る。Dタイプの皿である。77

は、高台付皿である。端部は、下方に尖る。端部内外面に、指押さえ痕跡が認められた。78～82は、楠葉型の瓦器椀である。平坦な底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部内面端部付近に沈線が巡る。体部内面にヘラミガキを施し、外面下半に指押さえ痕が認められる。高さの低い、逆三角形の高台を貼り付ける。78の見込みには、ヘラミガキを施す。83は、白磁皿である。84は、須恵器鉢である。

井戸S E 10・38(第20図85～96) 井戸S E 10出土のものは、85・89・92・93・96で、井戸S E 38出土は、86～88・90・91・94・95である。

85は、須恵器杯底部である。底部縁部に輪状高台を貼り付ける。9世紀前半のもので、瓦器椀とともに出土したことから、混入遺物である。86は、緑釉陶器椀の底部である。削り出し高台である。内外面に緑釉を施す。10世紀代のもので、混入遺物である。87・88・90・91は、楠葉型の



第19図 出土遺物実測図(2)

瓦器碗である。87は、口縁部内面端部付近に沈線が巡る。88・90・91は、口縁端部を上方に尖らせる。逆三角形の高台を貼り付ける。体部内面には、ヘラミガキが施される。外面下半には指押さえ痕跡が残る。S E 38の時期を決めるもので、13世紀前半と思われる。89は、外上方に立ち上がる瓦器碗で、口径10.5cmと小型である。内面に粗くヘラミガキを施す。13世紀末から14世紀初頭と考える。S E 10の時期を決めるものである。92は、瓦質の壺である。93は、青磁碗の底部である。94・95は、土師器皿である。口縁部を強く一段ナデする。Dタイプの皿である。96は、東播系の須恵器鉢である。

土坑 S K 04(第20図97～138) 土坑 S K 04-E 出土のものは、97・99・100・103～115・117～120・122～124・126・130～133・135～137である。土坑 S K 04-W 出土のものは、98・101・102・116・121・125・127～129・134・138である。97～126は、口径8.0cm前後の小型の皿である。平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面に指押さえ痕を残す。Dタイプの皿である。127～132は、口径12.0cm前後の皿である。平坦な底部と外反する口縁部からなる。底部外面に指押さえを施す。129・131・132は、口縁部を一段ナデする。底部外面に指押さえする。133～136は、体部が外上方に立ち上がり、口縁部付近で緩やかに屈曲し、端部は上に尖る。外面に指押さえ痕跡が残る。内面にはヘラミガキは認められない。14世紀前半と考える。137は、瓦器鍋である。口縁部はS字状に屈曲する。口縁部外面に指押さえ痕を認める。138は、東播系の須恵器鉢である。

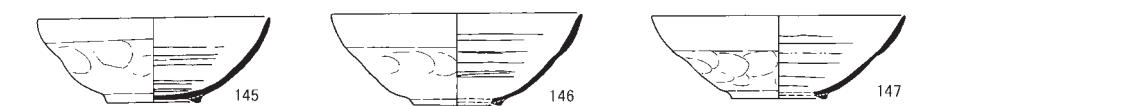
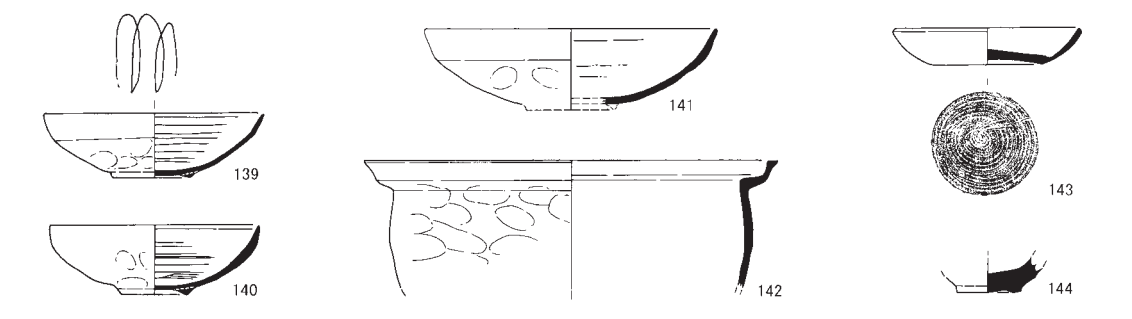
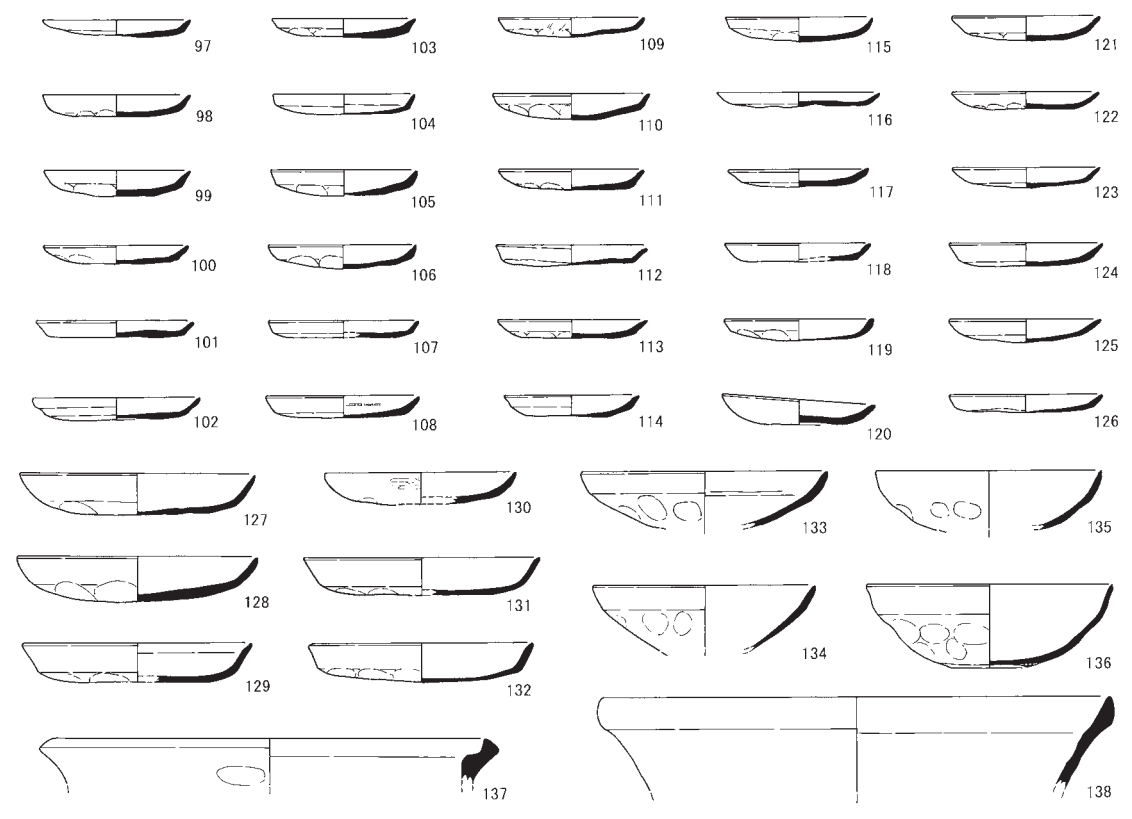
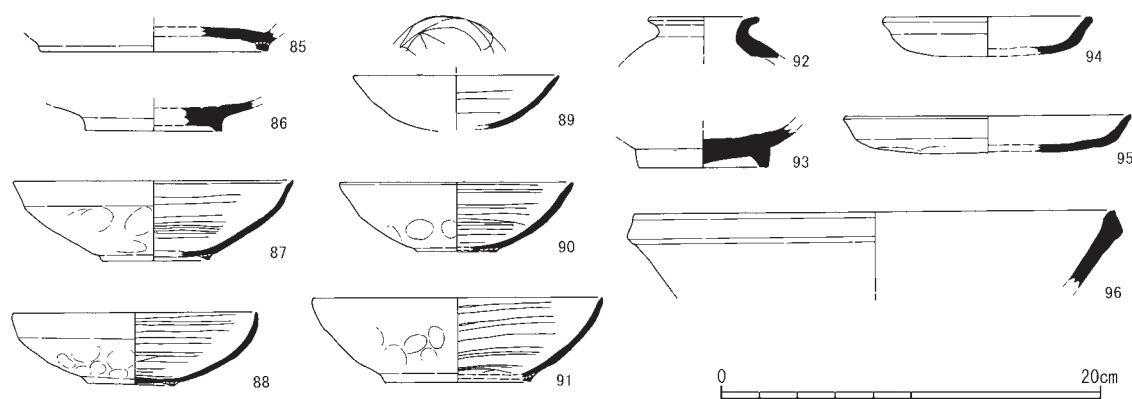
土坑 S K 138(第20図139～144) 139～141は、体部は上方に立ち上がり、口縁部付近でわずかに屈曲し、端部は上方を向く。体部内面をヘラミガキし、体部外面下半に指押さえを施す。逆三角形の高台を貼り付ける。13世紀後半である。142は、瓦質の鍋である。体部外面に指押さえ痕が多くみられる。143は、白磁皿である。底部外面に糸切り痕が残る。144は、天目茶碗の底部である。

土坑 S K 128(第20図145～147) 145～147は、口径13.0cm前後の楠葉型瓦器碗である。内面にはヘラミガキ、外面下半に指押さえ痕が残る。13世紀後半である。

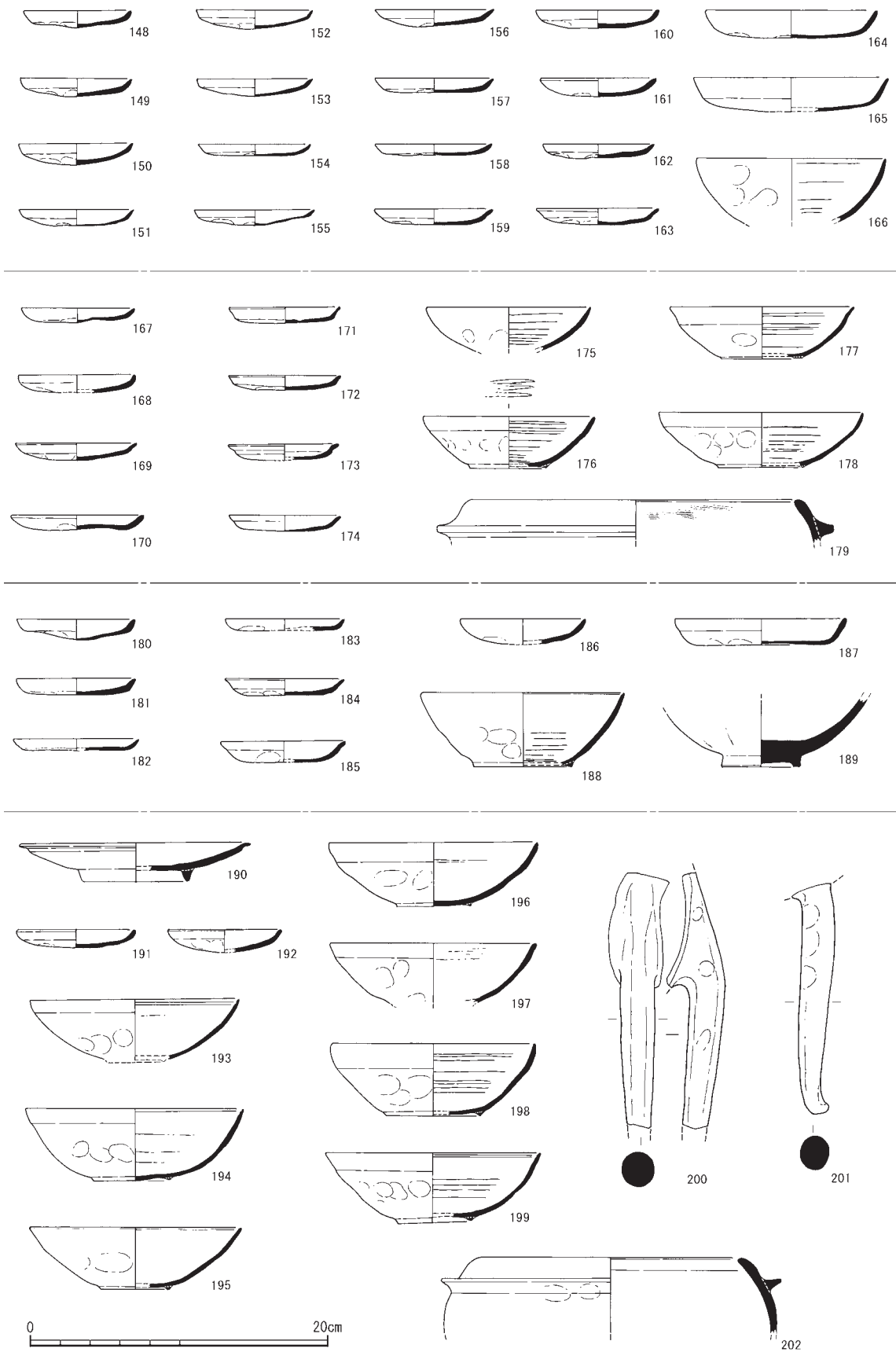
土坑 S K 63(第21図148～166) 148～163は、口径8.0cm前後の土師器皿である。平坦な底部と短く立ち上がる口縁部からなる。外面底部に指押さえを施す。Dタイプの皿である。164・165は、口径12.0cm前後の皿である。口縁部を一段ナデする。外面底部に指押さえを施す。166は、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部は上方に尖る。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。13世紀後半と考える。

土坑 S K 64(第21図167～179) 167～174は、口径8.0cm前後の土師器皿である。167～172・174は、平坦な底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。外面底部に指押さえ痕跡が残る。Dタイプの皿である。173は、口縁部がS字状に大きく外反する、ての字口縁の皿である。175～178は、楠葉型の瓦器碗である。口縁部付近で緩やかに屈曲し、端部は上方に尖る。内面はヘラミガキを、外面には指押さえを施す。かなり低い高台を貼り付ける。179は、瓦質の羽釜である。

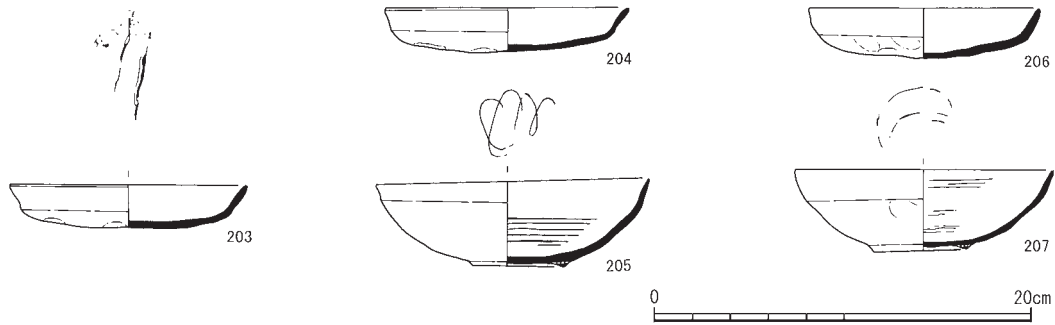
土坑 S K 65(第21図180～189) 180～186は、口径8.0cm前後の土師器皿である。Dタイプの



第20図 出土遺物実測図(3)



第21図 出土遺物実測図(4)



第22図 出土遺物実測図(5)

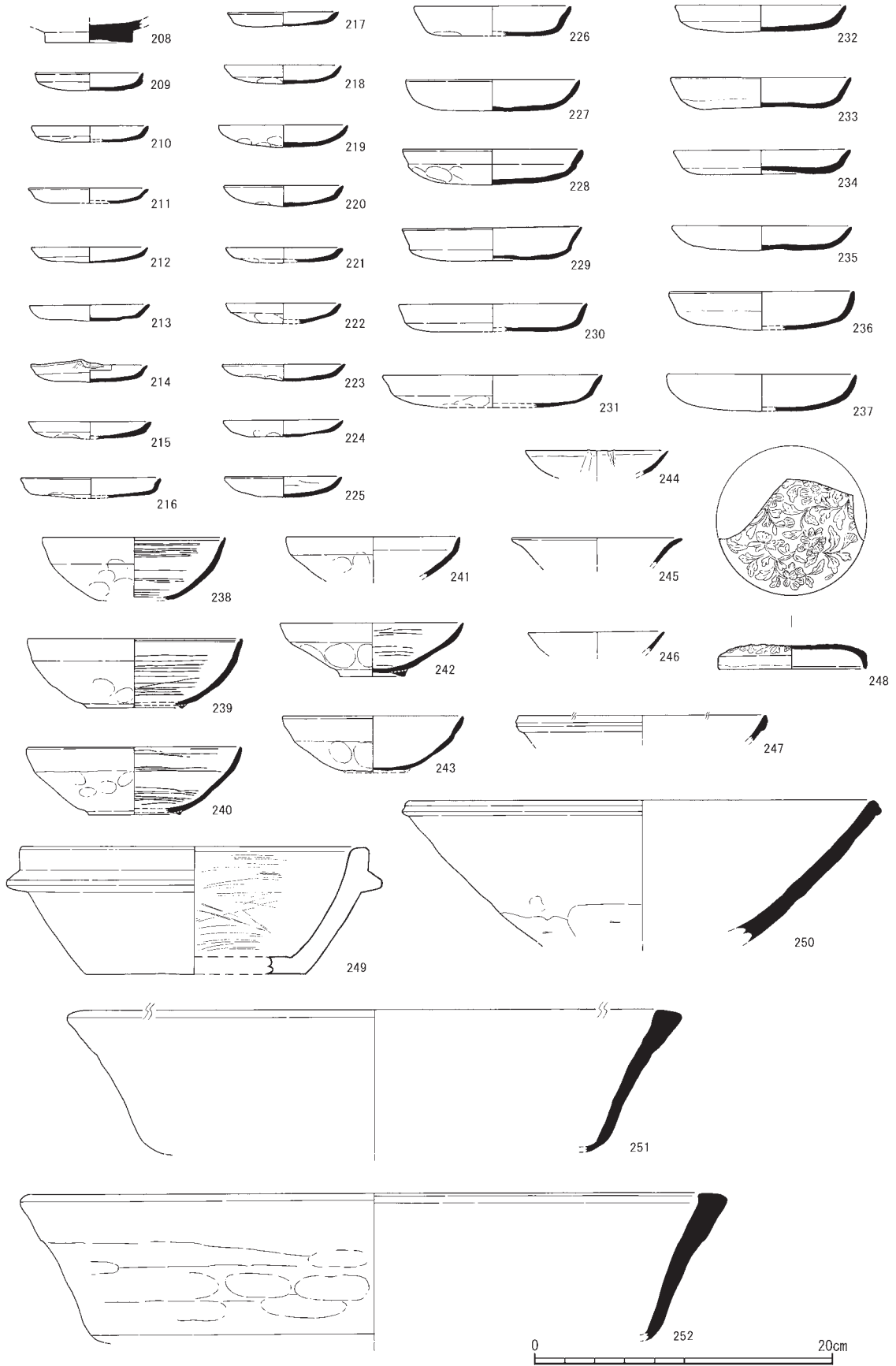
皿である。外面底部に指押さえを施す。187は、口径11.5cmの土師器皿である。188は、口縁部内面に沈線を施す、楠葉型の瓦器椀である。かなり摩滅していたが、内面はヘラミガキを、外面は指押さえを施す。逆三角形の高台を貼り付ける。13世紀後半と思われる。189は、青磁椀の底部である。外面に連弁文を認める。

土坑 S K 289(第21図190～202) 190は、須恵器皿である。削りだし高台が付く。平坦な底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部をS字状に屈曲させる。10世紀代の皿と思われる。191・192は、口径8.0cm前後の皿である。外面底部に指押さえ痕跡を認める。193～199は、楠葉型の瓦器椀である。193～195・199の口縁部内面には沈線を施す。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。13世紀後半のものと思われる。200～202は、瓦質の羽釜である。200・201の脚部が3か所に付く。同一個体と思われる。

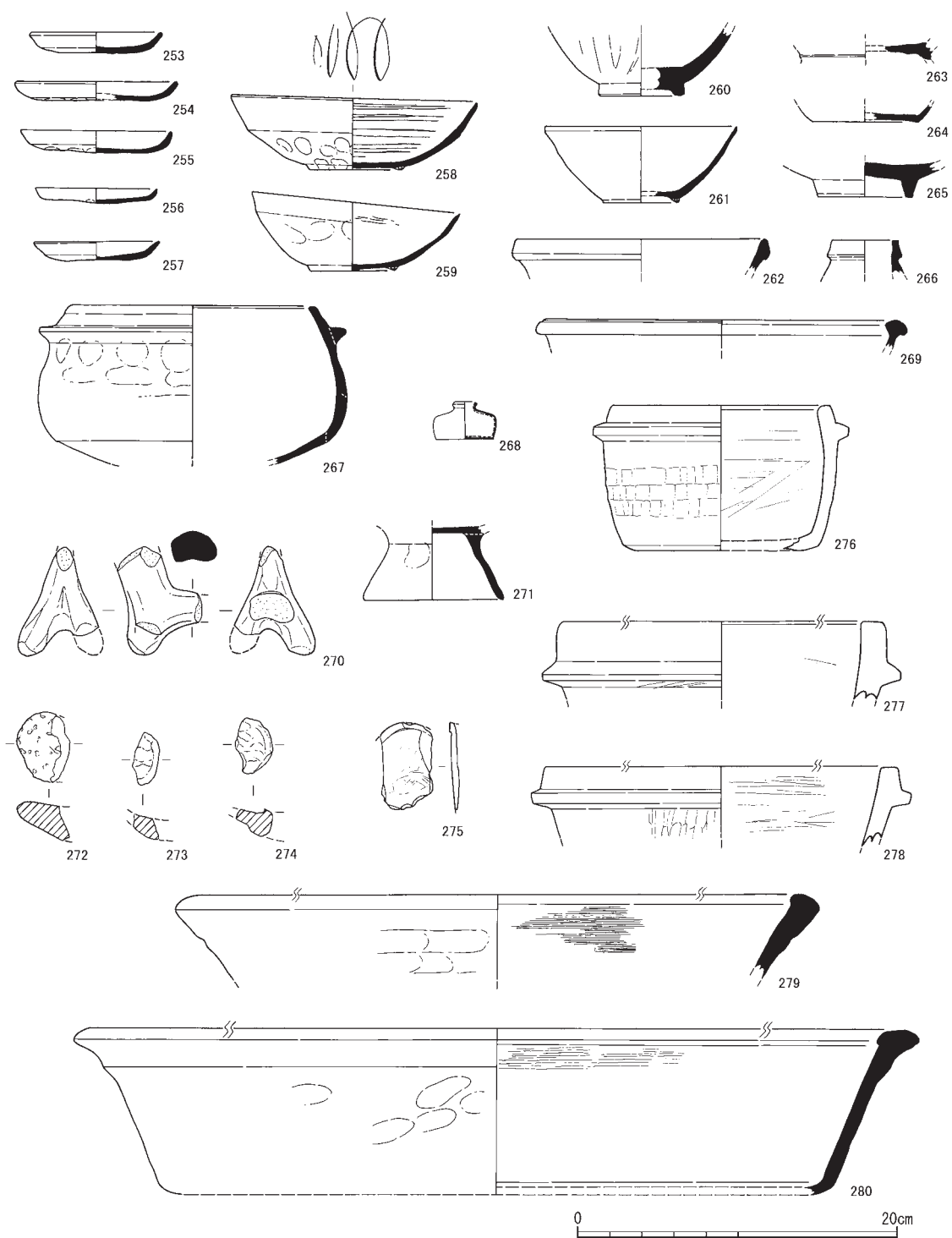
不明遺構 S X 268(第22図203～207) 旧小泉川に向かったの傾斜地の埋土中から出土したものであると思われる。203・204・206は、口径12.0～13.0cmの土師器皿である。口縁部を強く一段ナデする。底部外面に指押さえを施す。203内面には長さ4.0cmほどの墨痕が2条認められた。205・207は、口縁部付近でわずかに屈曲する、楠葉型の瓦器椀である。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。底部には、逆三角形の高台が付く。13世紀後半と思われる。

溝 S D 70(第23図208～252) 208は、須恵器椀である。高台は削り出し、蛇の目高台にする。209～225は、口径8.0cm前後の土師器皿である。平坦な底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる209～218と、やや丸みを帯びる底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる219～225がある。226～237は、口径12.0cm前後の土師器皿である。口縁部を一段ナデする。いずれも外面底部を指押さえする、Dタイプの皿である。238～240・243は、口縁部付近でわずかに屈曲する楠葉型の瓦器椀である。243は、内面が摩滅しており、調整不明である。238～240の内面にはヘラミガキ痕跡が、外面には指押さえ痕跡が認められる。238・239口縁部内面には、1条の沈線が巡る。逆三角形の高台が付く。13世紀後半である。241・242は、口縁部付近で大きく屈曲する、楠葉型の瓦器椀である。内面を粗くヘラミガキし、外面は指押さえする。13世紀末頃と思われる。244は、青磁椀である。245・246は、白磁椀である。247は、白磁の鉢である。248は、白磁の合子蓋である。平坦な天井部と下方に尖る口縁部からなる。天井部外面には、牡丹文を施す。杯部は出土しなかった。これと同様のものが、完形品で宇治市の白川金色院跡の経塚から出土してい





第23図 出土遺物実測図(6)



第24図 出土遺物実測図(7)

(注9) 249は、石鍋である。250は、須恵器鉢である。251・252は、土師器盤である。251は、破片のため口径は不明である。252は、口径47.0cmを測る。

包含層(第24図253～280) 253～257は、土師器皿である。258・259は、瓦器椀である。260は、青磁椀である。261は、灰釉陶器の椀である。262は、白磁の鉢である。263は、緑釉陶器の椀である。内面と高台外面に施釉する。264は、平底の白磁皿である。265は、白磁椀である。266は、

梅壺の口縁部である。267は、瓦質の羽釜である。外面には指押さえを施す。268は、青銅製の水滴である。口径1.2cm、体部径3.9cm、底部径3.6cm、高さ2.3cmを測る。269は、須恵器鉢である。玉縁状の口縁である。270は、土馬である。271は、高台付皿である。272～274は、鍛冶滓である。関連する遺構は検出していない。275は、石製の硯である。276～278は、石鍋である。276は、唯一底部から口縁部まで残る。口径13.6cm、高さ8.8cmを測る。279・280は、土師器盤である。その他、銅銭『開元通寶』が1点と、判読できないもの1点が出土している。

## 7. まとめ

今回検出した掘立柱建物跡群をはじめ柵列・溝跡・井戸跡などの遺構群は、出土遺物から13世紀から14世紀前半にかけてのものであることが判明した。これらの遺構群は、南北14m、東西15mの約210㎡の空地を囲むように配置され、建て替えもこの空地を確保するように行われている。

また出土遺物には、白磁の合子蓋をはじめとして、中国製の青磁や白磁、石製の硯や青銅製の水滴などがあり、こういった遺物の出土から、この付近での有力者の屋敷地であった可能性が高いと考えられる。また、出土品の中に甕などの貯蔵容器が出土しなかった点は、今回の出土遺物の特徴の一つと言える。

大山崎中学校新校舎建設に伴う調査(長岡京跡右京第933次調査)では、12世紀代の掘立柱建物跡群や柵列、溝跡などが見つかり、時代とともに集落域が西方に移っていったものと考えられる。今後周辺地域での発掘調査に期待される。

注1 中川和哉ほか「下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注2 野々口陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注3 岩崎 誠「右京第473次(7ANQKS-2地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1996

注4 白川成明他「長岡京跡右京第39次(7ANQMK地区)調査略報」(『長岡京文化財調査報告』第11冊 長岡京市教育委員会) 1983

注5 注2と同じ

注6 古閑正浩ほか「境野1号墳」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第34集 大山崎町教育委員会) 2007

注7 岩松 保「百々遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注8 ここで記したタイプは、伊野近富「1. 土師器皿」(『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社) 1995に準じた。

注9 荒川 史「白川金色院跡発掘調査報告書」(『宇治市文化財調査報告』第6冊 宇治市教育委員会) 2003

# 5.長岡京跡右京第998次(7ANNKN-7地区) ・友岡遺跡発掘調査報告

## 1. はじめに

今回の調査は、独立行政法人雇用・能力開発機構の依頼を受けて、同京都センター研修棟の建て替え工事に伴い実施したものである。

調査対象地は、長岡京市友岡1丁目2番1号に所在し、長岡京条坊復原図によれば、右京七条三坊二町にあたり、東側に西二坊大路が想定される位置にあたる。また、遺跡地図では、縄文時代から中世にかけての遺跡である友岡遺跡に隣接し、友岡遺跡の北東に接する位置にあたる。

周辺の調査としては、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センターの敷地内の西隣(現在の多目的ホール)の建設時に長岡京跡右京第363次調査、その南側のマンション建設に伴い右京第294次調査が実施されている。

調査は平成22年5月22日に着手し、調査期間中の8月27日に関係者説明会を行い、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター職員等約60人と長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターから参加があった。9月10日に現地調査をすべて終了した。

現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。



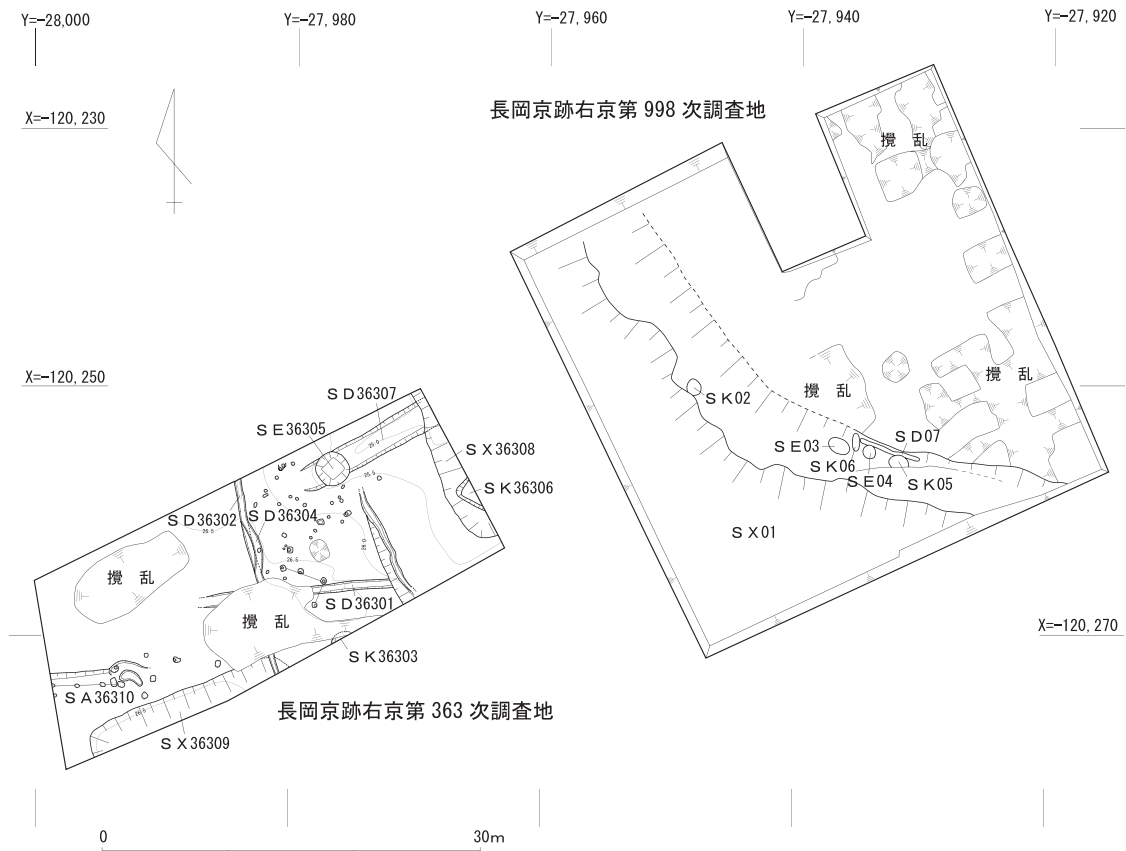
第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(国土地理院 京都西南部 1/25,000)

この調査報告は次席総括調査員田代弘と専門調査員石尾政信が執筆した。  
発掘調査にかかる費用は、全額、独立行政法人雇用・能力開発機構が負担した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸  
調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司  
同 次席総括調査員 田代弘  
同 専門調査員 石尾政信  
調査場所 長岡京市友岡1丁目2番1号  
現地調査期間 平成22年5月22日～9月10日  
調査面積 1,200㎡

## 2. 位置と環境

調査対象地は阪急電車長岡天神駅から南へ600mの地点で、長岡天神の西裏から南東方向に延びる丘陵の北東端に位置している。調査地北西部の現在の標高は26.7m前後である。調査対象地の東側は戦前に造られた旧長岡競馬場によって大きく地形が改造されており、その跡地に団地と京都府立乙訓高等学校が造られている。旧競馬場と今回の調査地とは5m前後の比高差がある。独立行政法人雇用・能力開発機構の前身である雇用促進事業団の研修施設を開設したときにも、造成が行われたといわれている。独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター敷地の北西で、



第2図 周辺調査地及び今回調査地平面図

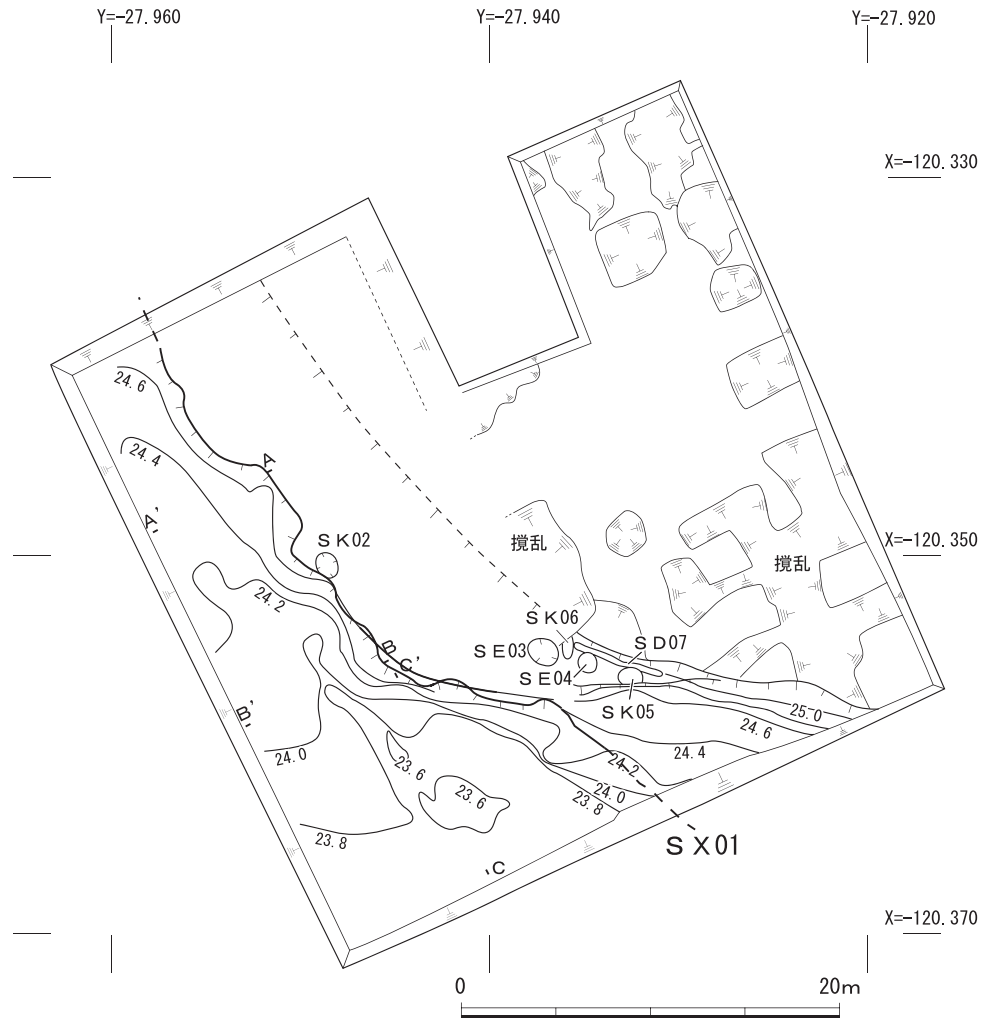
阪急電鉄京都線との間に旧地形をうかがわせる約 2 m の高まりが残存している。また、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター敷地の南東には、長岡京市立第四小学校との間に幅約 20 m の窪地が認められ、旧地形の痕跡と推定される。

調査対象地の南西には縄文時代～近世の複合遺跡である友岡遺跡がひろがり、その南端付近に奈良時代の瓦が出土する鞆岡廃寺がある。北側の丘陵裾の平地に旧石器時代の石器や縄文時代中期～晩期の土器が出土する十三遺跡がある。その北に旧石器、縄文時代後・晩期、弥生時代～近世の複合遺跡である開田城ノ内遺跡がある。北東側の平地(旧長岡競馬場東部を含む)には、縄文～近世の遺構が検出されている開田遺跡がある。その東側に縄文～近世の各時代の遺構が検出されている神足遺跡がひろがっている。友岡遺跡の西側には縄文時代～中世にかけての複合遺跡である伊賀寺遺跡がある。友岡遺跡の南東には国指定史跡である全長 120 m の恵解山古墳があり、旧石器、縄文後・晩期、弥生時代～近世の複合遺跡である南栗ヶ塚遺跡がある。

周辺では長岡京跡右京第 363 次調査と右京第 294 次調査がある。右京第 363 次調査では奈良時代の土器が出土した溝と、中世の溝・柵列・流路状の落ち込み(S K 36308)、時期不明の井戸などが検出されている。右京第 294 次調査では、中世の柱列・土坑・溝などが検出されている。両者とも長岡京期の遺構は検出されていない。右京第 363 次調査地はベース面が緩やかに東に傾斜する地形となっている。

### 3. 調査概要

調査地は研修棟跡地のため、建物基礎などにより攪乱され遺構の残存状況が危ぶまれた。調査予定地内で掘削排土置き場を確保するため、東西に分割して調査を行った。西側では攪乱・現代整地層の下に中・近世の包含層が認められた。南西端で暗灰色粘質土・黒灰色粘質土などが厚く堆積していた。その下に茶褐色系の砂礫層がみられた。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から長岡京期～中世の土器などが出土したので、この遺物包含層を追いかけてそれより上層を重機により掘削したところ、本来の地山(ベース面)である砂礫層・粘質土を掘削した場所ができた。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から縄文時代の石鏃をはじめ、中世までの各種の土器、自然木や鉾滓・炉壁などが多数出土した。粘質土の堆積状況から、現在の地表面に現れない谷状地形が埋没する過程で遺物が堆積したものと判断し、この谷状地形の湿地状堆積層を掘り進めた。土器類は谷状地形全体から出土するが、鉾滓・炉壁は谷状地形の中央部より南側から出土する傾向であった。西側北半分の掘削が終了した後、調査地の南東部～東部へと重機掘削を行い、掘削排土を調査終了地点に移動した。東側は南部で南西に落ち込む谷状地形を検出したが、それ以外は砂礫層・粘質土のベース面に建物基礎跡が残存するだけであった。周辺に存在したであろう遺構は削られて消滅したものと推測される。その後、谷状地形の堆積層などを人力で掘削した。西側南部からは各種の土器類、中世の輸入銭や田下駄などが出土した。東側南部の谷状地形の落ち込み上層で中世の遺物が下層では長岡京期～中世の遺物が出土した。長岡京期～中世の遺物とともに鉾滓・炉壁も出土している。



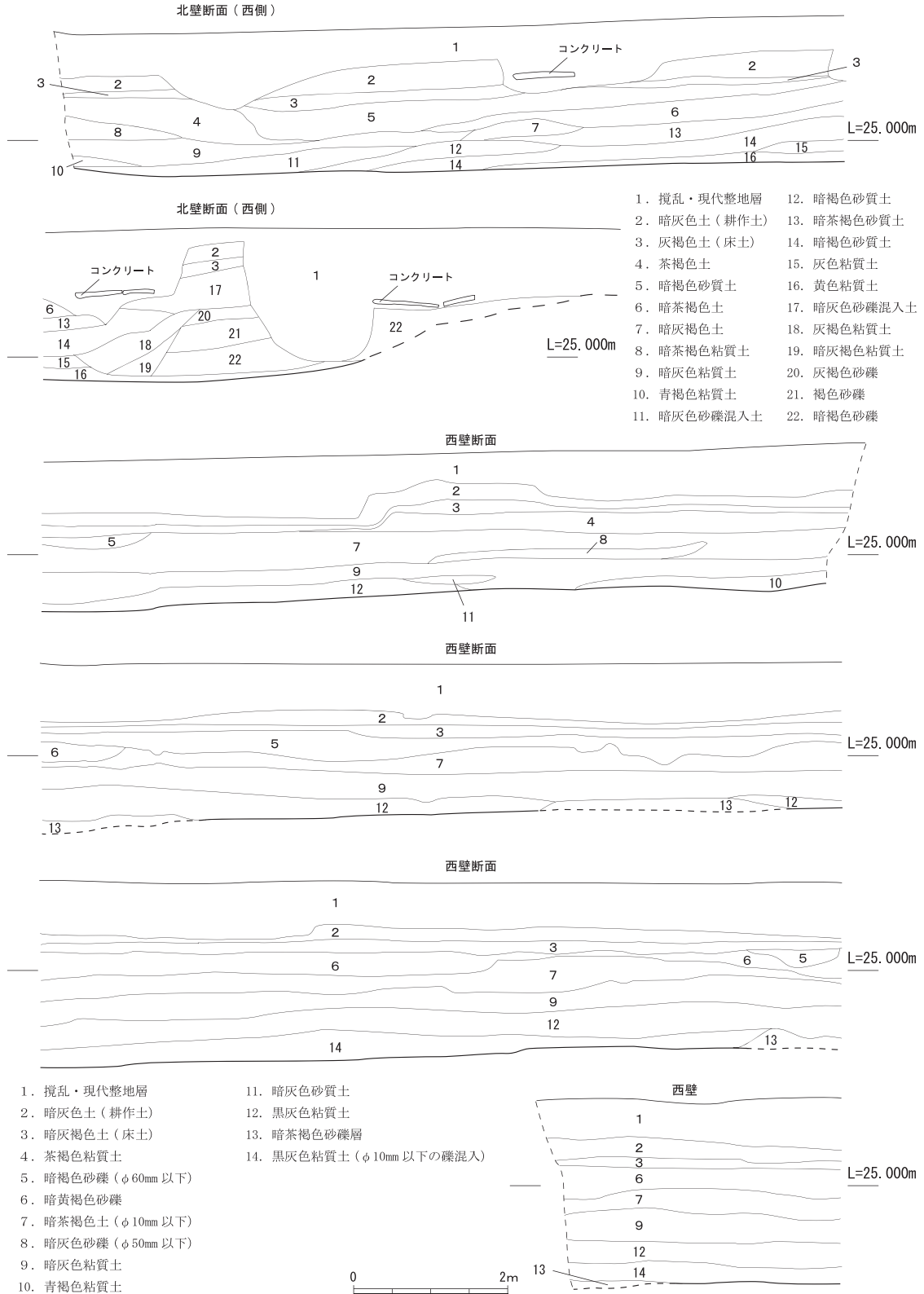
第3図 調査地平面図

調査地西側の基本層序は、攪乱・現代整地層の下に旧耕作土・床土が認められ、その下に暗褐色・暗黄褐色の土石流による砂礫層が堆積し、それより下に暗茶褐色土、暗灰色・黒灰色粘質土が堆積する。粘質土の下層に茶褐色砂礫層があり、南部の砂礫層に人頭大の石が認められた。暗灰色・黒灰色粘質土は湿地状堆積を反映したものと推測され、北西端では0.4m、南西部で約1mと厚く堆積していた。東側南部は攪乱・現代整地層の下に旧耕作土・床土が認められず、明褐色砂質土・淡青灰色土の下に淡黄褐色土(砂礫混入)・淡灰褐色土(砂礫混入)・灰褐色土(砂礫混入)・暗灰褐色土(砂礫混入)が堆積していた。

調査地の西・南半で湿地状堆積(S X01)を検出し、これに接して土坑(S K02・05・06)、井戸(S E03・04)、溝(S D07)などを検出した。ただし、谷状地形の東半では狭い平坦地が認められ、井戸(S E04)、土坑(S K05・06)、溝(S D07)はこの平坦面上で検出した。

#### 4. 検出遺構

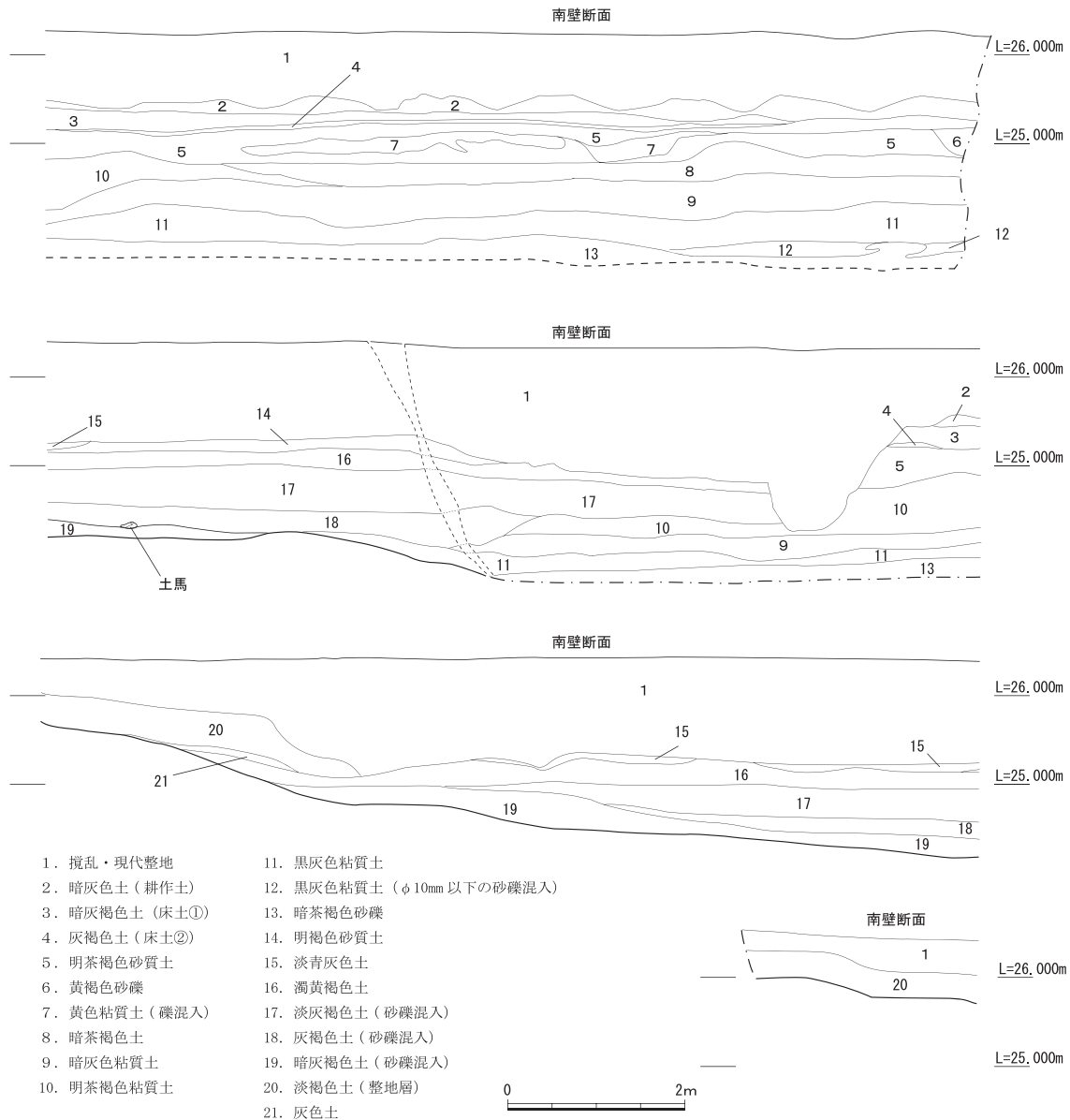
**湿地状堆積S X01** トレンチの西側を北西から南東方向に傾斜する埋没した谷状地形に暗茶褐色土・暗灰色粘質土・黒灰色粘質土などが厚く堆積していた。長岡京跡右京第363次調査で検



第4図 調査地北・西壁土層断面図

出された落ち込み (S X 36308) を谷状地形の西側とすると、中央部で東西幅25m前後と推定される。南西端で暗灰色・黒灰色粘質土が約1.0m堆積している。暗茶褐色土まで含めると約1.5mある。黒灰色粘質土の下に砂礫層があり、南部で人頭大の石が多数認められ、一部では長径70cm、短



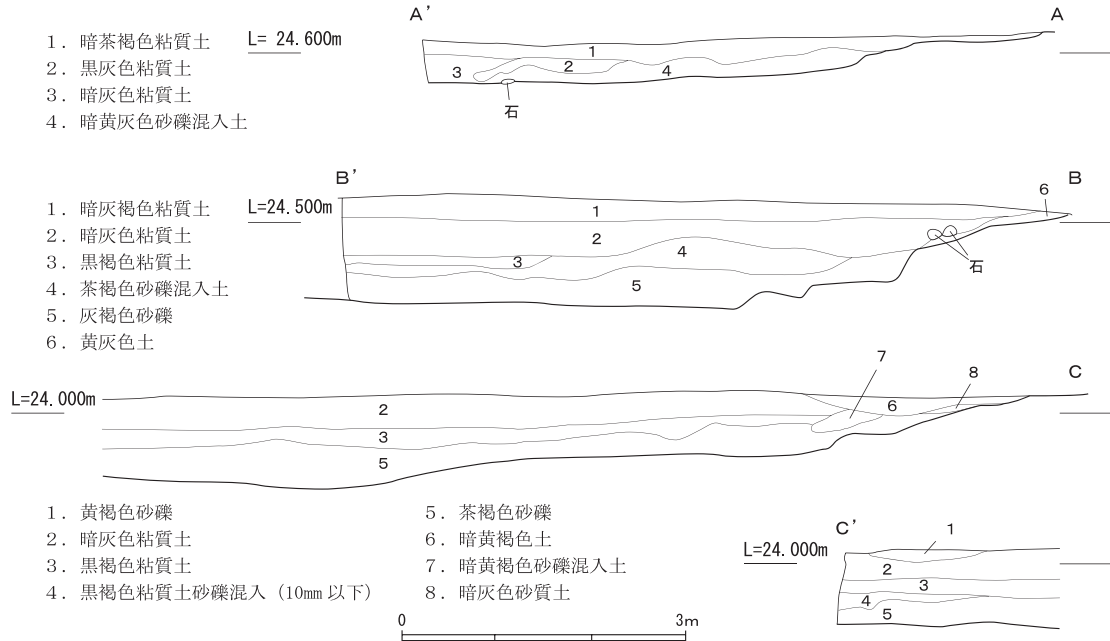


第5図 調査地南壁土層断面図

径40cmの石があった。これらのことから過去に強い流水があったことがわかる。何らかの原因(人為的か自然的かは不明)で堰き止められ湿地化したものと推測される。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から多量の遺物が出土した。鋳滓・炉壁類は、北部ではほとんど出土しておらず、中央部より南で多数出土している。

土坑S K02 S X01に接して検出した。長径1.5m、短径1.2mで、深さ0.2mの円形土坑である。瓦器・土師器の小破片が出土した。12世紀以降の埋没と推定される。本来は検出面より上面から掘り込まれていたものであろう。

井戸S E03 S X01の東側で検出した。長径1.5m、短径1.8mを測る円形の素掘り井戸である。検出面から約1m掘り下げた段階で、側面の崩落が著しくなったので途中までの掘削に留めた。埋め土に10～20cmの石が多量に詰まり、少量の近世以降の土器が含まれていたことから、江戸時代以降のものと思われる。



第6図 湿地状堆積 S X01土層断面図

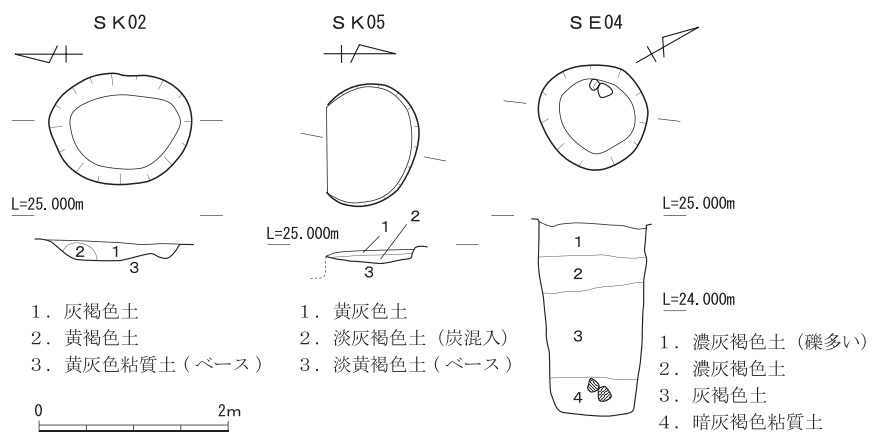
**井戸 S E04** 南東部落ち込みの北側斜面の平坦部で検出した。直径1.15m前後の円形の素掘り井戸である。深さ2.1mで底面付近に20cm前後の石4個が存在したが、井戸枠はなかった。埋土の1層は濃灰褐色土で拳大の石が多量に混入していた。2層も濃灰褐色土で少量の石が混入していた。埋土上層から18世紀代の土器片が出土したことから江戸時代中期以降の埋没と推定される。

**土坑 S K05** 井戸 S E04の東側で検出した。南側が削られているが、直径1.2m前後の円形土坑である。深さ15cmを測る。埋土は黄灰色土と炭が混じる淡灰褐色土である。瓦器・土師器の小破片が出土したことから12世紀以降の埋没と推定される。

**土坑 S K06** S E04の北西で検出した。長径1.4m、短径0.6mを測る楕円形の土坑である。深さ15cmを測り、淡灰褐色土の埋土から土師器の小破片が出土しているので、中世以降の埋没と推定される。

**溝 S D07** 南東部落ち込みの北側斜面の平坦部分との境界で検出した素掘り溝である。幅約40cmで、長さ4.7mにわたって検出したが両端は浅くなり途切れている。土坑 S K05に接し、井戸 S E04に切られている。深さ7cm

で、灰褐色土の埋土から瓦器・土師器の小破片が出土したことから12世紀以降の埋没と推



第7図 土坑 S K02・06、井戸 S E04実測図

定される。傾斜面と平坦部の境界にあることから排水の機能を備えたものであろう。

## 5. 出土遺物(第8～12図)

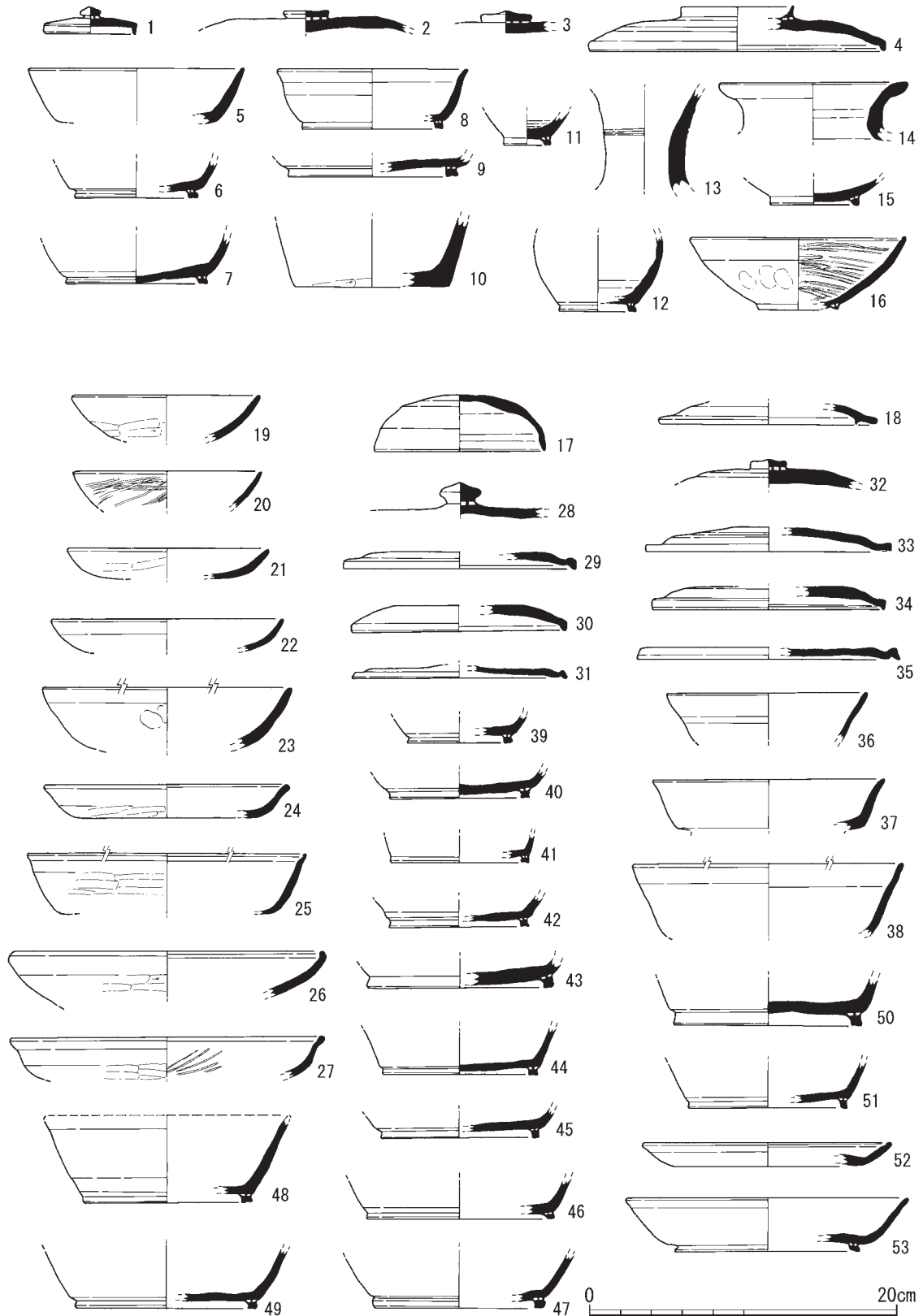
出土遺物は湿地状堆積S X01の堆積層から出土した遺物を中心として、整理箱にして22箱である。S X01は西側で4区画に分け、基本的に暗灰色粘質土を上層、黒灰色粘質土を下層、それ以下を最下層として遺物を取り上げた。湿地状堆積層以外は遺構名、土層名を付けて取り上げた。奈良・平安時代の土器は「平城宮発掘調査報告」XIに準じて分類した。

### 1) S X01最下層出土の土器

1は上面に自然釉の掛かる須恵器壺Eの蓋である。口径5.8cm。2・3は扁平なツマミの付く須恵器杯Bの蓋である。4は環状ツマミの付く須恵器の蓋である。口径19cm。5は須恵器杯の口縁部である。口径13.8cm。6～9は須恵器杯Bである。7は底径9cm。8は口径12.3cm。9は底径10.8cm。10は須恵器壺の底部と推定される。11は小型の須恵器壺Mの底部である。底径2.9cm。12は須恵器壺Lの底部である。底径4.9cm。13は須恵器壺Lの頸部である。14は須恵器壺の口縁部である。口径12cm。15は無釉陶器の底部である。底径5.8cm。10世紀のものである。16は瓦器椀である。口径13.9cm、器高4.7cm。13世紀前半のものである。出土遺物は奈良時代～長岡京期のものが中心であるが、無釉陶器、瓦器椀がわずかに混入している。

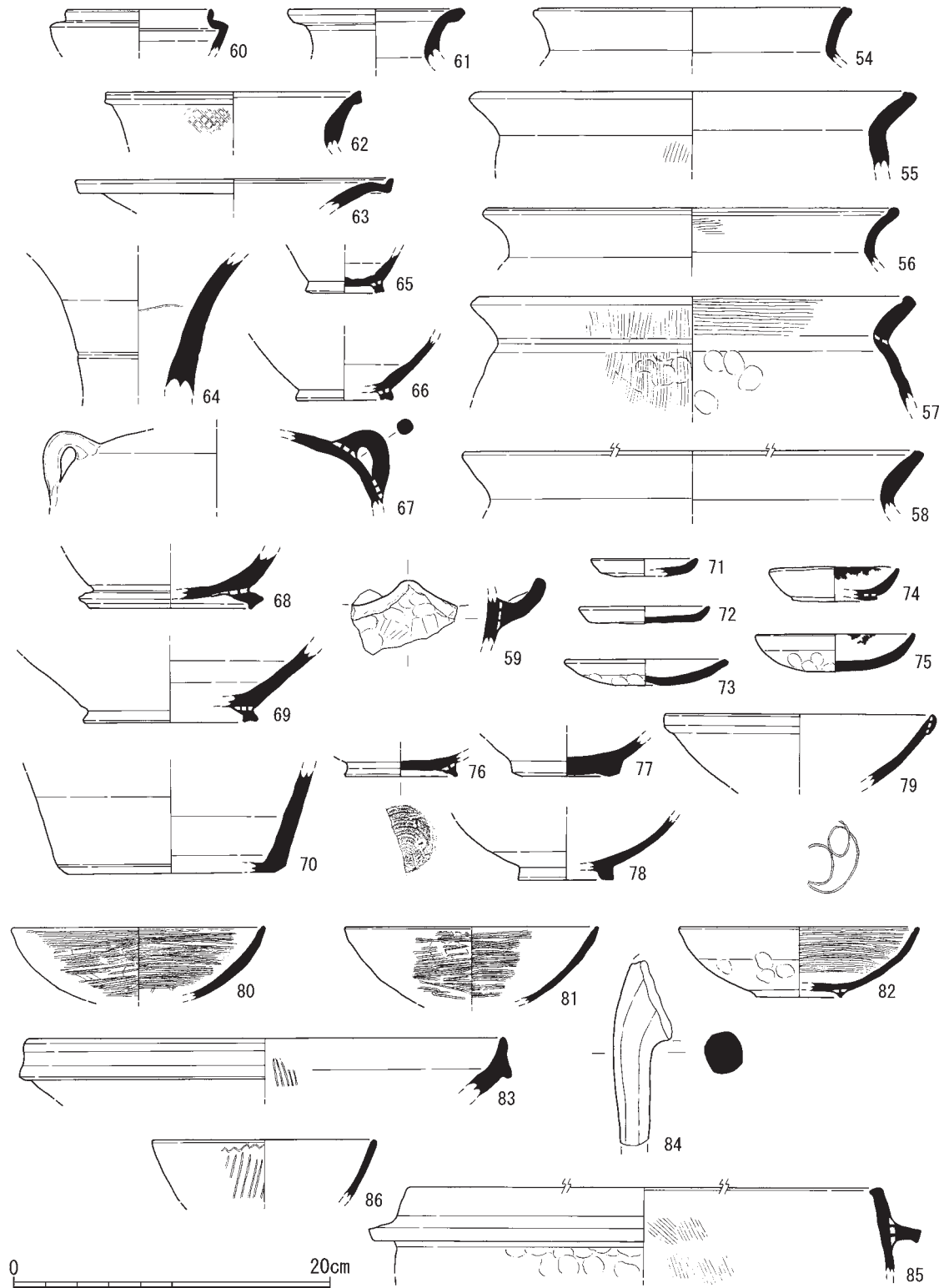
### 2) S X01下層出土の土器

17は須恵器蓋で6世紀末～7世紀前半のものである。口径11cm、器高3.65cm。18は須恵器蓋で7世紀前半のものである。口径14cm。19は口縁部外面をヘラ削りした土師器椀である。口径12cm。20は口縁部外面にヘラミガキされた土師器椀である。口径12cm。21・22は土師器皿である。23は土師器椀である。24は土師器皿である。25は土師器杯である。26は土師器皿である。27は口縁部外面にヘラ削り、内面にヘラミガキのある土師器皿である。口径20.5cm。28は須恵器蓋の宝珠ツマミである。32は扁平なツマミの付く須恵器蓋である。29～31、33～35は須恵器蓋である。30は口径13.7cm。35は口径16.8cm。36・37は須恵器杯の口縁部である。36は口径13cm。39～51は須恵器杯Bの底部である。42は転用硯である。底径9cm。47は底径10.8cm。52は土師器皿である。53は須恵器皿である。口径18.2cm、器高3.5cm。54～58は土師器甕の口縁部である。59は土師器甕の把手である。60は須恵器壺Eの口縁部である。61は須恵器甕の口縁部である。62も須恵器甕の口縁部である。63は須恵器壺Lの口縁端部と思われる。64は須恵器壺Lの頸部である。65・66は須恵器壺Lの底部である。67は須恵器壺Nの把手である。68は須恵器壺Lの底部である。69は須恵器壺Qの底部と思われる。70は須恵器壺の底部である。底径13cm。71～75は土師器皿である。71は口径6.7cm、器高1.1cm。72は口径8.2cm、器高1.1cm。73は口径1cm、器高1.6cm。74は口径8cm、器高2.3cm。75は口径10cm、器高2.4cm。74・75の口縁部に油煙が付くので灯明皿として使用されたものであろう。これらは12世紀後半～13世紀のものである。76は糸切りで高台を貼り付けた緑釉陶器の底部である。底径7cm。内外面に暗緑色に発色した釉薬が掛かる。10世紀前半の近江産のものである。77は内面に灰白色の釉薬が掛かる白磁の底部である。底径



第 8 図 出土遺物実測図(1)

6.8cm。78も白磁の底部である。底径 6 cm。79は白磁の口縁部である。口径16.9cm。12世紀のものである。80は口縁端部の内面に沈線が廻り内外面とも密に暗文が施された瓦器碗である。12世



第9図 出土遺物実測図(2)

紀前半のものである。81は口縁端部の内面に浅い沈線が廻り内外面ともに暗文が施された瓦器碗である。12世紀中頃のものである。82は口縁端部の内面に浅い沈線が廻り内面に暗文が施された瓦器碗である。断面が三角形の高台が付く。13世紀前半のものである。83は備前焼と思われるすり鉢口縁部である。16世紀のものである。84は瓦質鍋の支脚である。85は口縁部が内傾した瓦質

羽釜である。86は青磁椀の口縁部である。15世紀後半～16世紀のものである。口径14cm。下層からは古墳時代後期から中世にかけての土器が出土している。

### 3) S X01上層出土の土器

87は体部外面にタタキ痕をとどめた第V様式の弥生土器壺の底部である。88は土師器甕、90は土師器皿の口縁部と思われる。89は須恵器高杯の脚部である。91は土師器杯Bである。口縁部外面にヘラミガキを施す。口径19.6cm、器高5.1cm。焼成が良く明茶褐色を呈し、胎土に赤褐色粒を含む。92は土師器高杯の脚部である。外面を七角に面取りしている。胎土に赤褐色粒を含み、焼成が良く、淡赤褐色を呈す。93は土師器甕の口縁部である。94は扁平な宝珠ツマミが付く須恵器杯Bの蓋である。95～98は須恵器杯Bの蓋である。99は須恵器杯の口縁部である。100～104は須恵器杯Bの底部である。105は須恵器壺Lの頸部である。106は須恵器壺Lの体部下半である。107は須恵器甕の口縁部である。108は肩部に粘土板を貼り付けた須恵器壺の装飾である。109は須恵器壺Lの底部である。110は須恵器壺Qの底部である。111～119は土師器皿である。120は台付き土師器皿である。底径6.8cm。12世紀のものである。121は瓦器皿である。口径9.1cm、器高1.4cm。122～126は瓦器椀である。127は東播系の鉢である。128は信楽系の鉢である。129は瓦質の羽釜である。130は瓦質羽釜の脚部である。131は白磁椀の口縁部である。132は青磁椀の口縁部である。133は青磁の皿である。底径4cm。134は青磁椀の口縁部である。135は美濃焼のおろし皿である。口縁上部の内外に透明感のある淡黄緑色の釉薬が掛かる。内面に細い一本引きのすり目を施す。

### 4) その他の遺物

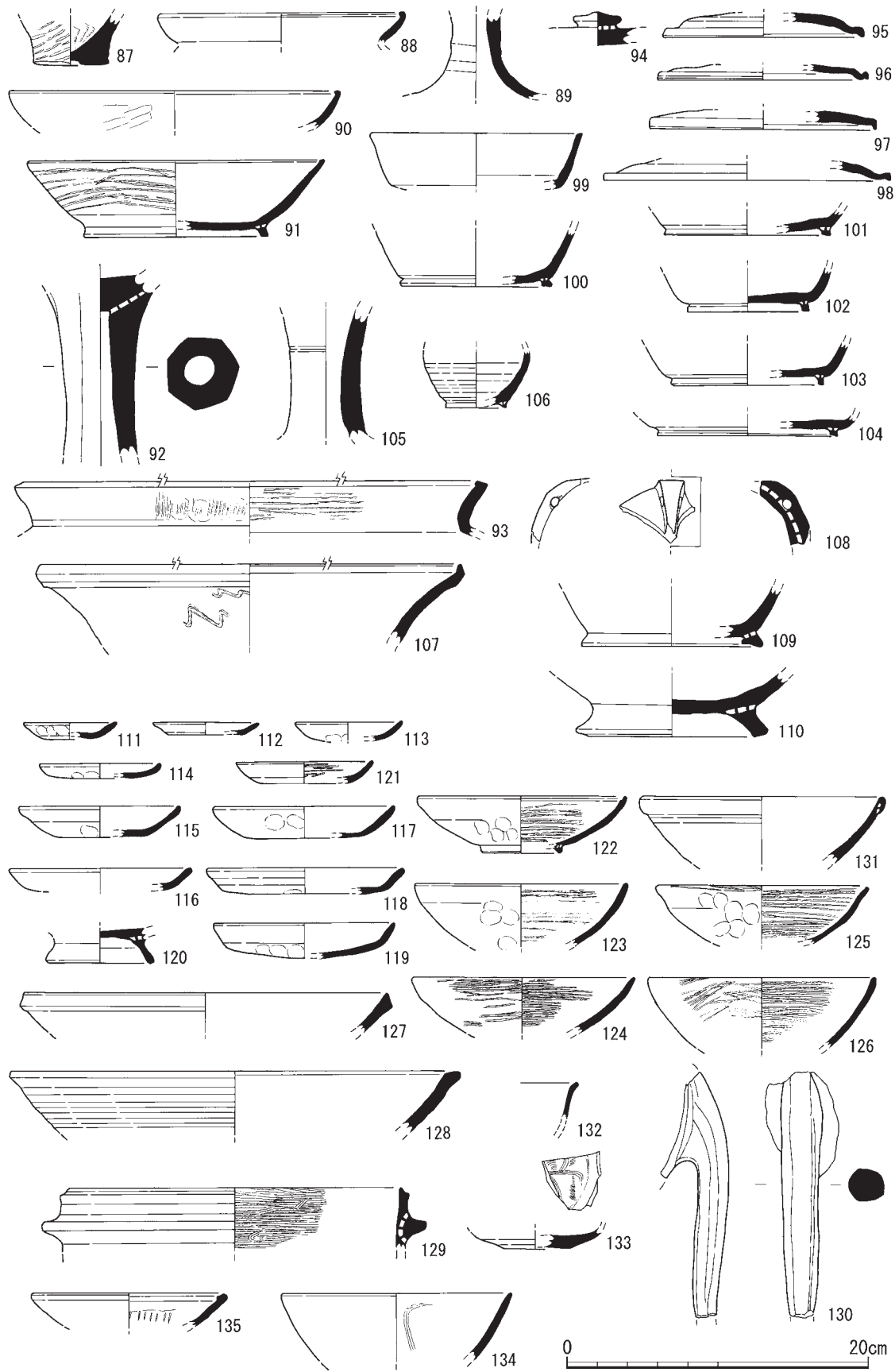
136～138はS X01の1区下層から出土した縄文時代の打製石鏃である。136は小型の凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.3g。137も凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.5g。138も凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.7g。136～138はサヌカイトである。

139～144はS X01の4区上層から出土した輸入銭である。139は開元通寶(初鑄621年)、140は太平通寶(初鑄976年)、141・141は皇宋通寶(初鑄1038年)、143・144は元豊通寶(初鑄1078年)である。

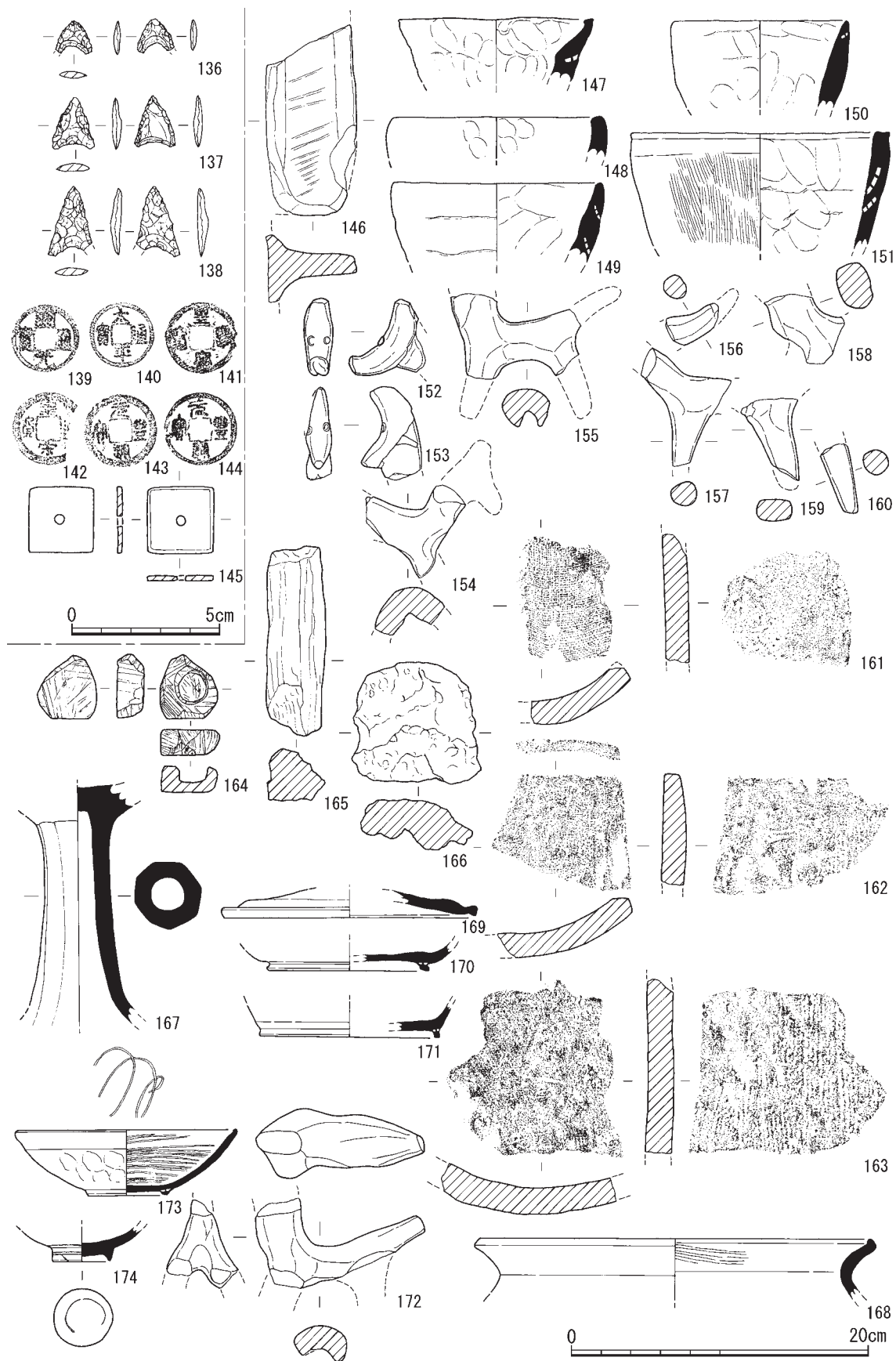
145はS X01の4区下層から出土した鉄製の用途不明品である。2.2×2.25cmの方形で、厚さ0.15cm、中央に直径0.3cmの円形孔を穿つ。

146は南東部の灰褐色土から出土した土師質の移動式カマドの焚き口側面の鏝と思われる。

147～151はS X01から出土した二次的な被熱痕跡を有する粗製の土器である。胎土に砂粒が多く含まれ、いわゆる製塩土器である。器体の内外面に成形時の指頭圧痕が顕著に残る。147は口縁部端部を水平に作る。口縁部が開き、細長い器体をもつものである。148はやや内傾する口縁部をもち、器体が砲弾型をなすものである。149・150は口縁端部が尖りぎみで、やや開く口縁部に細長い器体をもつものである。151は147～150のような粗成器ではないが、同様な胎土をもち、被熱している。口縁端部を水平に作り、砲弾型の器体をもつ。体部外面はハケ調整、内面は

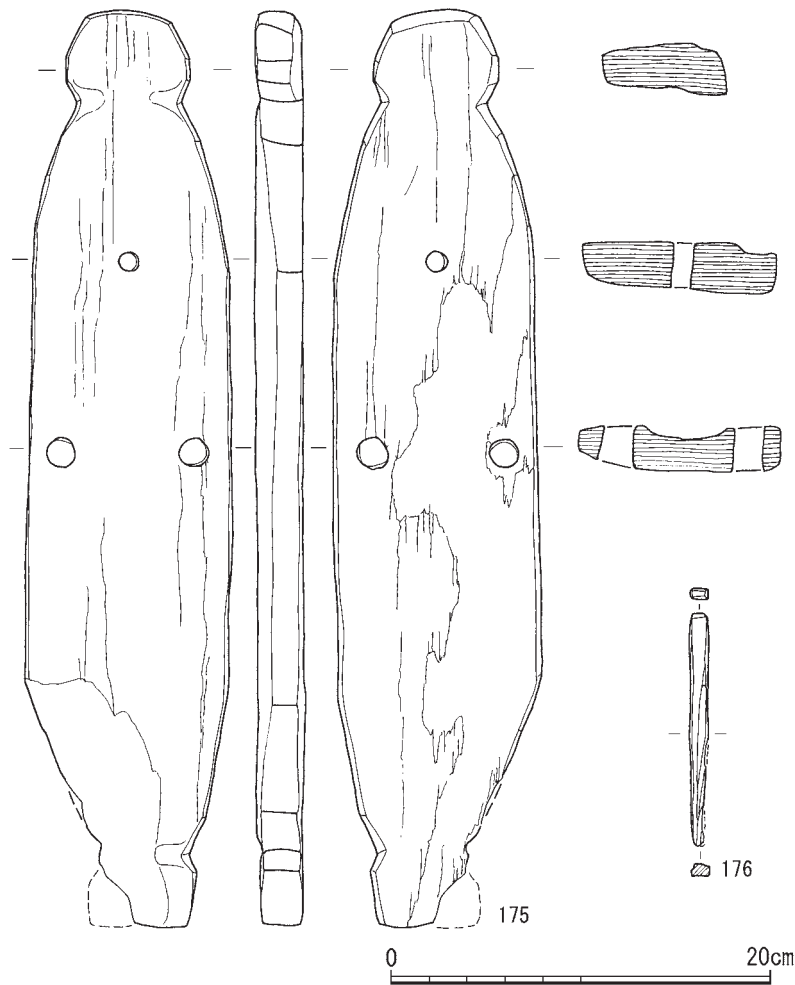


第10図 出土遺物実測図(3)



第11図 出土遺物実測図(4)





第12図 出土遺物実測図(5)

成形痕跡が顕著である。

152は S X01の 4 区下層から、153は S X01の 2 区上層から出土した土馬の頭部である。154は S X01の 4 区下層から出土した土馬の胸部である。155は S X01の 4 区最下層から出土した土馬の体部である。156は S X01の 2 区下層から出土した土馬の尾である。157は S X01の 4 区最下層から出土した土馬の後脚部である。158は S X01の 4 区下層から出土した土馬の胸部である。159は S X01の 4 区上層から出土した土馬の脚部である。160は S X01の南部の断ち割り出土した土馬の脚部である。172は南壁断面の暗灰褐色土(砂礫混入)から出土した土馬の体部である。三日月様の頭部、短縮された体部、短い脚などの特徴は、奈良時代後半から長岡京期(平安時代前期)に一般的に見られるものである。

161～163は凹面に布目、凸面に縄目のある平瓦である。いずれも破損して全体の法量がわかるものはない。162は被熱して暗赤褐色を呈す部分がある。161は S X01の下層から、162・163は S X01の上層から出土した。164は S X01の下層から出土した滑石製品である。個体の一面に底径約 2cmの円形窪みを作る。その反対側に油煙が付着し、油煙付着面以外に鑿痕跡がみられる。石鍋の転用品と考えられるが、用途不明である。165は棒状の結晶片岩である。器体の一部に、わずかではあるが研磨痕がある。この製品は三波川変成帯あるいはその近傍から搬入されたものと考えられる。近畿では縄文時代晩期頃にこうした遺物が散見されるが、本資料は遺構に伴うものでないので、その可能性のみ指摘しておく。

166は断面形が楕形をなす滓である。下部および側縁に壁体の一部とみられるものが付着している。鍛冶炉状の炉底に形成された滓と考えられる。別個体の成分分析の結果によると、鍛冶滓の一般的成分とは異なっている。成因は鍛冶以外の冶金的作業によるものという以外はわからない。

166は断面形が楕形をなす滓である。下部および側縁に壁体の一部とみられるものが付着している。鍛冶炉状の炉底に形成された滓と考えられる。別個体の成分分析の結果によると、鍛冶滓の一般的成分とは異なっている。成因は鍛冶以外の冶金的作業によるものという以外はわからない。

167は南東部の灰褐色土から出土した土師器高杯の脚部である。脚の外表面を八角に面取りを行う。平安時代前期(9世紀)のものである。168は南東部の灰褐色土から出土した土師器甕の口縁部である。口縁部が「く」字に外反し、口縁端部を上方にツマミ上げる。口径26.2cm。169は南壁沿いの断ち割りで出土した須恵器蓋である。口径16.7cm。170・171はS X 01の上面掘削中に出土した須恵器杯Bの底部である。170は高台が底端部からやや内側に取り付けられているため、8世紀前半のものと思われる。173は南壁沿いの断ち割りで出土した瓦器椀である。口径14.8cm、器高4.45cm。13世紀前半のものである。174は井戸S E 04から出土した唐津系磁器椀の底部である。底径3.9cm。18世紀のものである。

175はS X 01の4区上層から出土した田下駄である。長さ48.3cm、幅10.9cm、厚さ2.5cm。両端を圭頭状に抉り、紐を掛ける様に作り、その場所に紐擦れの跡が残る。全長の中央付近の側面近くに直径1.5cmの円形の孔2か所と、片端の中央に直径1cmの円形の孔を1か所に穿つ。176はS X 01の1区下層から出土した、一部に面取り痕跡の残る断面が長方形の板材である。S X 01からは他にも板材等が認められたが加工痕のあるものはなかった。

## 6. まとめ

今回の調査で長岡京跡に関連した遺構は検出されなかったが、以下のことが判明した。

長岡天神の西側から南東方向に張り出した低丘陵上に、中世に埋没してしまう湿地状堆積を検出した。昭和28年の地形図から湿地状堆積の痕跡を推測することができる。また、現地周辺の地形を観察すると旧地形の痕跡をとどめる場所がわずかに認められる。

埋没した谷(S X 01)の底にあたる砂礫層に人頭大の石が多数みられ、当時はかなりの流れがあったと推定され、奈良時代から長岡京期などの土器が含まれていたことから、谷の周辺には多くの人びとが生活していたと推定される。出土遺物に、水辺の祭祀にしばしば用いられる土馬があることから、周辺で祭祀がおこなわれていたと推定される。

湿地状堆積S X 01は、中世には須恵器・土師器・瓦器・青磁などの土器類、田下駄や自然木を含んだ粘質土が堆積した時期があり、何らかの原因で堰き止められ湿地化していたと推定される。堆積層の花粉分析を実施したところ、木本花粉(モミ属・マツ属など)が多く認められ、イチイ科、クマデ属、ニレ属などを伴うこと、草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタデ節、ヨモギ属を伴うこと、水湿地性植物を含む分類群が比較的多く伴うことが判明した。抽水植物(水面に葉が出る水生植物)、水生藻類も検出された。こうしたことから、粘質土が堆積した頃は、水湿地性植物が繁茂する湿地のような場所であったと推定される。また、クワ科、アカザ科-ヒユ科等の開けた場所に生育する「人里植物」といった分類も含まれることから、谷沿いの段丘上にも開けた場所があったと推定される。

粘質土などから出土した鉾滓や炉壁は、湿地状堆積S X 01の北部からはほとんど出土せず、中央部から南部での出土量が多い。また、東側に多い傾向があるので、中央付近より南の東側から廃棄された可能性が高い。これらの鉾滓・炉壁3点を理化学分析委託したところ、下記の内容の

報告を得た(要旨のみ)。

調査方法は以下のとおりである。①肉眼観察(遺物の外観の特徴などを観察)、②マクロ組織観察(顕微鏡で断面全体を低倍率で観察・撮影したもの)、③顕微鏡組織観察(鋳滓の鋳物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査など)、④E P M A (Electron Probe Micro Analyzer)調査(試料面に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化する。更に標準試料との対比から元素定量値をコンピューター処理してデーター解析を行う)、⑤耐火度調査(主に炉材の性状調査を目的とする。溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される)

試料1は4区上層で出土したもので、内面全体と外面表層の一部が熱影響を受けガラス質化した炉壁片である。顕微鏡下で観察すると、内面表層のガラス質滓部分で内部に熱影響を受けた砂粒(無色・有色鋳物)が散在する。耐火度調査は1,300度であった。観察面では金属粒は確認されず、鑄造原料に関する情報は得られなかった。

試料2はS X 01南東部の灰褐色土(砂礫混入)から出土したもので、肉眼観察では上面全体に橙色の炉材破片が付着した不定形のガラス質滓が見られ、顕微鏡組織観察では灰褐色結晶のマグネタイト、明白色粒の金属鉄が確認された。E P M Aでは、ごく微細な灰褐色多角形結晶があり、X線像をみると鉄・酸素に強い反応が認められ、ガラス質滓の定量分析値は非品質珪酸塩で、かなり鉄分が含まれていた。これらのことから鉄鑄物製作に用いた溶解炉内面が強い熱影響を受け溶融した結果生じたガラス質滓と推定される。

試料3は南壁沿いの断ち割り内から出土した。肉眼観察では内面全体が黒色ガラス化した炉壁片で、内面表層に弱い流動状で細かい気泡が点在する。顕微鏡下では非常に微細な金属鉄粒が多数認められた。X線像をみると鉄に強い反応がある。定量分析値はすべて金属鉄で、一部燐の高値傾向が確認された。非品質珪酸で鉄分の固溶は少なく、炉壁粘土に近い成分。内面表層のガラス質中に微細な金属鉄粒が多数溶着することから、鉄鑄物の製作に用いられた溶解炉の破片と推定される。

理化学分析の結果、これらの資料は鉄鑄物の製作に用いられた可能性が高いことが判明した。現地では遺構は検出されなかったが、近接地に鉄鑄物製作に関連した工房が存在したものと推測される。鉄鑄物製作に関連した鋳滓・炉壁は、共伴する遺物から中世(13世紀以降)のものと推定される。

近世には、谷状地形(S X 01)の湿地状堆積は埋め立てられ、水田などの耕作地として利用されたことがわかった。

#### 参考文献

小池寛「長岡京跡右京第363次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

小田桐淳「長岡京跡右京第294次(7ANNKN-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1989

圖 版

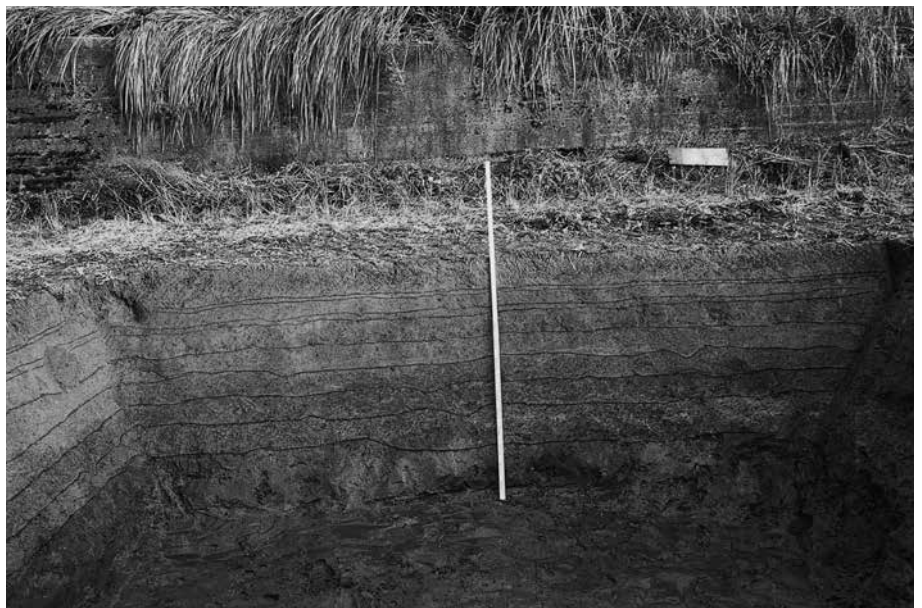
(1) 調査前、鳥取橋西詰より  
南を望む(北から)

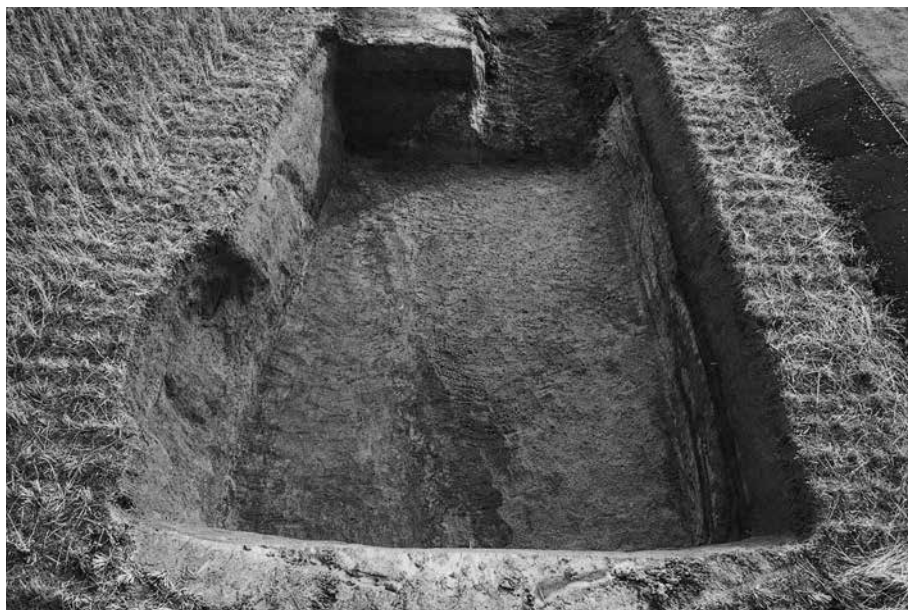


(2) 1 トレンチ全景(西から)



(3) 1 トレンチ東壁断面(西から)





(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ西壁断面(東から)



(3) 3トレンチ全景(北から)



(1) 4トレンチ全景(北から)



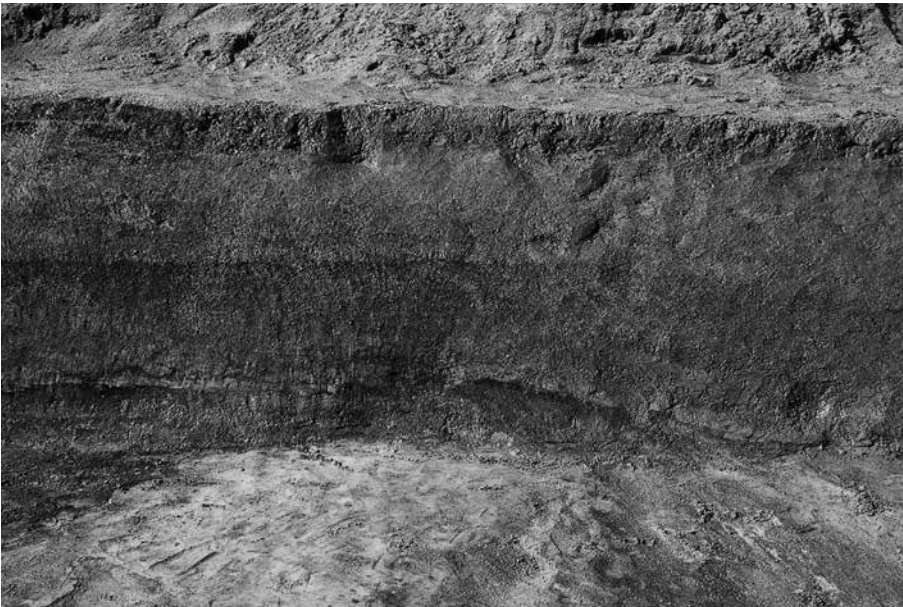
(2) 4トレンチ西壁断面(東から)



(3) 4トレンチ南部、下層掘削状況  
(北西から)



(1) 5トレンチ全景(北から)



(2) 5トレンチ西壁断面(東から)



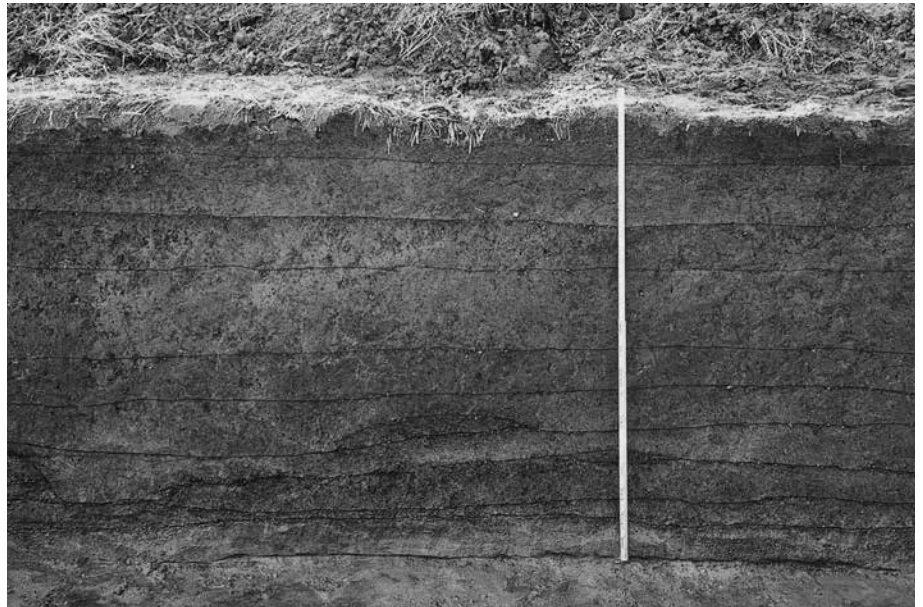
(3) 5トレンチ南部下層掘削状況  
(北東から)



(1) 6トレンチ全景(北から)



(2) 6トレンチ西壁断面(東から)

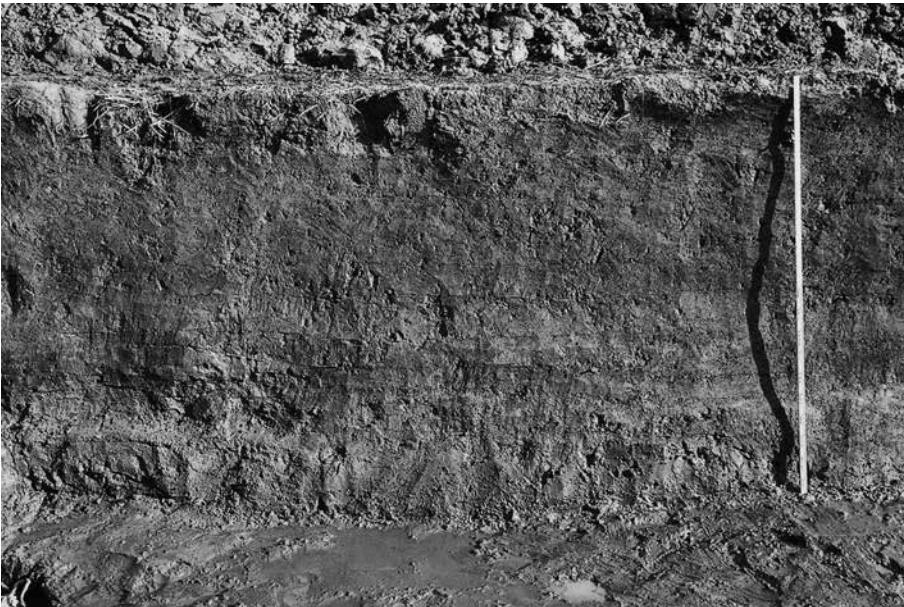


(3) 7トレンチ重機掘削(南から)

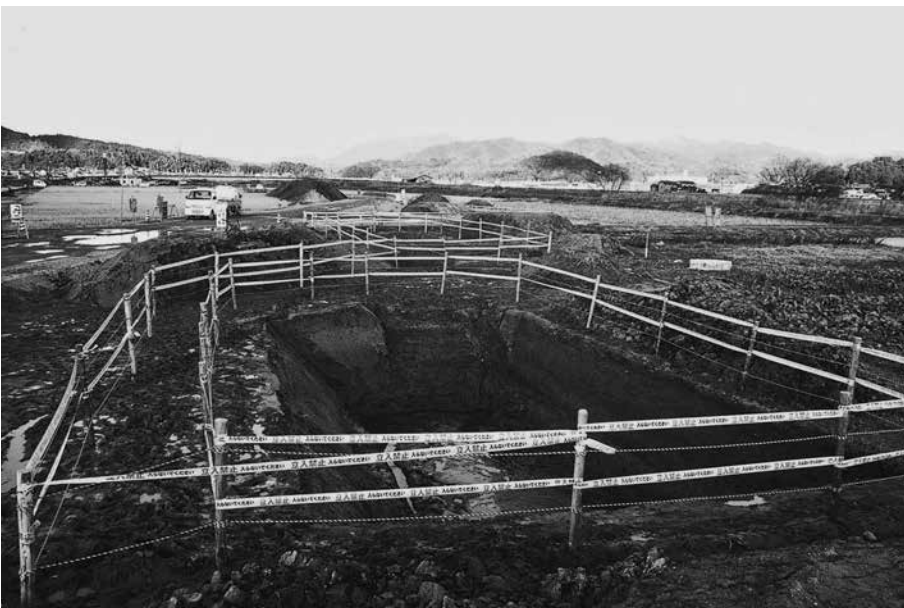




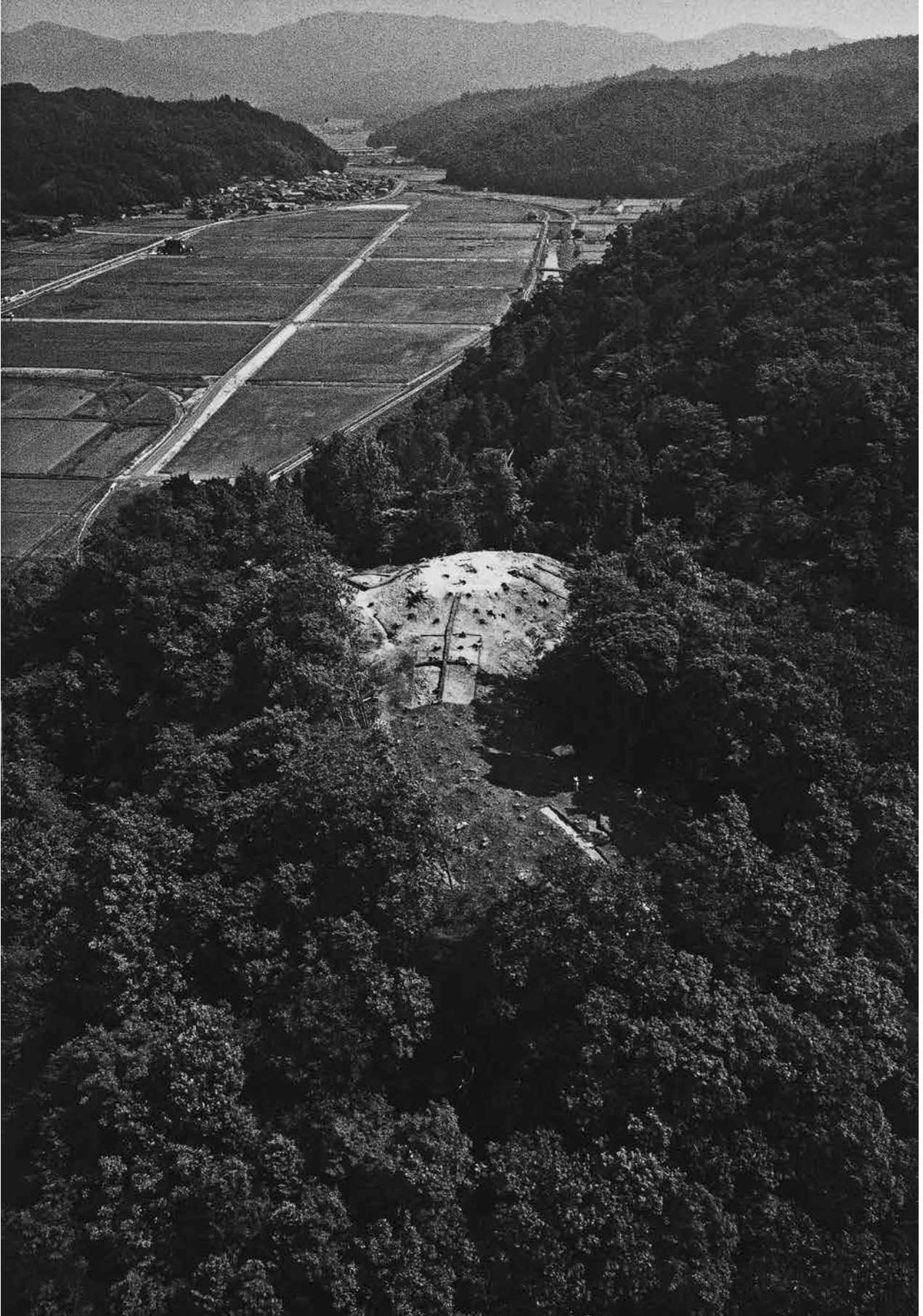
(1) 7トレンチ全景(北から)



(2) 7トレンチ東壁断面(西から)



(3) 7トレンチから北を望む  
(南から)



大内北古墳群全景(南から)



(1) 大内北古墳群全景(北から)



(2) 大内北古墳群全景(南から)



(1) 大内北古墳群全景(北東から)



(2) 大内北古墳群全景(南西から)



(1) 大内北古墳群調査前状況(南西から)



(2) 3号墳全景(北西から)



(1) 3・5号墳全景(南西から)



(2) 5号墳全景(南西から)



(1) 1・2号墳調査状況(南東から)



(2) 1・2号墳調査状況(北から)





(1)大内北古墳群全景(上が北東)



(2)大内北古墳群全景(上が北東)



(1) 埋葬施設 S X01 検出状況 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X01 天井石 (北西から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨上面(北西から)



(2) 埋葬施設 S X01 石槨(北西から)



(1)埋葬施設 S X01石槨(東から)



(2)埋葬施設 S X01石槨(南から)



(1) 埋葬施設 S X 01 石槨西側部、遺物出土状況(東から)



(2) 埋葬施設 S X 01 石槨北壁(南から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨裏込め石(南から)



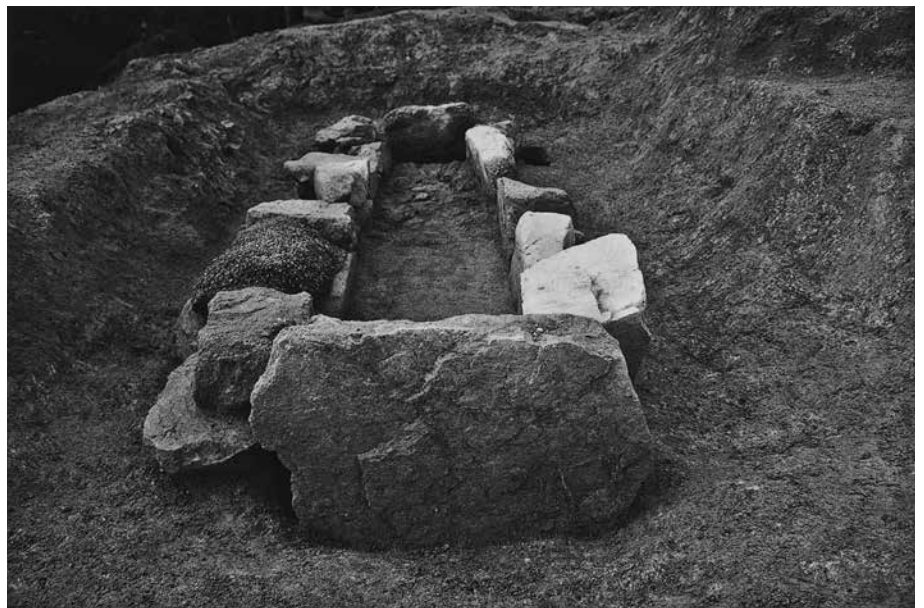
(2) 埋葬施設 S X01 石槨最下段側石(西から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨最下段側石  
(東から)



(2) 埋葬施設 S X01  
石槨西壁裏込め石(西から)



(3) 埋葬施設 S X01  
石槨西壁背後支石(西から)



(1) 埋葬施設 S X02・03 検出状況 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X02・03 検出状況 (南西から)





(1) 埋葬施設 S X02 蓋石 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X02 蓋石 (北東から)



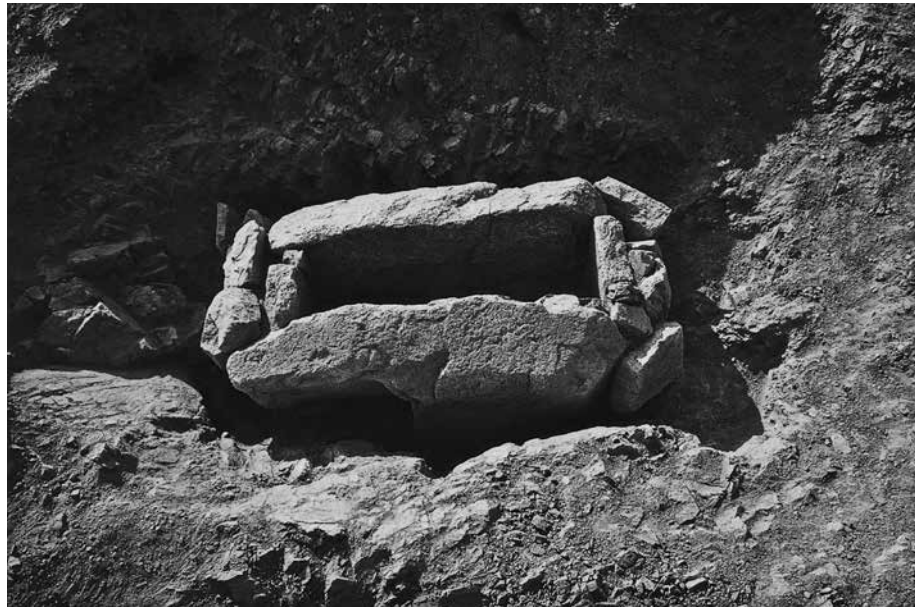
(1) 埋葬施設 S X 02 石棺上部 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X 02 石棺 (南東から)



(1) 埋葬施設 S X02 石棺 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X02 石棺 (南東から)



(3) 埋葬施設 S X02  
石棺壁面赤色顔料 (南西から)



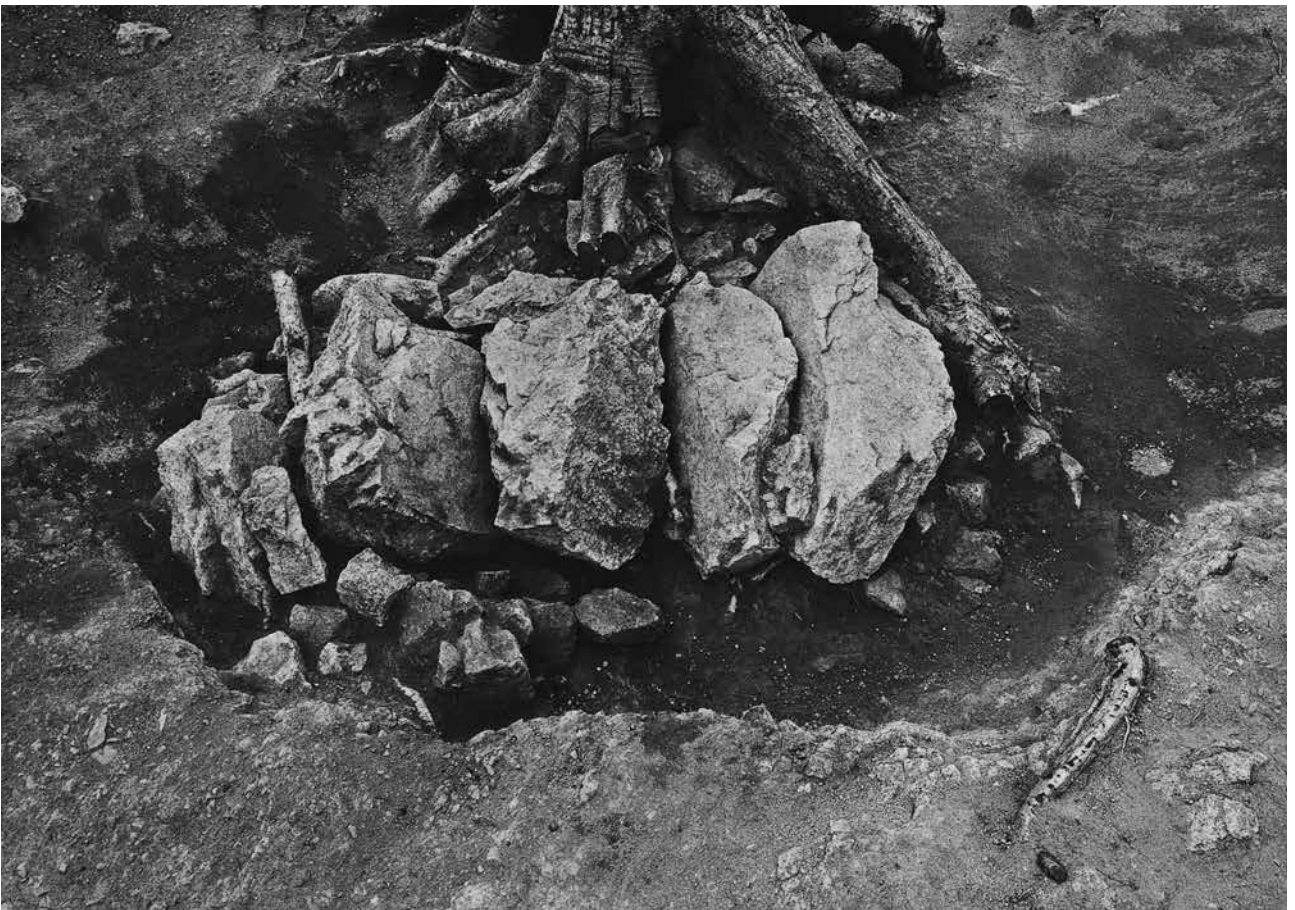
(1) 埋葬施設 S X 02 石棺 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X 02 石棺 (北西から)



(1) 埋葬施設 S X03 検出状況 (西から)



(2) 埋葬施設 S X03 (北から)



(1) 埋葬施設 S X03 蓋石 (西から)



(2) 埋葬施設 S X03 石棺上部 (北から)



(1) 埋葬施設 S X 03 石棺 (西から)



(2) 埋葬施設 S X 03 石棺 (南から)



(1) 埋葬施設 S X 05 石棺上部 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X 05 石棺上部 (北東から)





(1) 埋葬施設 S X 05 石棺 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X 05 墓壇底部 (北西から)



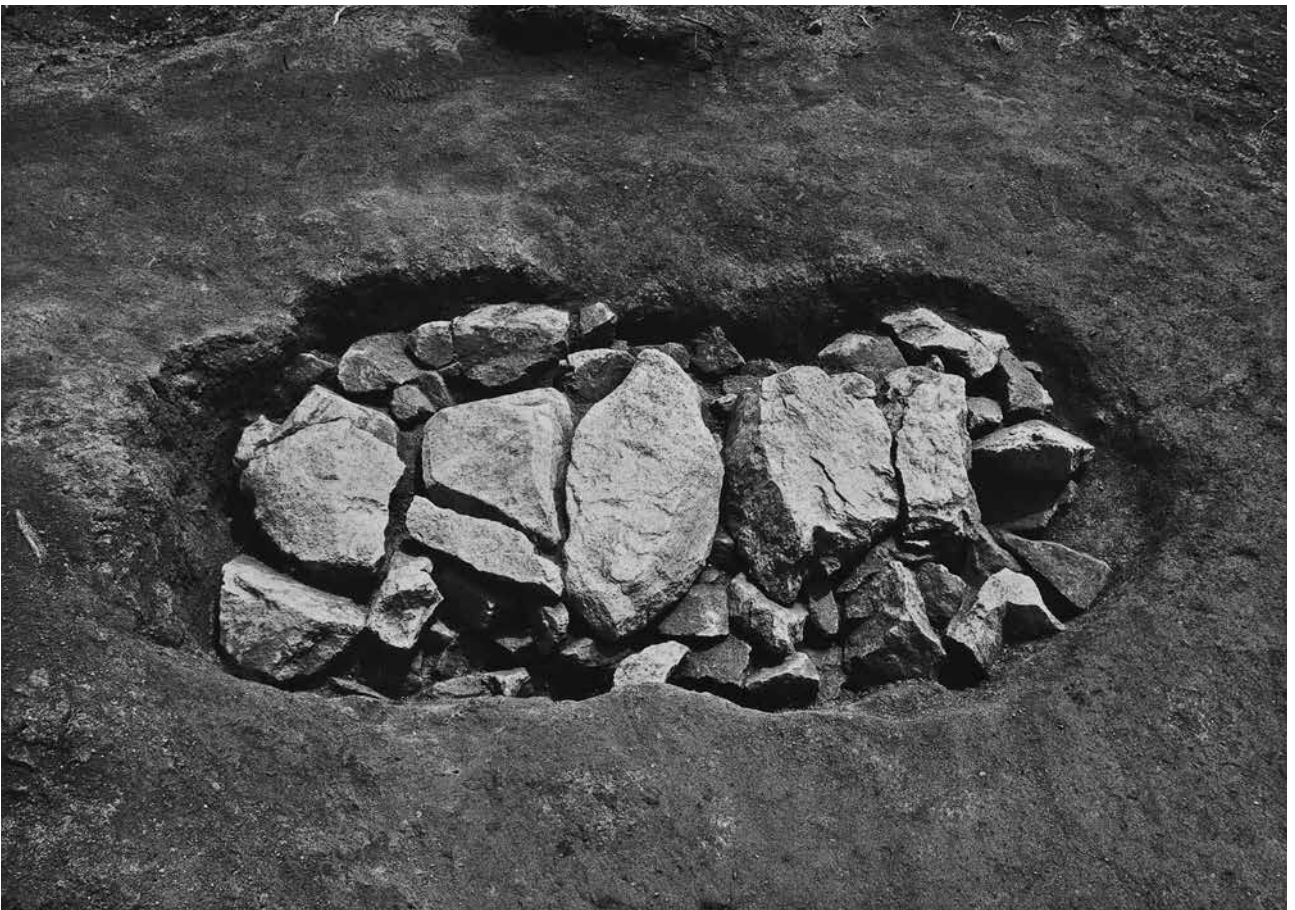
(1) 埋葬施設 S X02・03・06 全景 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X06 (南から)



(1) 埋葬施設 S X05 検出状況 (南東から)



(2) 埋葬施設 S X05 検出状況 (南西から)



(1) 埋葬施設 S X06 蓋石 (北西から)



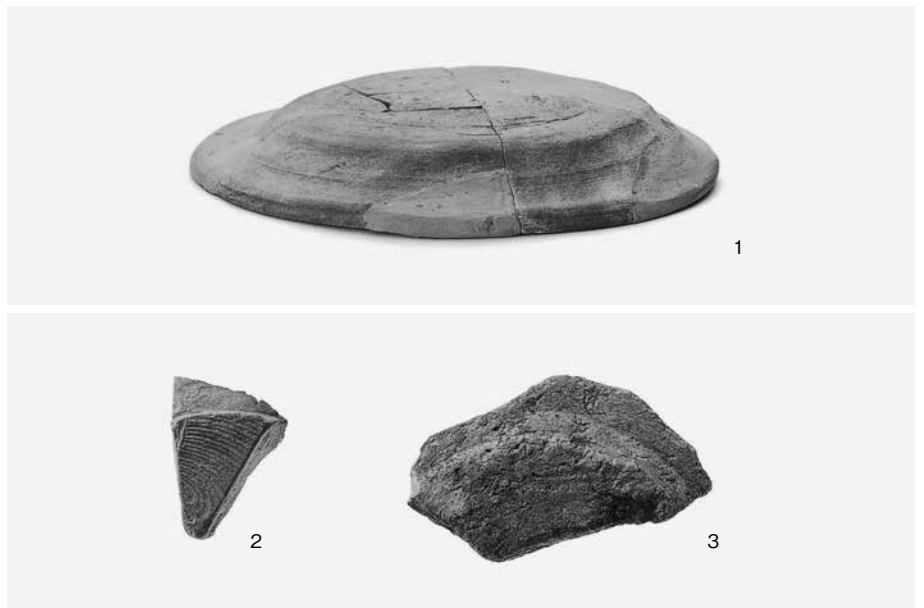
(2) 埋葬施設 S X06 石棺上部 (北東から)



(1) 埋葬施設 S X06 墓壙 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X06 (北東から)



(3) 3号墳出土遺物



(1) 埋葬施設 S X04 (西から)



(2) 埋葬施設 S X04 (南から)



(1) 埋葬施設 S X09 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X09 (北西から)

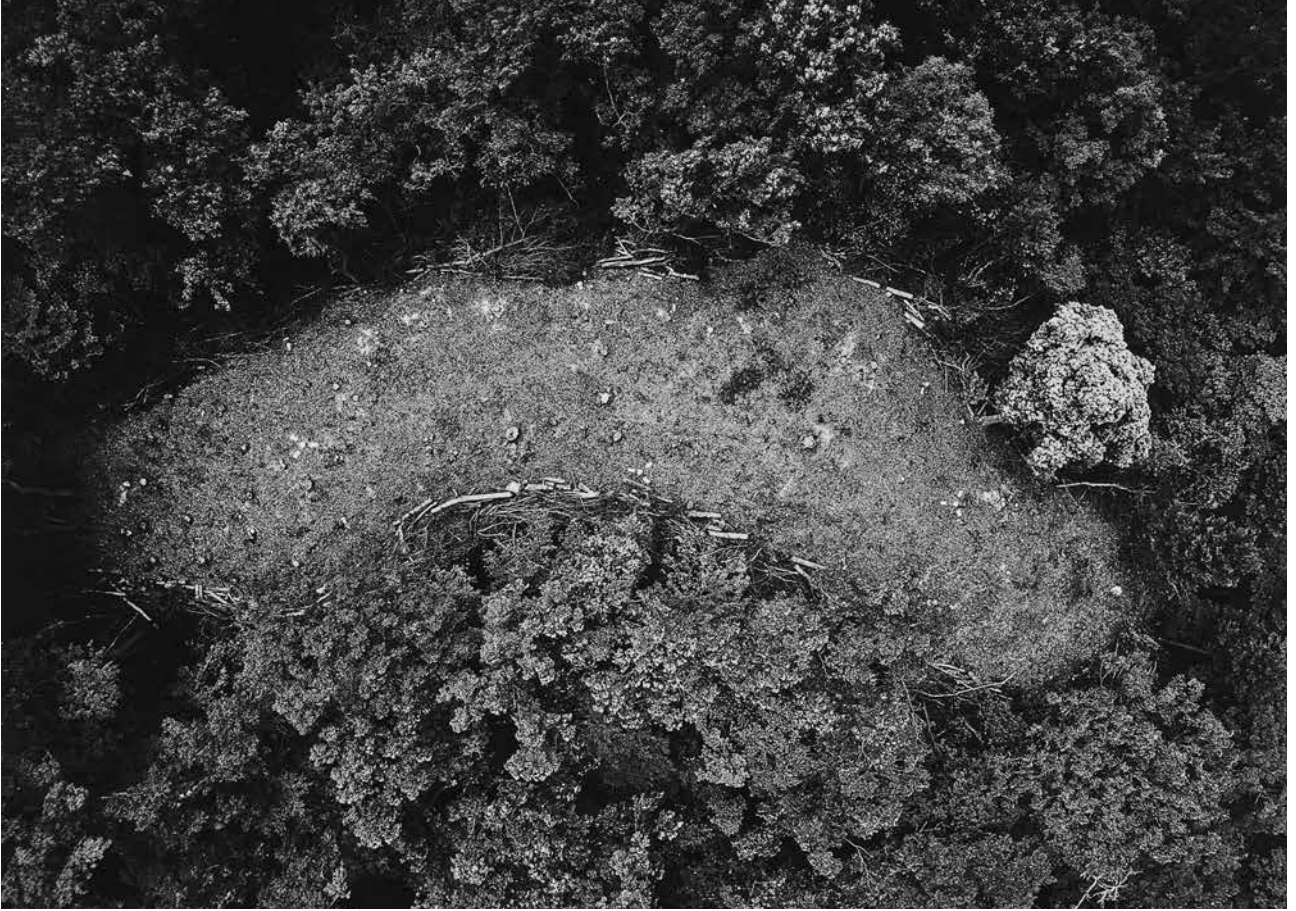


(1) 埋葬施設 S X07 ~ 09 (南西から)

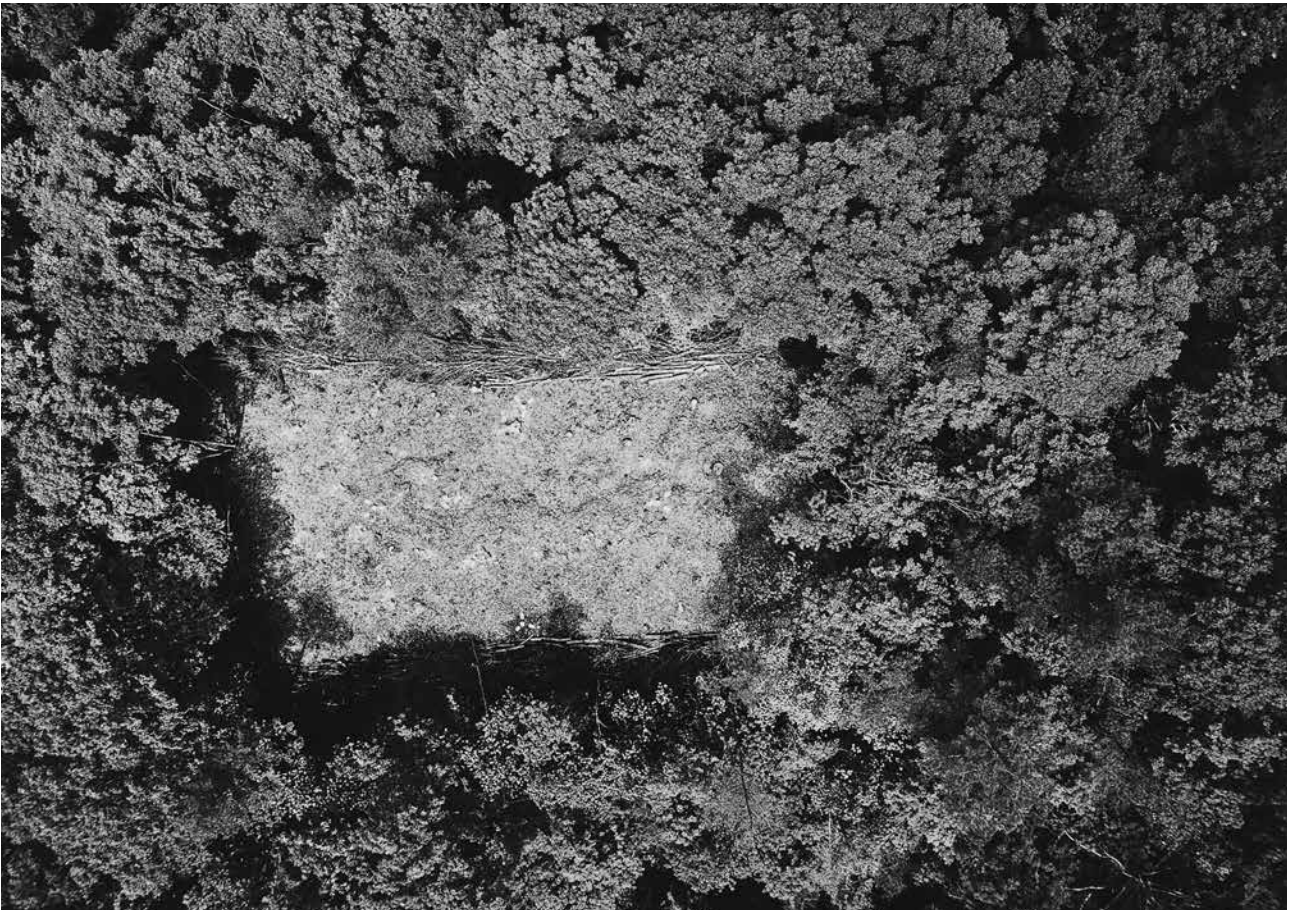


(2) 埋葬施設 S X07 ~ 09 (北西から)





(1) 2地区古墳状隆起全景(上が北)



(2) 3地区古墳状隆起全景(上が西)



(1) 1 地区古墳状隆起調査前  
(北東から)



(2) 1 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)



(3) 3 地区古墳状隆起調査状況  
(南西から)

(1) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)

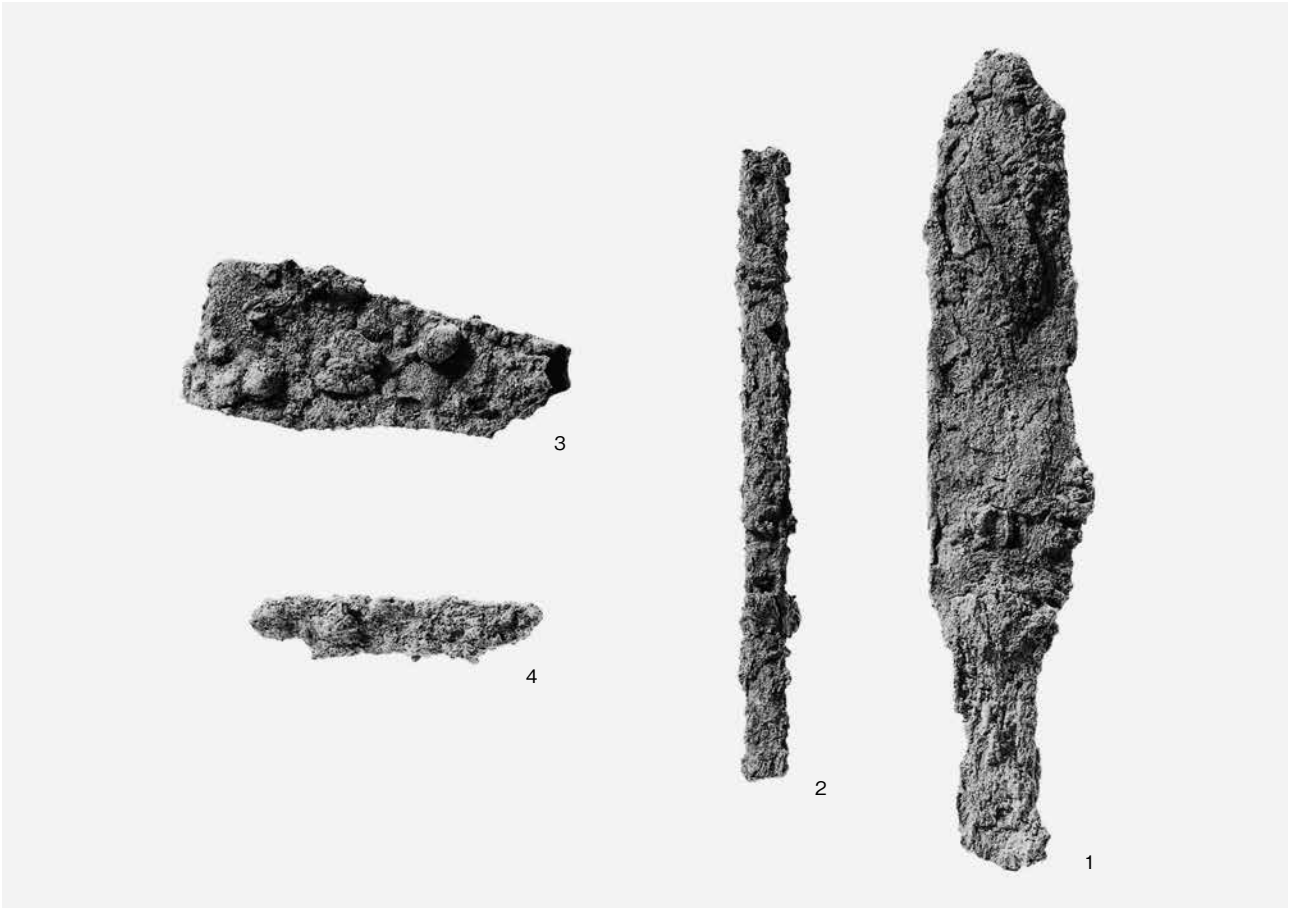


(2) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)

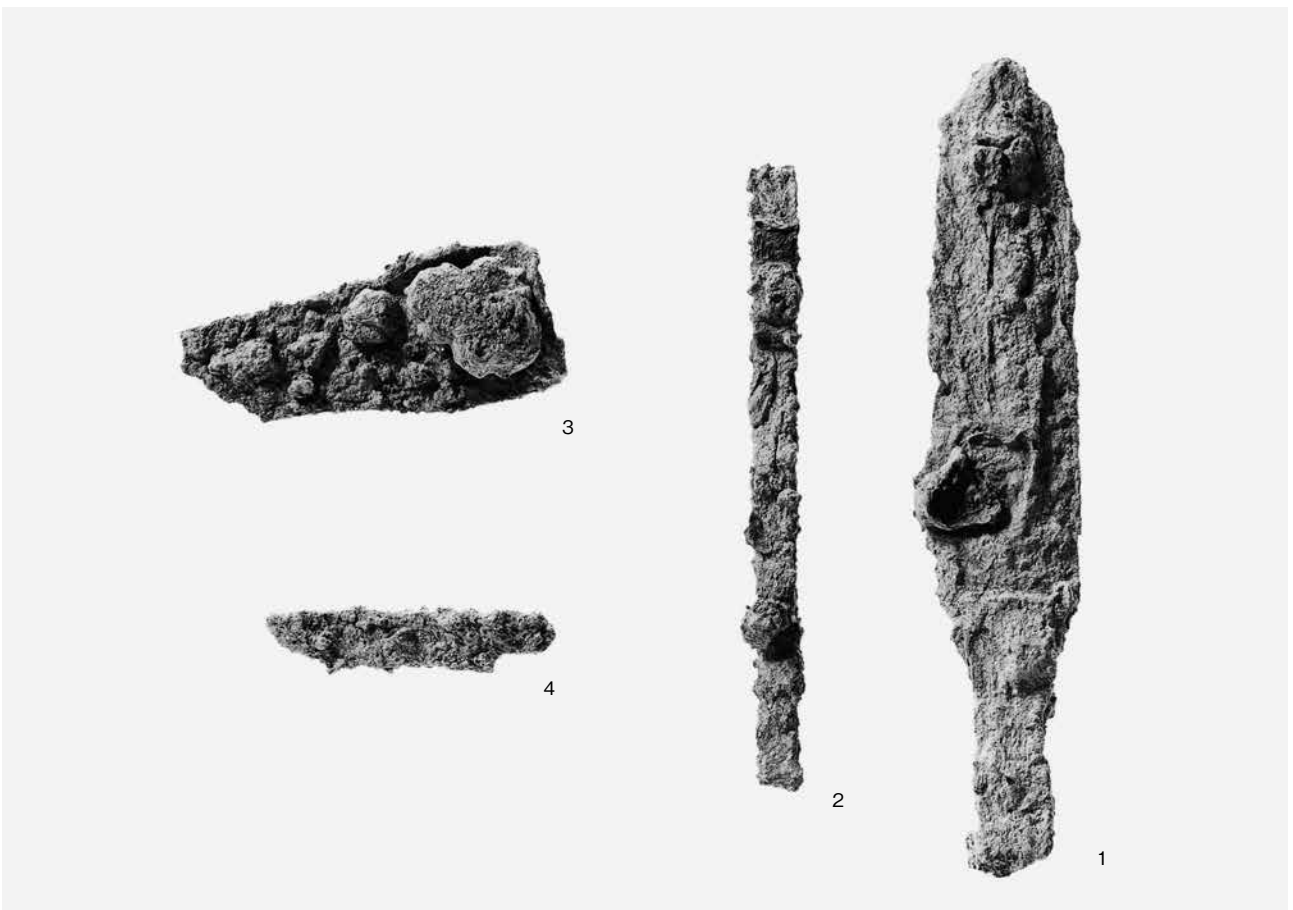


(3) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北東から)





(1) 出土鉄器(A面)



(2) 出土鉄器(B面)



(1) 調査地遠景(南から)



(2) 第 1 トレンチ重機掘削状況  
(西から)



(3) 第 1 トレンチ測量状況(東から)



(1) 第1トレンチ遺構検出作業状況  
(北西から)



(2) 第1トレンチ南壁堆積状況  
(北から)



(3) 第1トレンチ完掘状況(西から)

(1) 第2トレンチ荒掘り状況  
(東から)



(2) 第2トレンチ遺構精査状況  
(東から)



(3) 第2トレンチ実測作業状況  
(北東から)





(1) 第 2 トレンチ完掘状況  
(南東から)



(2) 第 2 トレンチ完掘状況(西から)



(3) 調査終了後、重機による埋め戻し作業状況





(1)松田遺跡調査地全景(西から)



(2)松田遺跡調査地遠景(東から)



(1)松田遺跡調査地全景(上空から、右が北)



(2)掘立柱建物跡S B 2~4全景(上空から、右が北)



(1) A トレンチ(南北)近景  
(南東から)



(2) A トレンチ(南北)近景  
(北東から)



(3) A トレンチ(南東隅)近景  
(北西から)



(1) B トレンチ(南北)近景  
(南西から)



(2) B トレンチ(東西)近景  
(南西から)



(3) B トレンチ(南北)近景(南から)



(1) 拡張区全景(南西から)



(2) 拡張区南壁断面(北西から)



(3) 拡張区西壁断面(北東から)



(1) 掘立柱建物跡 S B01 近景  
(南から)



(2) 掘立柱建物跡 S B01 近景  
(南から)



(3) 掘立柱建物跡 S B01 近景  
(北から)



(1) 溝 S D86 堆積断面 (南から)



(2) 溝 S D86 堆積断面 (南から)



(3) 溝 S D86 堆積断面 (南から)



(1) 掘立柱建物跡 S B01北側  
遺物出土状況(東から)



(2) 掘立柱建物跡 S B01北西側  
遺物出土状況(南から)



(3) 掘立柱建物跡 S B01北西側  
遺物出土状況(東から)



(1) 掘立柱建物跡 S B02 ~ 04、  
井戸 S E10・38 全景  
(上空から、右が北)

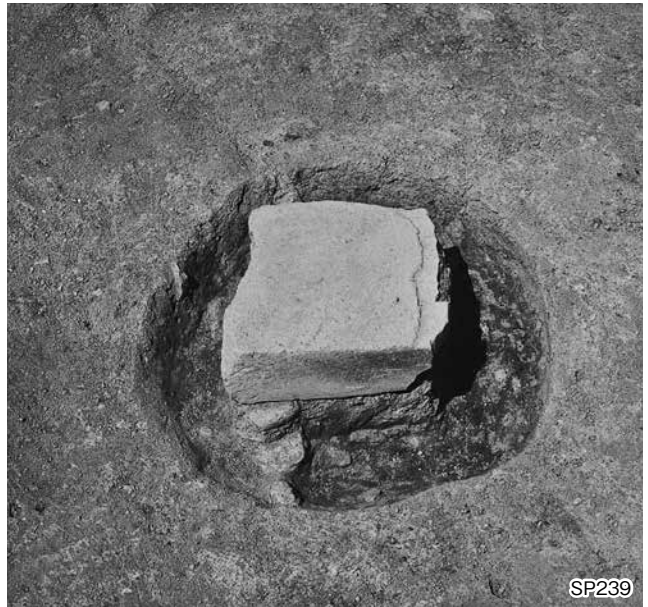


(2) 掘立柱建物跡 S B02 ~ 04 全景  
(南から)



(3) 掘立柱建物跡 S B02 ~ 04 全景  
(北から)





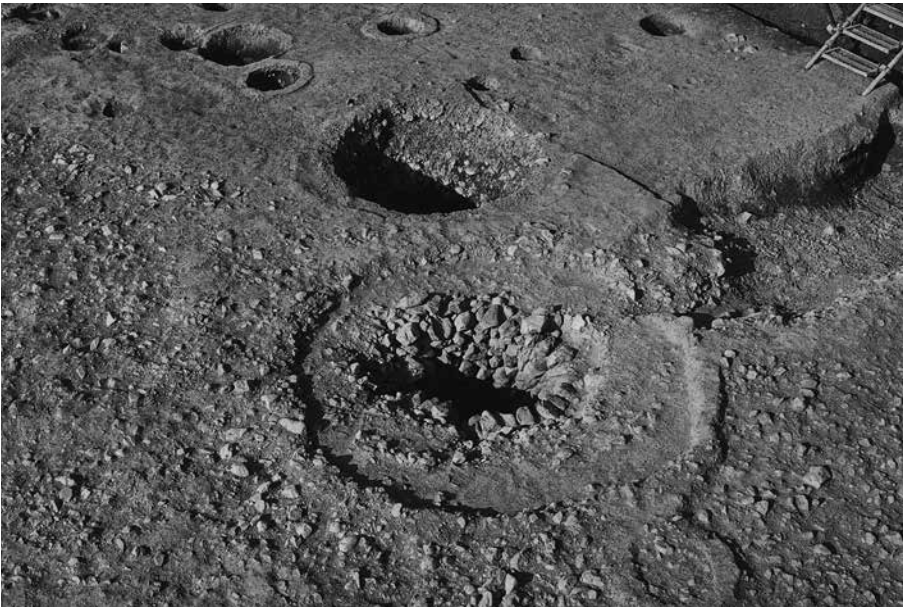
柱穴近景(根石をもつ柱穴)



柱穴近景(柱穴内遺物出土状況)



(1) 配石遺構 S K45 近景 (北から)



(2) 井戸 S E10・38 近景  
(南から、手前が S E10)



(3) 井戸 S E38 断ち割り状況  
(西から)



(1) 井戸 S E 10 断ち割り状況  
(西から)



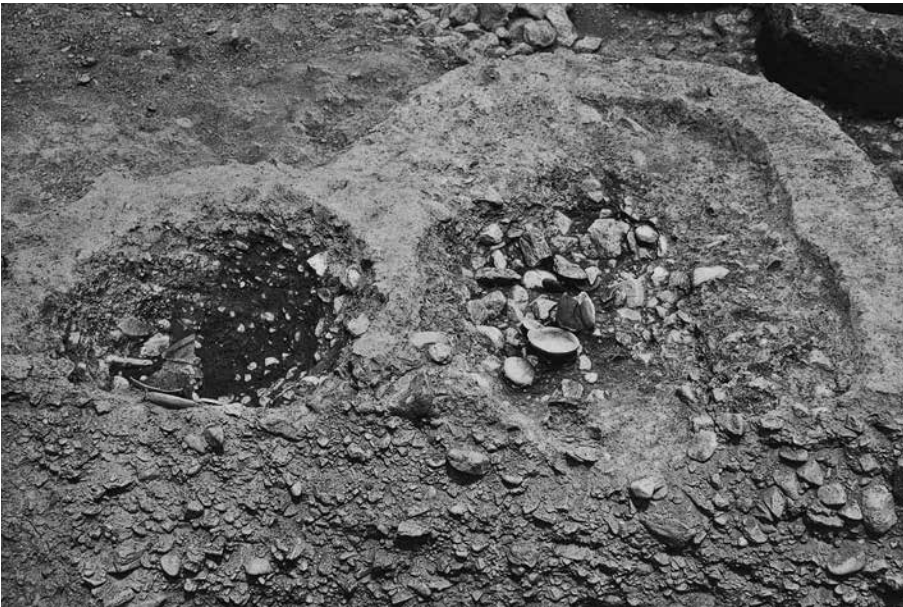
(2) 井戸 S E 10 木柁検出状況  
(西から)



(3) 井戸 S E 10 木柁近景 (西から)



(1) 土坑 S K04 近景  
(南から、上層遺物)



(2) 土坑 S K04 近景  
(南から、下層遺物)



(3) 土坑 S K04 近景  
(東から、下層遺物)



(1) 土坑 S K04 遺物出土状況  
(東から)



(2) 土坑 S K04 遺物出土状況  
(東から)



(3) 土坑 S K63 近景 (南から)



(1) 溝 S D70、3 区遺物出土状況  
(東から)



(2) 溝 S D70、3 区遺物出土状況  
(東から)

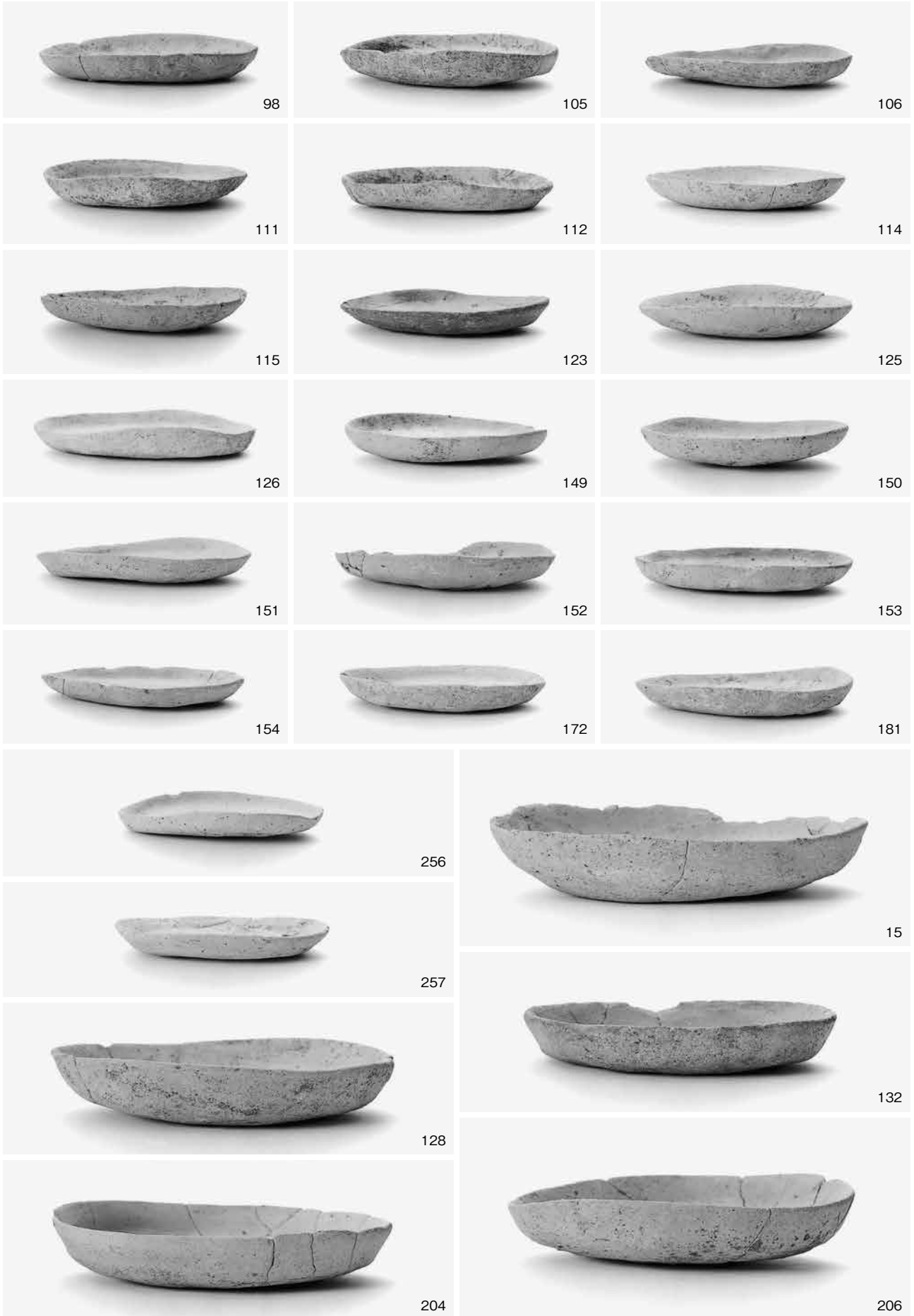


(3) 白磁合子蓋出土状況(北から)











203



203



248



248



83



189



包含層



268



275



276



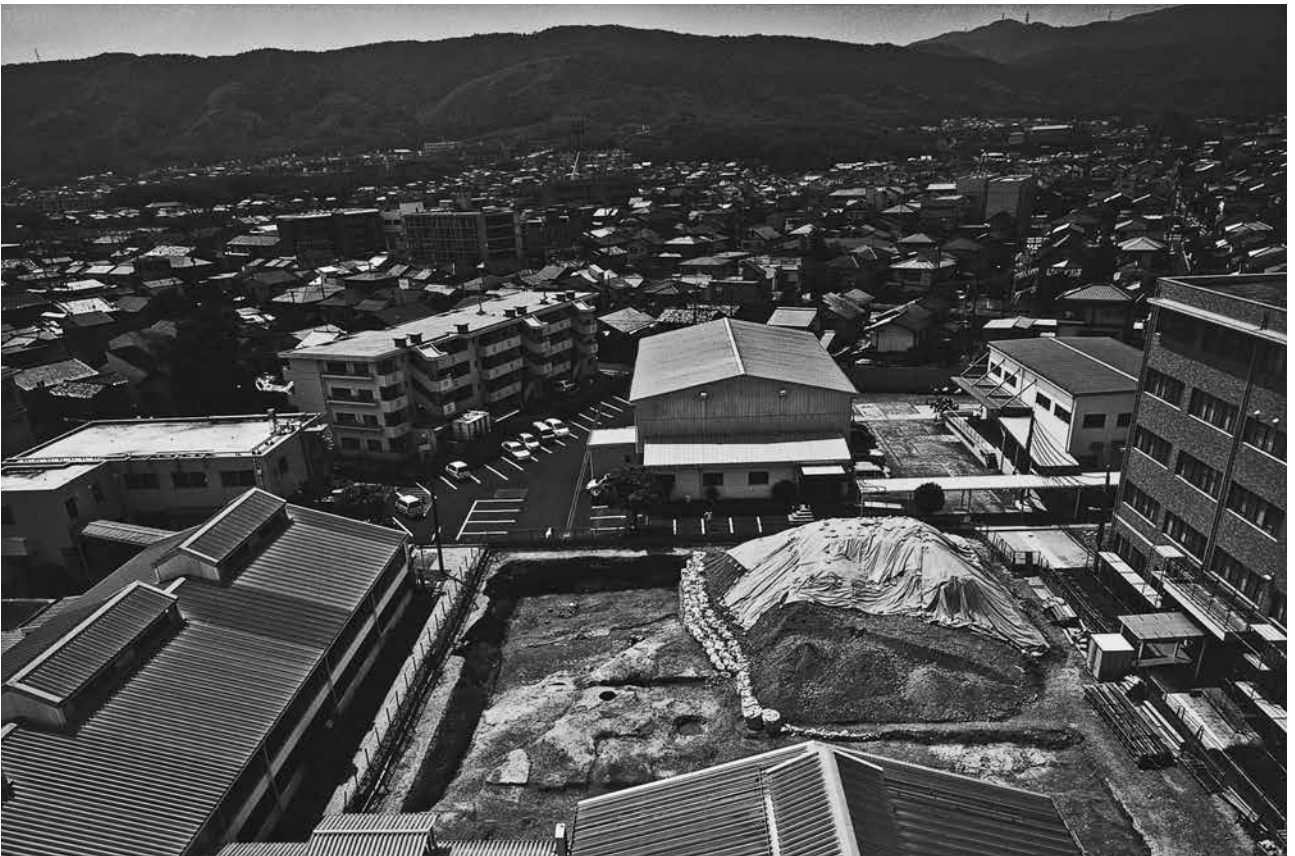
34



SP239



(1) 調査地全景 (空撮写真：北西から)



(2) 調査地全景 (空撮写真：東から)



(1) 調査地全景 (空撮写真：西北西から)



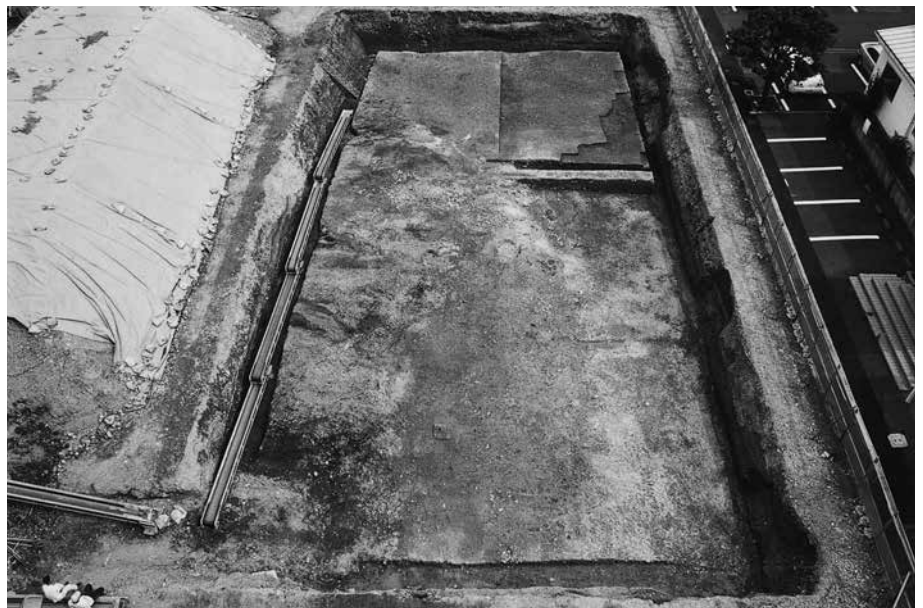
(2) 調査地全景 (空撮写真：上が南)



(1) 調査前(南西から)



(2) 西側トレンチ北部(南から)



(3) 西側トレンチ全景(北から)



(1) 調査地南部湿地状堆積 S X01  
(東から)



(2) 調査地南部湿地状堆積 S X01  
(東から)



(3) 調査地南部湿地状堆積 S X01  
(西から)





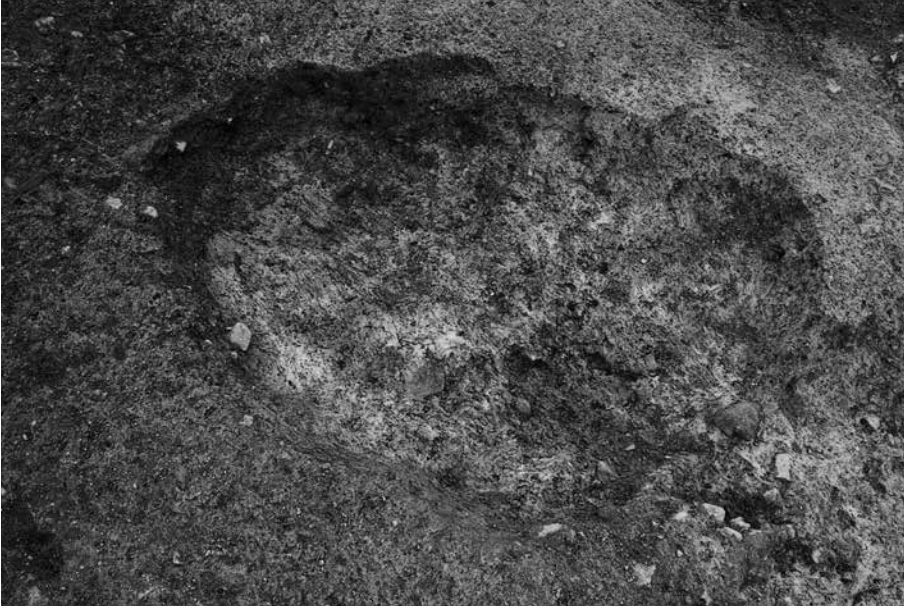
(1) 西側トレンチ北壁断面



(2) 西側トレンチ西壁断面(東から)



(3) 南東部南壁断面(北西から)



(1) 土坑 S K02 完掘状況 (東から)



(2) 井戸 S E03 (東から)



(3) 井戸 S E04 半割状況 (南東から)



(1) 土坑 S K05 半割状況 (東から)



(2) 土坑 S K05、溝 S D07  
(南東から)



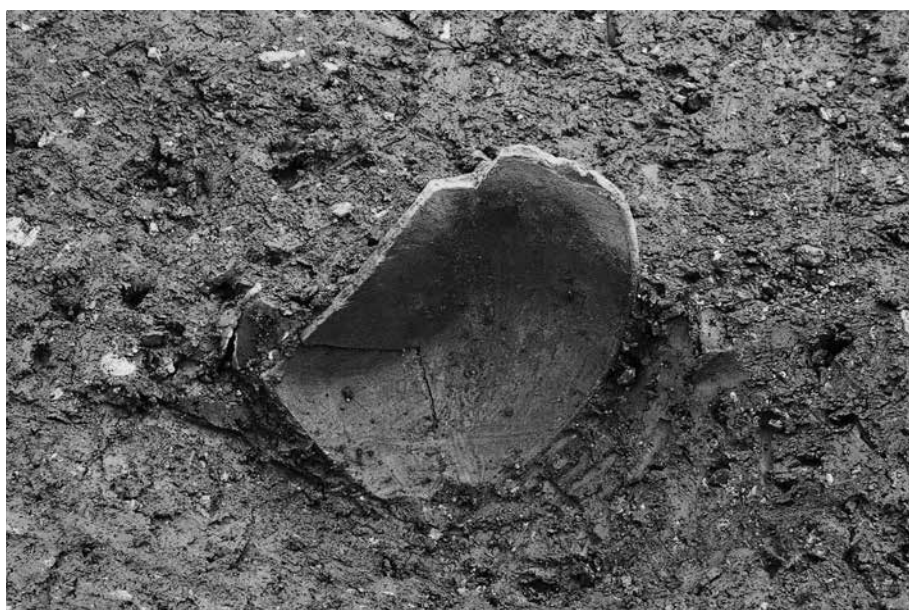
(3) 南部湿地状堆積 S X01  
南北アゼ断面 (北東から)



(1) 湿地状堆積 S X01 土器出土状況



(2) 南東部土馬出土状況



(3) 湿地状堆積 S X01 土器出土状況



(1) 南部全景(北から)



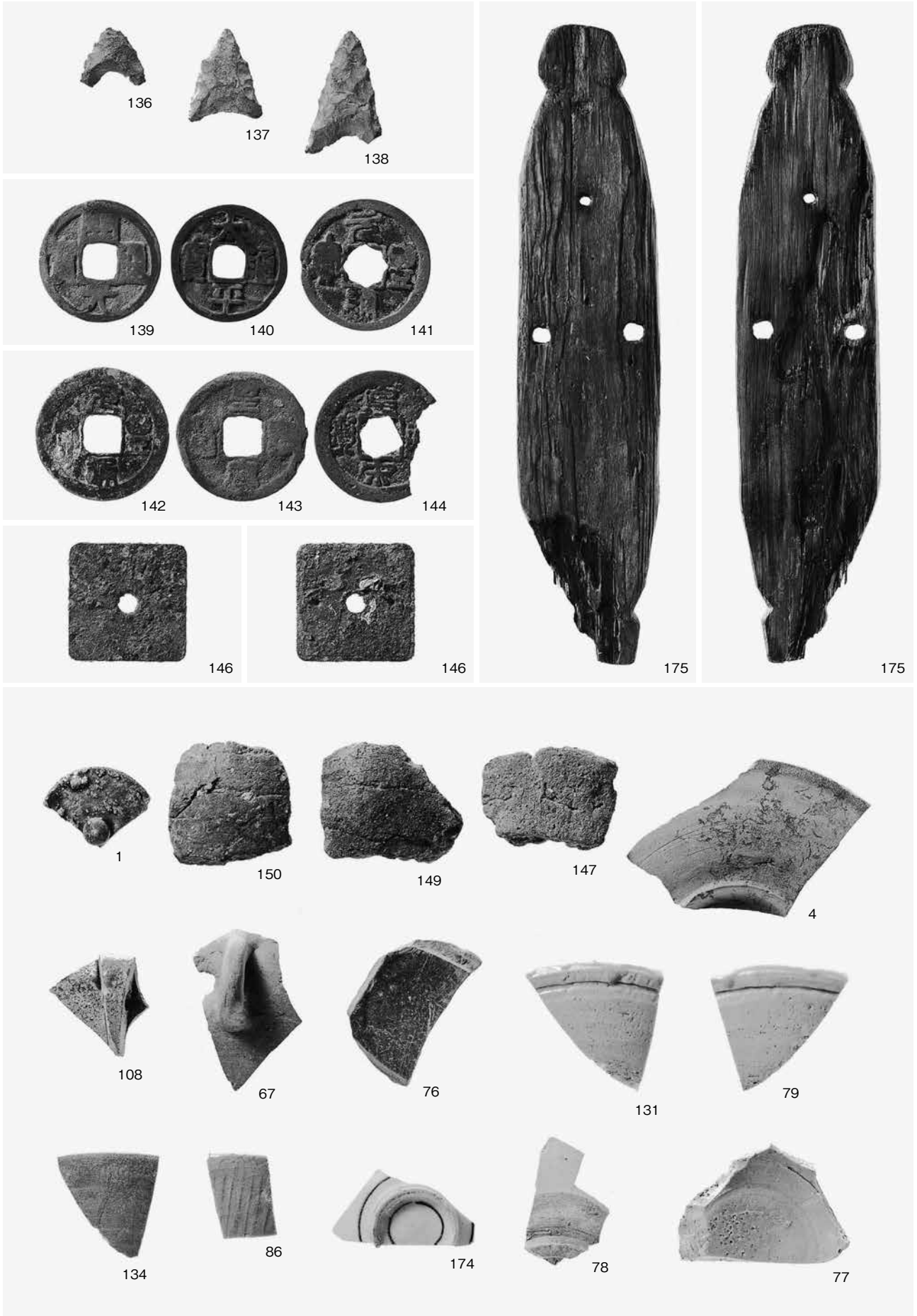
(2) 南部湿地状堆積 S X01 掘削状況  
(北西から)



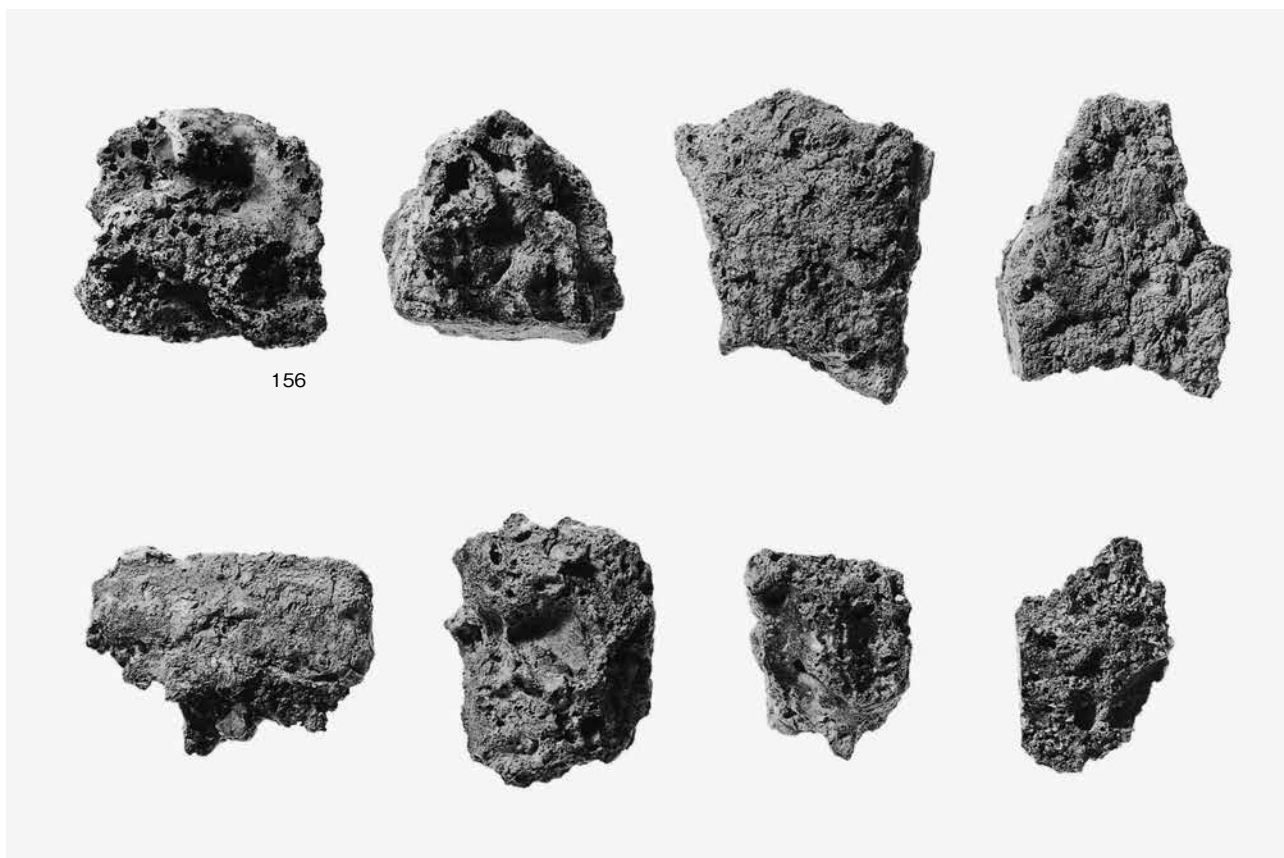
(3) 湿地状堆積 S X01 輸入銭  
出土状況



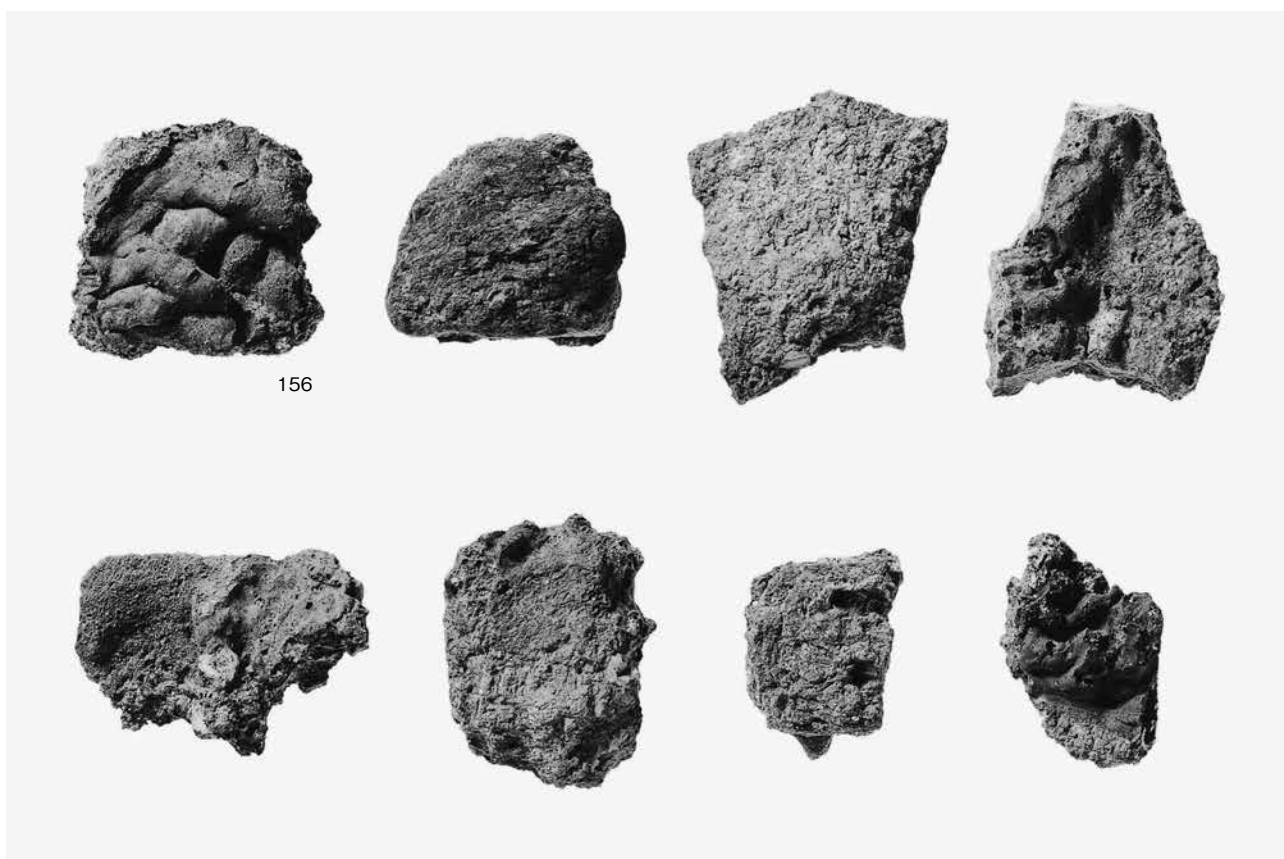
出土遺物 1 (番号は実測図に対応)



出土遺物 2



(1)出土遺物 3 (鉾滓・炉壁)



(2)出土遺物 3 裏面(鉾滓・炉壁)



報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第144冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2011年3月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	'	°	'		m <sup>2</sup>	
とっとりばしいせき だいにじ	きょうたんごし やさかちょうわ だのちない									
鳥取橋遺跡第2次	京丹後市弥栄町 和田野地内	26212	4501	35°	40' 27"	135°	05' 17"	20101117 ～ 20101221	285	道路建設
おおうちきたこふん ぐん	きょうたんごし おおみやちょう もりもとほしの うち、みえおお うち・おおいけ									
大内北古墳群	京丹後市大宮町 森本星ノ内、三 重大内・大池	26212	6199	35°	34' 29"	135°	07' 24"	20100430 ～ 20100922	1,200	道路建設
かつかいせき	かめおかしやす まちこやば									
加塚遺跡	亀岡市安町小屋 場	26206	63	35°	00' 49"	135°	34' 09"	20101208 ～ 20110118	300	道路建設
ながおかきょうあ とうきょうだいきゅう ひやくきゅうじゅう ななじ・まつだいせ き	おとくにぐんお おやまぎきちよ うえんみょうじ まつだ									
長岡京跡右京第997次 ・松田遺跡	乙訓郡大山崎町 円明寺松田	26303	18・23	34°	54' 23"	135°	41' 31"	20100602 ～ 20100929	1,890	道路建設
ながおかきょうあ とうきょうだいきゅう ひやくきゅうじゅう はちじ・ともおか いせき	ながおかきょう しともおかい つちょうめにばん いちごう									
長岡京跡右京第998次 ・友岡遺跡	長岡京市友岡1 丁目2番1号	26209	97・107	34°	55' 07"	135°	41' 29"	20100522 ～ 20100910	1,200	庁舎建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥取橋遺跡第2次	集落跡	中世	川跡(河川内堆積土)	土師器・須恵器・陶磁器	
大内北古墳群	古墳	古墳 平安	竪穴式石槨・箱式石棺・木棺	槍先・鏝・刀子・鎌 須恵器	
加塚遺跡	集落跡				遺構・遺物の検出なし
長岡京跡右京第997次・松田遺跡	集落跡 集落跡	古代 中世	掘立柱建物跡・柵列・井戸・土坑・溝・柱穴群	土師器・須恵器・土馬 土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中国製陶磁器・貨幣・硯・石鍋	
長岡京跡右京第998次・友岡遺跡	集落跡 集落跡 集落跡	縄文 古代 中世  近世	(湿地状堆積内) 掘立柱建物跡・柵列・井戸・土坑・溝・柱穴群・炉跡・湿地状堆積 井戸	石鏃 土師器・須恵器・土馬・製塩土器 土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中国製陶磁器・貨幣・硯・田下駄・鉈滓・炉壁 陶磁器	

所収遺跡名	要約
鳥取橋遺跡第2次	7か所のトレンチを設定したが、いずれのトレンチも耕作土・旧耕作土の下には砂・小砂礫などが堆積しており、安定した面がなく、遺構を検出できなかった。竹野川の旧流路もしくは氾濫原と判断されるものである
大内北古墳群	大内北古墳群は5基の古墳からなる古墳群と考えられていたが、調査の結果、3号墳のみで埋葬主体部を検出した。3号墳は墳頂部に9基の埋葬主体があり、当地域における有力者の家族墓(集団墓)と想定される。竹野川下流域には巨大前方後円墳が造られており、竹野川中～上流域の在有力者層のあり方を考えるうえで、新たな資料を提供した。また、大内北3号墳のある1地区の300m、600m南西側の2・3地区において古墳状隆起の調査を行ったが、古墳ではないことが判明した
加塚遺跡	加塚遺跡は、須恵器や土師器が散布する遺跡として知られていたが、調査の結果、後世の削平により遺構面が失われており、遺構・遺物を全く検出できなかった
長岡京跡右京第997次・松田遺跡	13世紀から14世紀前半にかけての掘立柱建物跡群・柵列・溝跡・井戸跡などを検出した。これらの遺構群は、南北14m、東西15mの約210㎡の空闲地を囲むように配置されていること、建て替えもこの空闲地を確保するように行われていること、白磁の合子蓋・中国製青磁や白磁、石製の硯や青銅製の水滴などが出土していることから、この付近での有力者の屋敷地であったと考えられる
長岡京跡右京第998次・友岡遺跡	埋没した谷内から、中世の遺物に混じって奈良～長岡京期の土器や土馬が出土したことから、この時期に周辺に人びとが生活していたこと、水辺の祭祀がおこなわれていたと推定される。中世(13世紀以降)には須恵器・土師器・瓦器・青磁などの土器類、田下駄や自然木を含んだ粘質土が堆積した時期があり、何らかの原因で堰き止められ湿地化していたと推定される。鉈滓や炉壁が多数出土し、理化学分析の結果、鉄鑄物の製作に用いられたた可能性が高い

京都府遺跡調査報告集 第 144 冊

平成23年 3 月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141